

郡徹は転生者である

シンマドー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼は転生者でありイレギュラー的存在だった。

彼には決まってしまった運命を変える力があった。

彼はその力を使い彼女達の運命を変えろと、使命を与えられた。

これは、郡徹として生まれ変わった彼が使命を果たす物語である。

# 目次

プロローグ	選ばれた転生者	1
第一話	転生者、そして兄として出来ること	7
第二話	妹を助けるのは兄の役目	13
第三話	一人の勇者と一人の巫女	21
第四話	勇者たちと転生者	30
番外編	諏訪で起きた奇跡	41
第五話	初陣での転生者の行動	48
第六話	優しさと感謝	56
第七話	二回目の侵攻と兄妹の買い物(デート)	64
第八話	ある意味忘れられない一日	72
第九話	遠征、そして警告	79
第十話	天の神からの転生者	86
第十一話	怒り	92
第十二話	帰還	97
第十三話	模擬戦にて	103
番外編	レッツ農業!	111
第十四話	進化	117
第十五話	力の対価	123
第十六話	初めて対価で失ったもの	129
第十七話	当たり前の日常	135
第十八話	偶然出会った巫女	141
第十九話	浄化の剣	148
第二十話	疑問と神託	154
番外編	出会う二人	159

第二十一話	助けを願う	162
第二十二話	イレギュラー郡徹の真実	168
第二十三話	試練	171
第二十四話	絶望の中に希望あり	176
第二十五話	罨	181
第二十六話	静寂なる暗闇を望む	186
第二十七話	作られた英雄と白犬	191
第二十八話	自分は郡徹として生きる	195
第二十九話	長すぎる説教	199
第三十話	空島	202
第三十一話	約束	205
第三十二話	みんなに知ってほしい	209
第三十三話	正義と正義の戦い	214
第三十四話	たった一人を救うために	219
第三十五話	反撃開始	224
第三十六話	決着	231
エピローグ		237

## プロローグ 選ばれた転生者

突然起こったことだが、目が覚めて起きたところ知らないところ  
いた。

周りを見ても何もなく、ただ真っ白な空間に自分だけがいる状態  
だった。

自分はたしか部屋のベットで寝ていたはずだ、それなのにここに来  
たということは、それはもう神様のいたずらに巻き込まれたか自分が  
寝ている時に何かがあったとしか考えられない。

「とりあえずこれからどうしよう……」

そう悩んでいた時だった

「ようやく目を覚ましましたか○○様」

声が出た方向を振り替えるとそこにいたのは

白髪ショート、巫女装束を着た、天使のような顔立ちをした女性  
がいた。

「今回あなたを無断でここにこさせてしまい申し訳ございません。

私は人々に幸福を与える神、姫神と申します。」

姫神は俺に謝罪してから自分の名を言った。

ふくん、どうやら俺は姫神という神に連れてこられたと言うこと  
か、てか神様が目の前にいるのに驚かない自分が怖いんだが、順応性  
高すぎだろ。

「あのくあなたは驚かないんですか？

普通の人だと私が神様だと信じず文句ばかり言ったり、神様が目  
の前にいることに驚いて軽いパニックを起こしたりしますが、そうい  
うのはあなたが初めてですよ。」

「ですよ、自分もそう思いました。

そんなことより、なぜ自分がここにいるのか聞いてもいいですか？  
自分が寝ている間に何かあったのかも知りたいですし。」

もうちよつと話していたかったがそろそろ本題に入ったほうがいい  
だろう。

そう言った途端、さつきまで微笑みながら話していた姫神が急に真剣な顔になった。

「そうですね、そろそろ本題に入りましょう。」

まず最初にあなたが寝ている間に起きたことですが……」

姫神が自分に何があつたのか語りだすことに自分は生唾を飲む

「何もありませんでした」

「……えっ?」

あまりにも予想外な答えに思わず啞然する。ということは俺は死なずにここに来たということか、これは一度聞いたほうがいいだろう。

「あの、そうなる僕には死なずにここに来たということですか?」

「はい、そういうことになりますね。」

まじか、普通転生ものつて死んでからが始まりじゃないの?

いや待てよ、まだ突っ込んではいけない、何か事情があつたに違いない。ここは落ち着いて話をきこう。

こういう転生が普通という可能性があるかもしれないし。

「姫神さん、こういうのはよくあるんですか?」

「ありませんね、今回が初めてです」

なんてこつたい、これはあれか、あらての神様のいたずらかまさか最初に自分がいったことがほんとなるとは思ってもしなかつたよ。しかも、こんなきつぱりといっちゃうなんて。

「そ、そうですか……えっと……でしたら次に、なぜ自分がここにいるか聞いてもいいですか。」

「はい、今回あなたが死なずにここにいる理由は……あなたが選ばれた人ですからです。」

「選ばれた人……一体誰に?」

「私達神と同じ……いえ……神になったと聞いたほうがいいでしょう、あなたは英雄と呼ばれた男に選ばれたのです。」

「なっ……!?!」

俺が選ばれた人だつて……一般人の俺が?

しかも、英雄と呼ばれた男に……なぜ俺が、謎すぎる。

「どういうことですか！なぜただの一般人の自分が選ばれたのです!?!」

「それはいえません…本人からも言わないでくれって言われましたからね。」

「だったらそいつに会わせてくれ！話がしたい！」

「できません、彼は神になった代償として死にました。」

「ふざけんなよ…勝手に決められた挙句に理由も言わずに死んだだと…」

あまりにも理不尽すぎることに拳を固く握る、強く握りすぎて血は出るがそれでも握り続けた

「辛いことだと思いますが、彼は最後私にこれをあなたに渡して欲しいと頼まれました。」

「渡して欲しいもの…?」

姫神が自分に向けて手をかざしたとき何かが自分の頭に入る感覚がした。

感覚が収まった時急に多くの情報と知らない単語が頭に出てくる。

「くっ…い」

あまりにも立っていられないほどの目眩と頭痛がしたため頭を手で押さえ膝を付く。

そして、多くの情報と単語が流れているとき、自分の知らない記憶が映し出された。

それは、『勇者』そして『巫女』と呼ばれた少女達が『バーテックス』と呼ばれる化け物と戦う、悲しくそして、救われない記憶だった。

その記憶は次々と映し出された。

諏訪を守るためにたった一人の勇者と一人の巫女が立ち向かう記憶。

大勢の罪なき人々が殺されバーテックスに必ず報いを受けさせる

と決意し戦う勇者記憶

ある勇者と幼馴染の関係で、その勇者の精神的支えになっている巫女の記憶

みんなに明るく元気に振る舞い、人一倍に周りを気にする勇者の記憶

家庭に恵まれず、人々にも嫌われ自分の価値が勇者でしか必要とされず、ただ戦う勇者の記憶

自分が女の子らしくないと実感し、自分にはないものを持つ少女を守ろうと決意する勇者の記憶

大人しくも思いやりがあり、幼少期体が弱く周囲からの気遣いと距離感に疎外感を抱き、自分が物語の王子様のような人に救われることに憧れている勇者の記憶

二人の勇者をよく気にかけており、二人が亡くなった際後悔の涙を流す巫女の記憶

すべての記憶は見終わり元の光景に戻った。その時にはもう目眩や頭痛が収まっていた。

「これは…一体なんなんだよ」

「彼女たちがこれからだだろうとする記憶です」

「これが…彼女たちがこれからだだろうとする記憶だと…」

ふざけんな…そんなの…悲しすぎるだろうが！

「なあ…姫神、なぜあいつはこれを俺に渡そうとしたんだ。」

「それは、あなたがこれからやることに関係しております。」

「自分がこれからやることに関係している？」

「はい、彼はあなたに使命を出しました。」

「使命？一体何をしたらいいんだ？」

「彼があなたに出した使命の内容は、彼女達の運命を変えることでず。」

「運命を変える…？」

出来るのか？一般人の自分が。

「普通運命を変えることは出来ませんが、抑止力が働いて同じ結末に



なってしまうのです。でも、あなたは違った。あなたは運命を変えても抑止力が働かずそのまま新しい運命に上書きすることが出来るのです。」

「それってつまり、俺には抑止力を無効化する力があるということか？」

「はい、そういうことになります。」

あなたには、これから彼女達の世界に転生してもらいその力で彼女達を救うのがあなたにしか出来ないことです」

「俺にしかできない……だが一体どうしたらいいんだ？」

俺には戦う力なんて一切持ってないぞ、相手はバーテックス？ていう化け物だろ勝てる自信がないんだが」

「そこら辺は安心してください、あなたが転生する際に力を与えますので。」

「そうか、なら安心して行けるな」

「ふふっ」

突然姫神がくすりと笑った。

自分は何も面白いことなんて言っていないんだが

「俺、なんかおかしいこと言いました？」

「いえ違います。」

ただあなたが断るんじゃないかとひやひやしましたが、行く気満々だったので少し安心して笑っちゃったんです。」

「あっ」

たしかに今なら引き返すことはできる、でも

「俺も最初は断ろうかと思いましたが。だけど俺は彼女達の記憶を見て思ったんです。なんで彼女達が苦しまなくてはいけないのか、彼女達が苦しむのなら俺が代わってやりたいと。そしたらあんたは俺にチャンスを与えたんだ、彼女達を救うチャンスを、だったら俺は受けてやるよ、選ばれた人として。」

「そうですか、ならばやく彼女達のいる世界に転生させますね。」

「ちよつと待ってくれ……最後に少し質問していいか？」

姫神に待ったをかける

「どうしました?」

姫神がきよとんとした顔になった

「これだけは聞ききたいんだが、転生したとき俺がどんななるのかわからないんだが……」

さすがにこれだけは聞かないと色々とだめだろって自分でも思った。転生したさい、変なところに飛ばされたら埒が明かない。

「それなら大丈夫です。あなたの転生先は決まっております。ちゃんと彼女達と接触できるように設定されてますので。」

「決まっているか……まあ、まだランダムよりはましか、後はこっちで何とかするよ。」

「わかりました、それではあなたを彼女達がいる世界に転生させますね」

そういい姫神はまた自分の方向に手をかざす。手をかざした瞬間急に眠気がきた、それは段々と強くなり、そして自分はゆっくりと意識を落とす。

「お休みなさい。またいつか会いましょう。」

それが最後に聞いた言葉だった。

## 第一話 転生者、そして兄として出来ること

郡千景

彼女の記憶は悪夢としか思えなかった。

家庭での不幸が災いし、周囲の人々に嫌われた。

誰一人も彼女の味方にならず、ただ体と心が傷つけられる毎日だった。

彼女が勇者として選ばれたとき、周囲の人々は一変した。それが原因で彼女は変わってしまった。

みんなが勇者である自分に価値があると信じてしまい、彼女は勇者として戦い続けた。

たとえそれが間違っていたとしても：

もし、自分が彼女の味方になれるのなら、自分は喜んで彼女の味方となろう。

それで彼女が救えると信じて。

自分はここ、四国の高知県で双子として生まれた。自分は郡徹、そして、後から生まれた子を郡千景と名付けられた。

生後一ヶ月が経ち、自分たちは病院からこれから住む家に移された。

自分たちが住む家は普通の一軒家だった。この時両親は、これからこの家で幸せな家庭を築いていこうと考えているだろう。でも、自分は違った。まだ自分は赤ん坊のため顔には出てないと思うが、自分は転生者で彼女達の記憶を見たからこそ言える、そんなのただの理想郷にすぎないと、これから起こることは郡千景の記憶で知っている。

でも、今の自分はただの赤ん坊のためなにもできない、だから今は焦らずその時がくるまで準備をしよう。

夜、家具の配置や家事、自分たちを寝かしつけるなどで両親は疲れがたまってしまうすぐに寝てしまった。

そんななか、自分だけが寝たふりをしていた。両親が寝たことを確認し、これからのことを考えた。

まずは自分のことから整理しよう。

最初は転生特典から確認しよう。

まず重要なのは自分の使命と彼女たちの記憶だ。これがなければ始まらないからな、あとおまけ程度に前世で得た知識と転生するまでの姫神との話した記憶も付いてきた。でも、その代償なのか知識以外のことは全部なくなっていた。まあ、どうでもいいことなので別にい

いが  
次にバーテックスに対抗できる力だが、転生したさいその力の名前と詳細が頭に入ってきた。

その名は、『武器召喚』武器を念じれば召喚でき、それを意のままに操ることができる。複数召喚もでき、空中に浮かせたり飛ばすこともできる。そして、自分を武器の所に呼び寄せることができ、それを『シフト』と言うらしい。結構便利な力だがその分魔力が必要らしい。姫神は多分それを見越してかちゃんど魔力も付けてくれたそれも多く。まあ、別に何か使えるかもしれないし問題なしだな。

転生特典を確認し終えたところで次はこれからどうするかだ。

まず、武器召喚はまだできないから、武器召喚以外での魔力の使い道を探そう。それで見つけたら次は慣れる練習だ。いざ使えないと困るから慣れは絶対必要だ。でも、一番重要なことを忘れてはいけない。それは、千景を独りにしてはいけないことだ。これは転生者としてではなく兄としての決意だ。

とりあえず今後のことを決めたことだし明日から実行に移そう。

そして、自分は目を閉じた。

考えたことで疲れがたまっているのか一瞬で寝れた。まあ、体はまだ赤ん坊だからね仕方ないね。

次の日から実行した。親が赤ん坊から目を離す時間は昼寝の時間と夜の寝る時間のたつたわずかな時間だ。だが、そのたつたわずかな時間でどれだけできるかが重要だ。

まず最初に魔力を理解することから始まるが、察しがいいのか姫神が魔力の詳細を転生する際に魔力と一緒に入れてくれた。

魔力をこの世界で表すと、神樹が持つエネルギーと同じらしく、選ばれた勇者達が勇者システムを起動することにより変身し、そのエネルギーを身に纏いバーテックスと戦うことができるらしい。自分の場合は勇者システムを起動しなくても神樹のエネルギーが使える感じらしい。

とりあえず、だいたいのことを理解した。

結論を言えば、身体強化しか使い道がねえことがわかった。身体強化は魔力を身に纏うことで勇者と同じ身体能力になれることができる。

これを使えば千景をいじめから守れるかもしれない。そうときまれば次は、身体強化に慣れる練習をしよう。

昼寝の時間は魔力を理解することで使ったから夜の寝る時間にすることにした。

夜、昨日と同じく両親が寝てから始めた。

身体強化といってもやり方は簡単だ。

まず、少しの魔力で体全体に行き渡らせるように念じる。少しの魔力なため簡単に行き渡らせることができた。

行き渡らせる際、体が少し軽くなったり力がみなぎった感じがした。

これを何回も続ける。

疲れたらもう寝て、次の日の昼寝の時間にまたやる。それで疲れたらまた寝て、夜の寝る時間に再開するその繰り返しだった。

そして時は経ち、自分達は小学六年生になった。

飛ばしすぎだろと思うが、ただ身体強化の練習したり、妹と遊んだことしかないため省略させてもらった。

結果だけというと身体強化を完璧に慣れることができた。今なら10メートルも容易く飛ぶこともできるし、コンクリートの壁を一発で壊せるレベルまでいった。

後、妹の千景との仲も深まった。

最初は自分のあとをついてく感じだったけど、段々と遊んでいくうちに距離も縮まり手をつないでいくのが多くなり、「お兄ちゃん」と呼ばれる回数も増えた。今はもう恥ずかしくないのか手をつなぐのがなくなり隣で一緒に歩くのが多くなり、呼び方も「お兄ちゃん」から「兄さん」になった。これには少しショックだったが、まあ子供も日々成長はするもんだと、そう解釈した。

そんなこともあったが、変わったのは自分たちだけではなかった。両親も悪い方に変わっていった。

それは、父さんが自分たちの誕生日よりも会社の飲み会を優先したことから始まった。

これには母さんも激怒していた。父さんが帰ったとき、母さんは玄関に向かい父さんと言い争った。

この時、父さんが素直に謝ればいいのだが、父さんの性格が原因で謝らずどんどん話がエスカレートしていった。怒声が自分たちしている居間にまで聞こえあまりの恐怖に妹は耳をふさいで縮こまっていた。

自分は妹を安心させるために妹の近くによりそつと抱き寄せた。これで安心したのか妹は手を耳からどけ自分の方に体をあずけた。それでもかすかに震えていることがわかった。

「千景、今日は兄ちゃんの部屋で一緒にねよっか。」

そういうと千景は小さな声で「…うん」と言った。

妹の了承をえて千景を支えるように立ちあがり、居間を後にし、自分の部屋に向かった。

自分の部屋は二階にあり、二階への階段が玄関の逆方向にあり二階に向かう際、後ろの方から両親の醜い言い争いがはつきりと聞こえた。自分はなんともなかったが千景はびくつきながらもゆつくりと歩いた。自分も千景にあわせて歩き自分の部屋についた。

部屋の扉を開き千景を中に入れた。部屋の内装は普通で服やら教科書などはきれいにまとめられていて必要最低限の物しかなかった。

そのあと、布団をひいて千景が怖がらないようにそつと抱きしめて寝た。

それからか、両親の言い争いは毎日起こるようになってしまった。自分はこの時確信した。これは千景の記憶を見たから分かることだ。それは、千景の運命を変える時がもう目の前に来ていることだ。

その合図は学校帰りの際、大人達の会話でた言葉でわかった。自分はその言葉を聞いて急いで家に帰った。

家に入った時強烈な酒臭さがした。嗅いただけで酔ってしまったレベルだ。まだ千景が帰ってきてないことが幸運だな、多分千景も噂を聞いて急いで帰っていると思うし、時間もあまりない。急いで話さなければ。

そう思い自分は居間に向かった。

居間に入り、目の前でまだ酒を飲んでいる人物に話しかけた。

「父さん、母さんがいなくなったのは本当か？」

「ん？ああ、徹かもう帰ってきたのかお帰り」

「いいから答えろ！母さんが不倫したのは本当か！」

「うるせーな…：そうだよ、母さんは不倫したよ」

父さんが背中越しで言っていたが、寂しさが不思議と一切感じなかった。

千景の記憶を見たから、父さんのクズさは知っていたが、ここまでクズ人間だと思わなかった。

「兄さんっ！」

声のした方を振り向くと居間の入口に千景がいた。

学校から家まで走ってきたのか汗をかき、息切れしていた。

「兄さん、お母さんが居なくなったのは本当なの…？」

千景は少し落ち着いてから自分に言った。

今本当のことを話してしまうのはまだ子供の千景には辛すぎる。

「大丈夫だ千景、母さんはきつと帰ってくるさ。」

「でも、みんな私に言うの、お前のお母さんがうわきしたのはお前のせいだって。それでみんな、私のことを——」

やばい、これ以上言ったら

「千景！」

段々と息が荒くなりふらつきだした千景を強く抱きしめる。

千景の体は小さく、細い。自分は千景を抱きしめたまま頭を撫でて落ち着かせた。

千景も落ち着いたのか体をあずけてきた。

「大丈夫、大丈夫だからな、千景…母さんはきつと…必ず…帰ってくるさ。」

「…兄さん…兄さん……」

千景は声を抑え静かに自分の中で泣いた。

自分は知っている。母さんは帰ってこない、両親が離婚しなかったのはどちらが自分たちを引き取るかでもめていたからだ。

自分たちは、みんなからも両親にもいらぬ子として認められてしまった。

だが、自分は諦める訳にはいかない、自分はこの時がくるまで身体強化の練習をしてきた。それに、千景を助けるために布石は打っている。

明日が、千景の最初の運命の分岐点にもなるところだ。

絶対に変えてみせる。

これは、転生者としての使命、そして、千景の兄としての願いなのだから。



## 第二話

### 妹を助けるのは兄の役目

私は子供の頃いつも兄さんに守ってもらっていた。

私に何かあったとき、いつもそばにいてくれた。

兄さんは私の心を照らしてくれる存在だった。

嬉しかった。兄さんのおかげで私は前に進めた。

でもあのとき、兄さんの苦しみにきずいていればよかったかもしれない。

それが正解だったのかわからない、逆に兄さんを苦しめてしまうかもしれない。

それでも私は、兄さんの苦しみを一緒に背負えばよかったんだ。

次の日、人々の態度が一気に変わった。

外を歩けば冷ややかな視線で見られた。そのため、千景を怖がらせないように今日は手をつないで歩いた。千景も不安だったのか強く手を握った。

学校では、クラスが違うため別れなくてはいけない。別れる際、千景は手を離すのをためらっていた。

自分は、千景を安心させるためにあるものを渡した。

「千景、これを持っておくといい」

「これは…お守り？」

「ああ、俺が作ったんだ。これを肌身離さず持つておくんだ。千景に何かあったらこれが守ってくれる。」

「わかった。兄さん、ありがとう。」

そう言い千景は手を離し、お守りをポケットに入れ自分の教室に向かった。

さて、自分も行きますか。

そう思い、自分も教室に向かった。

自分の教室に入った時、教室にいたクラスメイトが一斉に注目した。

みんな、親から話を聴いてるから、罵詈雑言を浴びさせられかと思いい覚悟を決めた。

だが、みんなからでた言葉が予想とは全く違う言葉だった。

「徹、お前大丈夫だったのか！お前の親が不倫したって聞いて心配したんだぞ！」

「大丈夫だったの徹君！大人の人達からひどい目に合わなかった!？」  
その後から続くクラスメイトの励ましの声に自分は驚いてしまった。

自分はたしかに千景を助けやすくするため、布石を二つ打った。

ひとつはついさつき千景に渡したお守りだ。あれには自分の魔力が込められていて、身体強化で鍛えられた魔力制御で効果を付与した。

この効果は、千景に物理攻撃や精神攻撃が来たとき自動的に守るように設定してある。

で、ふたつめがさつきのクラスメイトの状況からわかるように、とにかくクラスメイトと仲良くして、みんなからの信頼度を高める方法だ。でも、これは正直あんまり期待はしていなかった。理由は簡単だ、いくら信頼度を稼いだとしてもたったひとつの事件で大きく変わってしまうからだ。

でも結果は違った。逆にみんなは励ましてくれた。

「なんで、みんな俺を責めないんだ。自分たちの親から聞いたはずだろ？それなのになぜ？」

自分はみんなに聞いた。そしたらみんなからの返答が帰ってきた。

「誰もお前を責めねえよ、確かにお前の親のことを聞いたよ。」

でもなあ、大人の事情を子供に擦り付けるのは、おかしいんだよ。「そうだよ！徹君や千景ちゃんは親の苦しむを背負わなくていいんだよ。」

その言葉にみんなが頷く。

「みんな…」

「徹。」

声のした方を振り向くと、自分が最も信頼できる友人がいた。

「翔大…」

「みんなは、徹や千景ちゃんのことを心配していたんだよ。僕もさ、あの話を親から聞いたとき、心配して夜眠れなかったんだから。」

「素晴らしい、自分に笑顔を向けてくれた。」

彼は、橘翔大。自分の家から近く、よく千景と一緒に遊びに行った。「そっか、みんな心配かけてすまん。でも、ありがとな心配してくれて。」

自分は、みんなに謝罪をし、そして感謝の言葉を送った。それを聞いたみんなは、笑顔になって暖かい言葉を返してくれて、それぞれの机に戻った。

でも、これで終わりなわけではない、千景を救わなければ運命は変わらない。

自分は、翔大に近づき言った。

「翔大、お前に協力してほしいことがあるんだ。」

「ん？どうした徹、何かあったのか？」

「ああ、今回の件でな、みんなのお陰で俺は助かったんだが、千景が危ない状況なんだ。助けるのを手伝ってくれないか。」

「たぐよ、いいぜ困ったときはお互い様だからな、他に誰か誘うのか？」

「いや、穏便に済ませたいからな、俺とお前だけだ。」

翔大にお願いしたいのは、学校が終わった後千景をお前の家に避難させてくれないか。」

「わかった。今日は両親が遅く帰ってくるから大丈夫だ。」

でも、お前はどうするんだ？」

「俺は、やることがあるからな、それが終わったら迎えに行く。それまで頼んだぞ。」

「まかせろ、お前の方こそ気をつけろよ。」

「へいよっ」

「素晴らしい、お互いに拳をあわせた。」

放課後、帰りの会が終わった後すぐに翔大と二人で、千景の教室に向かった。

そちらも帰りの会が終わったのか教室から出る生徒達がいいた。自分はその中に千景がいないことがわかり、教室に入った。教室には帰りの支度をしている千景の姿があった。

自分たちは急いで千景のところに向かった。

「千景っ！」

「兄さん!?それに翔太さんも!急にどうしたの?」

「千景、お前大丈夫だったか!みんなからひどい目にあっていないか!?!」

「えっと、大丈夫だったよ兄さん。悪口やら暴力は振るわれたけど兄さんがくれたお守りのおかげで全然平気だったよ。」

よかった。お守りの効果はちゃんと発動していた。ならば…

「そうか…なあ千景。兄ちゃんは今日少し用事があるからさ、翔太の家でまっつててくれないか。用事が終わったらすぐ迎えに行くからさ。」

「それは別にいいけど、兄さんの用事ってなに?」

「大したことじゃないけど少し遠くにある図書館で調べものをするんだ。学校の図書室は自分の探している資料がなかったからさ。」

「そう、わかった。ちゃんと翔太さんの家で待ってるから。」

よし、これで千景を安全な場所に避難することができた。これでやっと本来の目的が遂行できる。

帰りの際途中までついて行った。幸いなことに今日の帰り道は自分たち以外の人が通らなかつた。

二人と分かれる際、千景にはつらいと思うが誰がいじめたのか一応聞いといた。そして千景をいじめた人が千景の記憶でみた女子グループだと分かった。

二人と分かれたあと、自分は図書館に行かず千景をいじめたあの女子グループを探しに向かった。

——数十分後——

身体強化を使わず探したから数時間はかかると思ったが、案外早く見つかった。

まだ教室にいと予想して行ったが当たりだったようだ。どうやら、何か話しているらしい。

千景の運命を変えるには奴等の存在が邪魔でしかなかった。そこで考えた。まず、身体強化を使って物理的に眠ってもらおう。そして、自分の魔力を相手の脳に流し、千景に二度といじめしないように記憶を改ざんすることが一番手っ取り早い方法だ。

そうと決まればあとは行動あるのみ。そう思い自分は教室に入ろうと扉に手をかけた時だった。

「ねえ、今日のあいつ気に食わないんだけど。」

「わかるわかる、みんなから馬鹿にされても全然動じなかったし、暴力ふつてもなんかに守られてるような感じで痛そうな顔しなかったしほんと最悪だったわ。」

「じゃあ、次どうする？私さ、いい情報持っているんだよね。」

「お、なんだなんだそのいい情報って、あいつの弱みだったらまた新しい遊びが出来るじゃん。」

「えーとね、これは昨日の事んだけど、あいつとあいつの兄が隣のクラス翔太って奴と一緒に帰っているところを見ちゃったんだよね。」

「まじかよ、それはほんとにいい情報だな。明日、それであいつを脅さうぜ。」

「『賛成』」

素晴らしい4人は笑っていた。

あいつら、昨日翔太と帰っていたところを見られていたとはな。別に記憶をいじればどうってことないけど。

でもなあ、その情報を脅しに使って千景をいじめるのは見過ごせないなあ。やっぱあいつらには恐怖を植え付けたほうがいいな。

自分はそのまま教室のドアを開け入った。

「ん？あんたあいつの兄か、どうしたの？私たちになんか用でもあんの。」

「ああ、単刀直入に言う、千景をいじめるのをやめてくれないか。」  
「はあっ？なにいつてんのあんた。私たちの楽しみをやめろってか、お断りだよ。」

「話し合いはやっぱりだめだったか…」

「そうそう、そんなことをするなら死んだほうがましよ。」

「死んだほうがましか…そりやいいことを聞いた。」

自然と笑ってしまう。

「あんた、何笑ってんだよきもちわる。」

「ああ、すまんすまん、そりや笑いたくもなるよ。だってなあ…」

自分は身体強化を使つて構える。

奴らも自分の動きに不信をもつたか、動こうとした。

だが、もう遅い。自分は奴らよりも早く近づきそのまま近くにいたやつの腹を死なないレベルで殴った。

殴った奴は「なっ…!?!」といった後そのまま床に倒れた。

「て、てめーなにしやがる！」

「だつてさ、あんたらがいじめをやめるのなら死んだほうがましつていうからさ、死なない程度にやってあげてるだけじゃないか！」

自分はそう言いそのままの流れで残りの3人も同じことをした。

四人は立つこともできず、そのまま床で涙を流しながらうめき声を出していた。

でも、まだ終わりじゃない。

「おいおい、まだ終わりじゃないぞ。千景が今までうけた苦しみをお前らに返さないといけないからな。」

自分は四人の片足を潰した。その痛みに声を出そうとするが息が詰まっているためうめき声しか出せなかった。

そのまま、千景が今まで受けた苦しみを奴らに倍にして返した。

手を潰したり、腹を殴つたりと色々死なない程度にやった。

四人はあまりの痛さと苦しみで気絶した。

自分は四人に手をかざしそれぞれの脳に魔力を流し込み、記憶の改ざんをした。

まず、千景をいじめた記憶とそれにいたる動機、そして昨日自分た

ちが翔太と帰っているところを見た記憶を消した。あとついでに、俺のやった行為も消しておく。

でも、それだけではだめだ。お前らには恐怖を植えつけなければならぬ。千景をいじめてしまいかもしれないからな、少し細工をさせてもらう。

方法は言ったって簡単。魔力でさきほどの痛みと苦しみを脳に刻み付ければいい。千景をいじめようと考えたときその痛みと苦しみがフィードバックするように設定してある。

これでもう千景が苦しまずにすむんだ。

最後に証拠隠滅として、魔力を使って四人の体を完璧に直した。これはもし千景が大怪我したときに使おうと身体強化の訓練と一緒鍛えていた『再生』がまさかここで役に立つとは思ってもしなかった。再生はどんなに怪我をしようとも完璧にあとが残らないレベルに直すことができる。そのため、今回の証拠隠滅に役に立ったと言うことだ。

四人の回復が終わってもまだ気絶は治ってない。自分は四人をそのままにして教室を出た。

翔太の家についたのは夕方だった。

自分はインターホンを鳴らして反応を待った。数秒後玄関の扉が開いた。

「兄さんー！」

最初に出てきたのは妹の千景だった。千景はそのまま自分に抱きついていた。

「怖かった。兄さんがお母さんみたくどこかに行っちゃうんじゃないかと思っちゃって、それで私…私…」

千景は震えていた。自分が孤独になってしまいうんじやないかとか考え不安だったんだろう。

自分は最低だ。千景を救うために色々とやっていたが、それに気を回しすぎて、千景に気を回すのをほったらかしにしてしまった。こんなんじや兄失格だ。

自分は千景を抱きしめた。いつもより強く千景を包んだ。千景の心臓の音が伝わるぐらいぎゅつと。

「ごめんな千景、遅くなっちゃまって、ほんとにごめん。千景を不安にさせちゃうなんて兄失格だな。」

「いいよ、兄さんとあえたから、ただ今はこのまま抱きしめて。」

「ああ、千景が安心するまで抱きしめてやるさ。」

自分と千景はそのまま抱きしめあった。

数分後、千景は安心したのか震えが止まった。

その後、翔大が来て「夕飯を食べてけ」と、言われたのでありがたくいただいた。

帰りの夜、千景と手をつないで帰った。

この手を絶対に離さないよう強く握った。

これで千景の運命は変わった。だが、まだこれで終わりではない、次の勇者の運命を変える日は刻一刻と近づいているのだから。あの  
大災害も一緒に。



### 第三話

#### 一人の勇者と一人の巫女

乃木若葉と上里ひなた

彼女たちの記憶はとにかくすごいとしか言えなかった。

まず、乃木若葉の記憶からだ。

彼女の意思は強く、実力も勇者の中でトップレベルだった。

真面目だが頑固な部分もあり、そのせいかチームの不和を招いてしまった。

それで思い悩むこともあったが、幼馴染のひなたや高嶋友奈のおかげで、みんなに打ち明けることが出来た。

そして、彼女は諦めることなく戦い続けて、勇者の中でただ一人生き残った。

次に上里ひなたの記憶だ。

彼女は乃木若葉の幼馴染でもあり、乃木若葉にとっての精神的支えになっている。

彼女は巫女の中でも適正が高く、よく神樹に呼ばれていた。

神に言葉を届けるために生贄になるはずだったか、彼女はうまく立ち回り乃木若葉と一緒に生き残った。

彼女たちは、人類の再興を誓い、未来の勇者達のために勇者システムを強化し、それを託した。

自分にとって彼女たちは遠すぎる存在だった。でも、それでも自分は彼女たちの手助けがしたい。あの大災害の日、彼女たちが受けた苦しみや痛みを少しでも抑えられるのなら、自分はそれをやってみせる。

いじめっ子を成敗した次の日、学校で緊急朝礼があった。内容は昨日のことだ。どうやらあのあと、管理人が見回りに来て倒れている四人を見つけたらしい。管理人は、四人を起こして何があったか聞くと誰も何も覚えてないと証言し、何もわからないまま幕を閉じた。

そのことがあって放課後居残るのは危険と先生達は判断し、すぐ帰るようにと言われ朝礼が終わった。

ちなみに、あのいじめっ子たちはどうなったかというところも家で寝込んでいると先生から聞いた。でも、学校に行く途中、大人たちの話で耳を傾けると、四人が精神的不安定になって入院しているところだった。

他にも、呪いにかかったとか言う人もいるし、郡家の持ってきた病気とまさかの自分たちのせいと言う人もいた。

まあ、自分がやったことだがまさかこんな早くに千景をいじめようと考えるなんて流石に予想外だった。多分、親が千景のことを言ったせいでいじめようと考えたのだろう。そのせいで、あの時の痛みと苦しみがフィードバックして精神的不安定になったと考えられる。でも、あれは五分ぐらいで収まるため連続発動しない限り不安定レベルまではいかないはずだ。

……よし！これ以上考えるのはよそう、これは不幸な出来事だったんだ。千景をいじめようと考えたのが悪いんだ。

自分は心の中でそう結論づけ、考えるのをやめた。

放課後、すぐ帰るようにと先生に言われたため、みんなすぐに学校から出始めた。

翔大は今日用事があると言って帰ったため、千景と一緒に帰った。

家に着くと目を疑う光景が写った。

「兄さんこれ…」

「ああ、こりゃ酷いな」

家の壁一面に、消えろやら死ねとかが書かれている張り紙が貼られていた。

流石にこれは恐怖を感じる、千景もそう感じたのか少し震えていることがわかる。

「とにかく、家の中に入ろう」

自分は張り紙を気にせず家の中に入った。千景も兄の背中に隠れ後をついた。

家の中に入った瞬間、酒の臭いが強く臭った。

いつも父さんが酒を飲んでいるため臭いに慣れていたが、今日は一

層と強かった。

自分たちは持っていたハンカチで鼻を抑えて居間に行った。

居間は辺り一面にビールの缶が大量に転がっていて、その中央に父さんが寝ていた。多分、今日のことの原因で大量に飲んでしまったと推測できる。流石にここに居続けるのは危険なため千景を連れて二階に避難し、これからのことを話した。

「千景、もうこの家に居続けるのは危険だ。荷物をまとめてこの村から逃げよう」

そう、家出だ。このまま家にいれば父さんが時期に目を覚まし自分たちに襲ってくる可能性がある。そしてこれが一番重要なのだが、今日は7月30日、記憶で見たバーテックスが襲来する大災害の日だからだ。

千景は別に問題なく家を出ることができるが、自分には少し問題があった。その問題は千景の口から出た。

「私はこの村に思い入れがないからいいけど、兄さんは翔太さんがいるから勝手にいなくなったら心配されるんじゃないの?」

まさかのここに来て友達関連での問題だ。勝手にいなくなれば翔太はもちろんクラスのみんなが心配するに決まっている。

でもまあ……

「それは大丈夫だ。翔太の家のポストに別れの手紙を入れとけばなんとか納得してくれるさ」

翔太がなんとかクラスのみんなを説得してくれることを祈ろう。

「そう、なら私は部屋に戻って準備してくる」

「ああ、準備が終わったら先に外でまっけてくれ」

千景は納得したのか荷物をまとめて自室にいった。

さて、自分も準備しますか。自分も自室に行き翔太に出す手紙をささつと書き、最低限の荷物をかばんにつめ外に出た。外には千景が手提げかばんを持って待っていた。

「すまん、待ったか?」

「ううん、私も今さつき出たところなの」

「そうか、それじゃあ行くか」

「ええ、行きましよう」

自分たちは翔太の家のポストに手紙を入れてから、とある場所を指して歩いた。

「そういえば兄さん、これからどこに行くの？」

「ん？ああ、言ってなかったな。とりあえず香川県に向かおうと思っているんだ。でも、たった一日でつかないと思うからその途中にある神社を目指すんだ。もし疲れたらすぐ兄ちゃんに言うんだぞ、おんぶしてやるからさ」

「うん、大丈夫よ兄さん。私はまだ疲れてないから」

「そうか…」

そうして、千景に気を回しながらも、夜頃に目的の神社についた。でも、神社に入ろうとしたとき、突然大きな地震が来た。

この時自分は確信した。あの大災害がきたと、すべての物語が始まろうとしていると。

でも、今は考えるより自分たちの身の安全が優先だ。

「千景！伏せろ！」

自分はそう言い千景と一緒に伏せた。地震はまだ収まらず、元々古かったのか神社が崩れた。

そのあと、地震は収まり自分たちは地震で崩れた神社に近づいた。

「兄さん…神社壊れちゃったね」

「ああ、そうだな。でもこの神社にきた目的はある物を取りに来たからなんだ」

「ある物って？」

「ああ、それはな…お、あつたこれだ」

自分は崩れた神社から古びた刃を見つけ出し、手に取った。その刃を自分のかばんから出した布で包み、千景に渡した。

「千景、これを自分のかばんに入れておけ。何かに使えるかもしれないからな。」

「何に使うかはわからないけど…兄さんが言うなら入れるわ」

そう言い千景は布で包んだ刃をかばんに入れるため「少しまって

て」と言つて少し離れた場所で荷物の整理を始めた。

さてと、千景が荷物を整理している間自分もやることをやらなければ、確か記憶では島根県のとある神社に居るんだっけ、ならもう時間はない。ぱつとやっちゃうか。

(さて、まずは身体強化で目を重点的に強化しよう)

最初に、身体強化であそこまでの方向を合せ、距離と角度を計算する。

(それが分かったら、次に武器召喚で武器を出す)

正直言つて、練習なしのぶつつけ本番の武器召喚のためなんでもいから武器よ来い、と右手に強く念じた。

強く念じた時、右手に重みを感じた。自分はすぐ右手を一瞬で見えて、武器の形状を確認した。

一瞬で見たため細かいところはわからないが形状から、片手剣だと分かった。

(よし、武器召喚ができたら身体強化で目に集中している魔力を半分、右手に移す)

目に集中している魔力を半分右手に移し、武器を投げやすいように持ち直す。

(それじゃ、行きやがれ!!)

そして、さつき計算した角度に武器を力一杯に投げる。

投げた武器は、ヒュンつと音を鳴らし一瞬にして夜空に消えていった。

まあ、これである二人の少しの手助けのもなったのだろう、そう思い自分はフーツと安堵の息を吐いた。

「兄さん、荷物の整理が終わったよ」

それと同時に、千景も戻ってきた

「おおそうか、すまんな千景にそれを持たせてしまつて」

「ううん、別に大丈夫だよ兄さん。そういうえば兄さん、私が荷物の整理している間何してたの？」

一瞬、何かを投げる音が聞こえたんだけど」

「いや、暇つぶしにそのへんの石を投げてただけだよ」

「そう…別に気にしないけど、それより兄さんこれからどうするの？  
神社は壊れちゃったから今日寝る場所がないよ」

「それなんだけど千景、このまま香川県に行こうと思うんだ。多分この地震でほとんどの人が避難所に行ってると思うから今日はそこに泊まろうと考えているんだけど…大丈夫か？」

「私はまだいけるけど、でもついた頃にはみんな寝てると思うから迷惑になると思うけれど」

「ああ、そこは安心してくれ。今から兄ちゃんが少し本気出すからさ、千景をおぶって行けばすぐつくよ。」

「そうなの？それならお願いしてもいい、兄さん？」

「ああ、千景の荷物は兄ちゃんが持つから背中に捕まってくれ、飯は避難所で食うから少し遅くなるけど我慢できるか？」

「大丈夫よ兄さん、それぐらい我慢できるから」

そう言い千景はおんぶしやすいようにしゃがんでいる兄の背中に乗った。

千景が乗ったことが分かり、自分は千景が落ちないようにしっかりと支えながら立ち上がった。

「兄さん、重くない？」

「いや、全然重くないが、逆に軽いぐらいだぞ」

「そう、ならいいけど。でも荷物ぐらいなら私が持ってあげるのに」

「大丈夫だ千景、どっちも最低限の物しか入ってないから重くないんだよ、それよりも千景しっかりと捕まっとけ」

そう言う千景は「分かった」と言いしっかりとしがみついでくれた。

「それじゃ、行こうか！」

言っただと同時に身体強化で少しだけ強化して走った。まあそれでもそれなりの速度はあるけど。

こうして、自分たちはこのまま香川県まで走って向かった。

——時は少し戻り

ここ、島根県のある神社、そこには修学旅行に来ていた生徒達が

地震によって避難していた。

神社の外では二人の少女、乃木若葉と上里ひなたが楽しく話していた。

そのときだった。大きな地震が再びきた。

「きゃあっ！」

「くっ！（また地震だ?!）」

二人はしゃがみ地震の揺れが収まるのを待った。

揺れが収まり若葉はひなたの方にすぐ向かった。

「ひなた！大丈夫か!？」

そう言ったがひなたは何も言わずただ空をずっと見ていた。

「ひなた？どうしたんだ？」

ひなたの様子がおかしいと思いきやまた声をかけた時だった。ひなたがくちを開いた。

「来る…」

「えっ…」

「何か…すごく怖い事と同時に…強い力が…」

その時、何かが空から神社に落ちてきた。その何かは、地球上の生物ではありえない存在だった。体表は白く、巨大な口のようなものを持ち、巨大な体をした浮遊生物。まさに化け物といってもおかしくなかった。

「…なんだ…この化け物は…」

若葉はこの化け物を見て驚きを隠せなかった。

「きゃあああ!!」

神社の中から悲鳴が聞こえ大人達が外に出てきた。

だが、まだ生徒たちが出てきてないことに気づいた若葉は神社の中に向かおうとした。

神社に向かおうとしたとき何かが神社の中に入った。そして、中から大きな音がし風圧を生んだ。

「みんな…!」

若葉は中にまだいるみんなの安否を確認しに行った。

中に入ったとき、目を疑った。

「これは…一体…」

最初に目に入った光景は、何かに貫かれ倒れている化け物達、そしてその貫かれた先には黒い剣が刺さっていた。

「この剣は一体）：そうだ！みんなは!?」

驚きの光景に目を奪われていた若葉だったが、なんとか本来の目的を思い出しみんなが無事なのか周りを見た。

そして、部屋の隅にみんなが固まっているのを見つけた。

「いた！）みんな大丈夫か！」

みんなはあまりの恐怖で声をだそうにも出せない状態だった。

若葉がみんなを避難させようと声を出そうとしたとき、また化け物が降ってきた。

「まだくるのか！）みんな私が時間を稼ぐ！その間に避難を！」

それを聞いたみんなはすぐに神社の外に出た。

若葉は化け物を倒したであろう黒い剣が刺さっている方を見たが、先程まで刺さっていたはずの黒い剣がなくなっていた。

「なっ…！（黒い剣がなくなっているだど！）」

そう驚いてる間化け物が段々と若葉に近づいていった。それに続いて若葉も後ろに下がった。

「（どうする…武器がなければどうすることも…）ん？」

後ろに下がりながら考えてる若葉の足に何かが当たった。足に当たったのは恐らく神のお供え物であろう古びた刀だった。

「この刀は…「若葉ちゃん！その刀を手を取ってください！」ひなた!?」

突然ひなたが入口に立っており、大声で言ってくれた。

若葉はひなたの言葉を信じ刀を取り刃を出した。刃は古く錆びていたが、まるで生きているかのように錆びが消えていった。

「錆びが消えていく…」

「それは祭壇に秘されていた古の神器、美しく比類なき殺傷力を持つ冥府に由来する一本の刀…生太刀。若葉ちゃん！やっちゃってくださいー！」

刃の錆びが完全に取れ、鞘にしまい居合の構えをとる。そして化け



物が突っ込んで来たとき若葉は一撃をおみまいした。威力は絶大で化け物は一撃で倒された。

化け物が完全に死んだ事を確認した若葉は刃を鞘に仕舞いひなたの方に向かった。

「ひなた！ほかのみんなは!?!」

「みんなは無事です、それより早く私たちも逃げましょう、私が安全な道に誘導しますので」

「ああ、わかった」

そのあとはひなたの誘導によりみんな無事に逃げる事が出来た。

若葉は逃げる途中ひなたにあることを聞いた。

「ひなた」

「なんです、若葉ちゃん?」

「ひなたは奴らが来る前、怖いことが来ると同時に強い力がくるといっただろう。怖いことがあの化け物だと分かったがその次の強い力がよくわからないんだが」

「はい、確かにあの時私はそう言いましたが、それを感じただけなので詳しいことまでは知らないのです」

「そうか、なら別にいいとにかく今は皆を安全な場所に避難させなければ」

「はい、私も若葉ちゃんのことを全力でサポートしますので、みんなを死なせないために頑張りますよ若葉ちゃん」

「ああ、そうだな」

そこからはみんなを安全な場所に避難させるため、歩き続けた。

でも、若葉はまだ疑問に思っていた。あの時見た黒い剣は一体なんだったのか、それを知るのは3年後だった。

## 第四話

### 勇者たちと転生者

私は彼を初めて見たとき、彼から何かを感じた。でも、それは一瞬で消えたため気のせいだと思い、ひなたに彼のことを聞いてみたがどうやらひなたも私と同じ彼から何かを感じたらしい。

彼は郡徹といい郡千景の兄らしい。郡徹、彼は初の男の勇者であり謎多き者だ。もし、三年前のあの黒い剣が彼の武器だとしたら、その時はお礼を言いたいものだ。

午前六時、自分はエプロンを着て朝食の準備をしていた。

あの日から三年の月日が経った。あのあとすぐに香川県につき避難所に入ることが出来た。そこからはなんやかんやあつて今現在は丸亀城を一部改築した全寮制の学校の寮で暮らしている。

「おはよう…:兄さん」

寝室から可愛いらしいパジャマを着てまだ眠そうな顔をしている千景が出てきた。

「おはよう千景。朝食の準備はもうすぐ出来るから、その間に歯を磨いて、顔も洗っておきな」

千景は「うん…」と言った後、眠そうにふらふらしながら洗面所に行った。

数分後、リビングにあるちゃぶ台にご飯と味噌汁を二人分置き、朝食の準備が終わったと同時に千景も洗面室から出てきた。

「兄さん、待った？」

「いや、今準備が終わったところだ」

「そう、今日も美味しそうね…:いただきます」

「それはよかった。それじゃいただきます」

自分たちははしを取り、食べ始めた。ご飯と味噌汁一杯と少ない量だが兄妹揃って朝は食欲が無く、そのためいつもこれぐらいの量しか食べられなかった。

「ごちそうさま」

朝食が終わり自分は片付けをし、千景は着替えをするため寝室に

戻った。

片付けが終わった頃に寝室から制服姿の千景が出てきた。

「おまたせ兄さん」

「ああ、それじゃあ行くかうか」

玄関を開け寮を出る。数分歩くと校舎についた。この学校は自分たちを含め七人の生徒しか通っていない、理由は簡単だ。ここは勇者の力に目覚めた少女達が集められ戦いに備える、いわば学校という名の訓練所だ。

「今日もうるさいくらいに騒がしいな」

「…それはいつものことですよ」

校舎に入り、廊下を歩けば自分たちの教室が見え、先に何人か登校しているのか、教室から賑やかな声が聞こえる。引き戸を開けるとそこには4人の後輩がいた。

「おっ、おはよう！徹先輩！」

「お、おはようございます、徹先輩」

「おう、おはようさん二人とも」

元気に挨拶してきたのは、二年生の土居球子。おずおずとしながら挨拶したのが、一年生の伊予島杏だ。

二人はまるで姉妹のように仲が良く、いつも一緒にいるところをよく目にする。

この学校は生徒数など色々な関係上、学年混合で授業が行われている。そのため下の学年がいても何の問題がないわけだ。

「お二人とも、おはようございます」

「おはようございます。郡さんに徹先輩」

「ああ、おはよう。朝っぱらから元気だなあんたらは」

「いやーだって、今日の朝若葉ちゃんの写真がとれたんですもの」

「くっ、私が油断したばかりに撮られてしまうとは」

「そうか、そりゃ不幸なことって」

朝っぱらからほっこり顔をしているのは上里ひなた。最初、彼女は大人びている感じだったが今になってはそんなのが一切感じなかった。

そして、自分の寝顔写真を撮られ後悔しているのは、乃木若葉。二人とも二年生で幼馴染なため、固い絆で結ばれていることがよくわかる。

「……」

自分が挨拶している間に千景は無言で席に座って兄をじつと見していた。千景は他人と関わるのが苦手で、唯一関われるのは自分と一人の少女しか今はいない。まあ、その少女はそろそろくるだろう。

そして、始業チャイムが鳴る直前に最後の一人が駆け込んできた。それと同時に千景は兄から視線をはずしその少女に視線を向けた。

「おはようございまーす！ 高嶋友奈、到着しました。良かった、遅刻じゃない！」

彼女は高嶋友奈、みんなのムードメーカーであり、誰にでも仲良くできるため千景より年下だが、友人同士のように話してくれる。これには兄である自分も安心できる。

友奈は全員に元気に挨拶をし、そのまま千景の隣の席に座った。

「おはよう……高嶋さん。今日は遅かったね」

「おつはよー、ぐんちゃん！ いやー、昨日は格闘技の番組を見て、見よう見まねで練習してたら興奮して眠れなくなっちゃって。てい！ 縦拳！ 回し蹴り！」

友奈は激しく動き、そして足を高く上げた。

「あ……」

女の子がスパッツをはいていない状態のスカートで足を高く上げたら何が見えると思う？

それを男の自分が見てしまったらどうなるか、だいたい察せるはずだ。

この窮地を回避する方法は自分の考えた中でただ一つ。それは――

「(目をそらすことだ！) あいたつ！」

目をそらすために首を勢い良く曲げたせいか、グキツ。と聞こえてはいけない音が響いた。

「高嶋さん……あんまり足、高く上げない方がいい……パンツ、見えそ

うだから。後、兄さん首大丈夫？」

「あーえへへ……とおさんごめんね」

「あ、ああ……大丈夫だすぐ治る」

千景と友奈の優しい言葉で涙が出てしまいそうだ。

「あはははははっ!!」

でも球子、なぜあんただけ腹抱えて笑うんだ。

「ちくしょう……球子、笑うんじゃねえ」

「いやー、朝っぱらからいいもん見せて貰ったよ。ま、どんまい徹先輩」

そうしている間にチャイムが鳴り、担任の教師が教卓の前に立った。自分は首の痛みを我慢しながらも席に戻った。

女子六名。男子一名。の偏りすぎる教室で、授業が始まった。

午前の授業では一本のテープを見せられた。

テープの内容は三年前の大災害の日のことだった。

バーテックスと呼ばれる化け物がこの世に現れ、人類のほとんどが死に追いやられた。

通常の兵器では効かず意味がない。それを知らない自衛隊は、次々と化け物に食われていった。

「……こりやひでえな」

「……ええ、そうね」

千景もそうだが、みんなその光景に顔をしかめている。一方的にやられている映像は、最後に撤退を決め、退くところで、この映像は終わった。

担任の教師が生徒たちに告げる。

「唯一奴らに対抗できるのは『勇者』だけです。あなたたち『勇者』の力が必要とされています」

勇者とは、バーテックスが来たと同時に四国に『神樹』という土地神の集合体が、自らの力を託すに値する、と判断し、力を授かった少女たちのことをいうらしい。

そして、四国で選ばれた少女が、若葉、友奈、千景、球子、杏の五

人だった。

なら、なぜ自分がここにいるのか疑問に思うだろう。ひなたは神の声を聞く巫女なため大丈夫だが、自分はどうやら神樹に、バーテックスと戦える力を持っていると気づかれたため初の男の勇者として選ばれた。

でも、力を持っているだけで身体強化と武器召喚は気づいてなかったけど。

「どうせだったら……土地神が戦えばいいのに……」

千景がぼそりと呟いた。それに球子が答えた。

「多分、戦ったんだと思いますよ。ほら、バーテックスが攻めてくる前に、地震とか災害とか起こってましたし。あれ、土地神がやりあつてたせいだったんじゃないですか」

「……………」

千景がムツとしたように黙り込んでしまった。

「ほんと、この世界は残酷だな……」

自分はそう思い、授業が終わった。

その後は戦闘訓練だった。ひなたは巫女なため違う場所で訓練を受けている。勇者がやる訓練はどれも大変だ。

運動。戦いの基礎技術。座禅による精神修養。他にも訓練があつて一つ一つがどれも厳しく、辛いものだが、自分は身体強化でよく体を動かしていたため、弱音を吐くことなんて一切なかった。

訓練が終わると昼休みが来る。自分はこの昼休みが一番の楽しみだった。七人全員で食堂に向かう、食事はセルフサービス形式になつていて、みんなは大体うどんを取ってくる。トッピングはそれぞれ違うが。

だが、自分は違う。

「なあ、徹先輩。どうしていつも天井ばっか食ってんだ？」

「君は何を言っているんだい。自分はうどんよりも天井のほうが好きだから食っているだけ。ただそれだけだ」

球子の質問に即答する。

そう、自分はいつも天丼を食っている。誰に何と言われようとも天丼を選ぶ、理由はさつきも言ったとおり、うどんよりも天丼のほうが好きだから食っている、単純な理由だ。

「いつか、徹先輩にはうどんが好きになるように洗脳しなくては」

若葉がなんか恐ろしいことを言っていたが聞こえていない振りをしておこう。

「訓練の後のご飯は美味しい！」

友奈は満面の笑みで言い、それを微笑まし気に見る千景。

「こらっ、あんずっ。行儀が悪いぞ」

「ああ!?今良い所だったのに…」

「ダメだ、食べ終わってからな」

「はーい……」

杏の本を球子を取り上げ注意した。

「(杏は相変わらず、隙あらば読書をするな)」

そう思い視線を天井の器に向け考え事をした。

「(記憶ではバーテックスの侵攻は後数日である。まだ初戦だから敵も弱い、でももし、記憶にないことが起こったらその時は…バレルことを覚悟してこの力で……)」

そう考えている時だった。

「……にしてもさー、毎日毎日訓練訓練って、なんでタマたちがこんなことしないといけないんだろーな」

球子がボヤクように言った。それにひなたが答える。

「バーテックスに対抗できるのは勇者だけですからね…」

「そりゃ分かってるよ、ひなた。でもさ、普通の女子中学生って言ったら、友達と遊びに行ったり、それこそ恋……とかしちやったりさ。そういう生活してるもんじゃん」

溜息をつく球子。

この問いに、若葉が答える。

「今は有事だ、自由が制限されるのは仕方あるまい」

「うーん……」

「我々が努力しなければ、人類はバーテックスに滅ぼされてしまうんだ。私たちが人類の矛とならねば——」

球子が声を荒らげそうな顔で口を開くが、その前に自分が口を挟んだ。

「まあまあ、落ち着いて。いつかそんな生活ができるようになるよ」

球子が自分に視線を向け力なく言った。

「徹先輩。いつかって、いつなんですか……」

「バーテックスとの戦いが終わるまでかな」

「徹先輩。心意気はいいですが、いささか大言壮語だと思えますが」

「確かに、おおげさだとは思いますが、俺はそう信じている」

みんなからしたら難しいどころの話ではないだろう。でも自分は記憶を持っているからこそ言えることだ。

しかし、この記憶どおりに行ってしまったら、確実に誰かの死が確定してしまう。

「(それじゃダメなんだ! みんなが生きていなければ意味が無いんだ……)」

そう考え、心が沈みかけようとしたとき。

「ごちそうさま! 今日も美味しかった!」

場の暗い中、友奈だけそんなことお構いなしに、両手を合せ満足そうにしていた。そして、キョトンとした顔で周りを見回した。

「どうしたの、みんな? 深刻そうな顔して」

「……友奈……さっきまでの話、聞いていなかったのか?」

「え、えつと……ごめん、若葉ちゃん! うどんが美味しすぎて、周りのことが意識から飛んでっちゃって……」

「「「「はあ……」」」」

「ええ!? なんでみんなため息吐くの!」

溜息をつかれたことにショックを受ける友奈。

でも、すぐにいつもの調子に戻り、友奈は言う。

「大丈夫だよ。私たちはみんな強いし、みんなで一生懸命頑張ればなんとかなるよ!」

笑顔で、そう言った。



それからの日々は何も変わりなく過ぎていった。生活に不平や不満が出たが、生活自体は平穏だったため、そこまで大きな問題にはならなかった。

そして、バーテックスが侵攻してくる前日、放課後千景と一緒にとある場所に來ていた。

「兄さん。神樹様に用があるって言ってたけど一体なんなの？」

「ああ、それはな千景、俺の勇者システムが完成したってさつき大社の人から連絡が來てな、神樹さまから直接もらってくれって言われたんだ」

「そうなんだ、これで兄さんも私達と一緒に戦えるんだね」

「ああ、そうだな」

そう、自分たちは今、神樹様に会える門の前に立っていた。昨日の夜連絡が來て、今日の放課後に神樹様からもらってくれと言われたため、千景と一緒に來たのだ。

門の前には門番らしき人が二人立っていて、その一人が自分を見て近づいてきた。

「郡徹様。お待ちしておりました。神樹様がお待ちになつております、どうぞ中へ」

門番はそう言い、門を開けてくれた。

「じゃあ千景、兄さんは行ってくるから待っていてくれ」

「ええ、分かったわ兄さん、気お付けて」

自分は「へいよ」と言つて、そのまま門の中に入った。

中はとても室内とは思えない光景が目に入った。周りを見ると壁と天井がなく、辺り一面に芝生が敷き詰めてあり、空を見ると今は夕方のはずなのに青空だった。ここはまるでもう一つの世界としか思えなかった。

そして、視線を前に戻し中心にある神樹を見つめた。

「來てやったぞ神樹、さつきと俺に勇者システムを寄越せ」

『よく来たな男の勇者よ、力が欲しければ我の幹に触れるがよい』  
脳内に直接、神樹の声が聞こえた。

自分は神樹の言葉に従い、神樹の幹に触れた。  
「触れたぞ神樹」

『よろしい、それでは早速力をさずけようではないか』

そう神樹が言ったとき、体に何かが流れる感覚がした。それは数分  
続き、感覚がなくなったと同時に幹から手を離れた。

『これで貴様も勇者システムが使えるようになったのだが、貴様、これ  
が目的ではないのだろうか』

「よくわかったな」

『当たり前だ。貴様の体にある力は我らと同じ力だということは最初  
から知っておる。そうでなければ貴様を勇者に選んたりはせん』

確かにそうだ。自分の持つ魔力は神樹のエネルギーと同じだ。で  
もこれも一応目的なだけだな。

一回自分の魔力をまとって戦装束を作ろうとしたんだが、常に魔力  
を保つてないとすぐ解除されてしまった。

そのため、神樹に頼らずにはいられなかった。

それはいいとして、そろそろ本題に入ろう。

「それもそうか。なら話が早い、神樹。あんたと交渉がしたい」

『ほう、神である我に交渉に出るとは。面白い言ってみろ』

「今日の夜、諏訪にいる住民達、そして白鳥歌野と藤森水都を香川県に  
転移させる」

『大きく出たな、だが無理だ。全員を転移させることは可能だがその  
分の力を使うわけにはいかない』

知ってる。だがここで終われば諏訪のみんなが死んでしまう。

自分は覚悟を決めて言った。

「いや、俺の力を一部捧げる。俺の腕一本を供物として使えば足りる  
だろうか？」

『貴様、正気か？それをすれば貴様の腕は機能を失うぞ、それでもいい  
のか？』

ああそうだ、片方どちらかの腕を供物にすれば機能を失い永遠に動

かなくなる。そうすればみんなが心配してしまう。

だからここは――

「腕の機能を失うんじゃない、腕自体をあんたに捧げよう」

『なに…!?!』

さすがにこれには神樹も驚いたようだ。そりやそうだろ、そんな選択する人なんて自分くらいしかいないと思うし。

『ふっ、フハハハハハッ!』

突然、神樹が笑い出した。声が脳に直接聞こえるため、めっちゃやるさい。

『まさか、貴様でこんなに笑うとは、いいだろう貴様の話、乗ってやろうではないか』

「交渉成立だな。なら早くやってくれ、時間がないんだ。」

『そうか、なら貴様のどちらかの腕を我の幹に触れるがいい。安心しろ、腕を失うかわりに貴様の腕そっくりの義手でも付けてやろう。我を笑わせた報酬だ』

神樹の言葉に少し安心し、左手を幹に触れた。だが、左手は幹に触れず、ずぶずぶと、幹に沈み始めた。

自分は気にせずそのまま左手を沈む。左腕まで沈むと、そこで沈みが終わる。

『では、始めるぞ』

神樹の言葉を聞き、自分は覚悟を決めた。

門から出ると、外で待っていた千景が近づいてきた。

「兄さん。意外と早く終わったようだけど、大丈夫?」

「あ、ああ、大丈夫だ千景。それより、俺が門に入ってからどれくらい経ったんだ」

「えっと…:..だいたい五分くらいしか経ってないけど」

まじか、一時間ほどあそこにしたのにこっちではたった五分ぐらいしか経ってないとか、さすが神樹、無茶苦茶すぎる。

「そっか、それじゃあ千景今日の夕飯の食材を買って帰るか」

「そうね、今日は私が作るから、兄さんは荷物持ちをお願い」

「ああ、兄さんに任せとけ」

自分たちは夕飯の食材を買うため商店街の方に歩いた。

歩いてる最中、千景にバレないように自分の左腕を見る。

神樹に自分の左腕を捧げ、その代わりに付けられた義手はまるで本物の人間の腕そのものだった。

「(これでいいんだ…これで…みんなが救えるのなら…)」

自分はそう思い、視線を前に戻す。

その時見た夕日は、いつもより輝いて見えた。

## 番外編

### 諏訪で起きた奇跡

白鳥歌野と藤森水都

彼女たちの記憶は救いようがなかった。

白鳥歌野はたった一人の勇者として諏訪を守り続け

藤森水都はたった一人の巫女として勇者を見守り続けた

でも、諏訪を守る土地神は力が弱くなりここが持つのは時間の問題だった。

それでも彼女達は諦めず戦い続けた。たとえ、ここが囷だったとしても。

自分は助けたいと思った。こんな救われない最後を自分は許さなかつた。助けてやりたい、だから自分は神樹に体の一部を捧げた。

「よしっ！できたー！」

歌野は手紙を書き終え一息着く。

「(後は乃木さんたちがこの手紙を見つけてくれればいいけど)」

歌野はそう願ひ、自分がいままで使っていた鍬を置き、外に出た。

外に出ればいつも賑やかな声が聞こえてくるが、今日はそんな声も聞こえず静かだった。

「みんなの避難は終わったのかな？」

「うたのーん！」

歌野がそういった時、遠くから水都が来た。

「みーちゃん。みんなの避難は終わったの？」

「うん：みんなの避難は終わったよ。後は…」

「わかってるよ、みーちゃん。だいじょーぶ、私は負けないからさ」

「でも：神託で、今までとは違うって…」

「みーちゃん」

歌野は不安になっている水都の頭に手を置き、優しく撫でた。

「どんなに敵が来ようともみんなを守るために、私は最後まで諦めずに戦うからさ、だから安心してみーちゃん」

「うたのん…」



——時は少し戻り

水都はみんなと一緒に避難所にいた。

恐怖で不安になっていている人、思い残すことがないと死を覚悟している人の中、水都だけが歌野の無事を祈っていた。

「うたのん：絶対に無事に帰ってきてね。うたのんが死んだら私は…もう…」

そう祈っていた時だった。

「うわっ!?なんだこれ!?!」

突然、村民達の一人が声を上げた。

「どうしました!」

水都は声が出た方を見た。すると、先程の村民の身体が光り輝いていた。それと同時に他の村民達の身体も輝き始め、一気に状況は大混乱になった。

「みなさん！落ち着いてください!」

そう言っている間にも村民たちの輝きは段々と強くなり、そして最後には光に包まれ小さな光の玉となりどこかに飛んでいった。

「一体何が起こってるの…」

一瞬の出来事で村民たちが消えたことで不安になっている水都に突然、神託が来た。

「なんで急に神託が…え、それなら早くうたのんの所にいかなくちや!」

その神託を聞いたとき、驚いた水都だったが、すぐに落ち着きそのまま歌野がいる場所まで走った。

「(これが本当なら：諏訪のみんな、そして私とうたのんも死ななくて済む!)」

そう水都は信じ、自分の身体が光始めていることに気づかず、走り続けた。

——そして今に至る

「うたのん…早く…私の手に触れて!…」

水都は息切れしながらも大きな声で言った。そう言っている間に

も水都の身体が少しづつ光が強くなっていた。

「オツケー！すぐに向かうから！」

歌野は最後の力を振り絞って、敵を薙ぎ払いながら水都の所に向かうとした。

「あともう少し…届けえええー！」

水都の手に触れるために必死に手を伸ばす歌野。そして、その手を必死に伸ばす水都。

だが、奴らはそれを許そうとはしなかった。

歌野の後ろに星屑が集まって出来た進化体が急接近してきた。

「(まずい!...)」

間に合わない!歌野と水都がそう思ったとき、空から何かが降ってきた。

その空から降ってきた奴はまるで最初から狙っているかのごとく、歌野に接近してきた進化体を貫いた。

「うたのん！」

このチャンスを見逃さないと水都は呼びかける。それに続いて歌野は手を伸ばす。

そして…

「タツチ！」

歌野が水都の手に触れたとき、光が二人を包み光の玉となってどこかに飛んでいった。

空から降ってきた何か、黒い剣も役目を果たしたのか光となって消えた。

「う、ううん…ここは…どこ？」

歌野が目を覚ましたとき知らない森の中にいた。

周りを見れば、諏訪の村民たち、隣には水都が倒れていた。

「みーちゃん!起きて！」

歌野は水都を起こすため、大きな声を出しながら水都の体をゆすつた。

「…う、ううん…うた…のん…?」



「よかった！みーちゃんが目を覚ました！」

水都が目を覚ましたことに喜ぶ歌野。

「うたのん！」

「わっ！」

歌野が喜んでいたとき、水都が抱きついてきた。

「ぐすつ…よかった…うたのんが無事で…本当によかった…」

「みーちゃん…うん、私もみーちゃんが無事で…よかったよ…」

歌野と水都はお互いに無事が分かり、その嬉しさから涙が出る。

「こつちです皆さん！」

「みんな！無事か!？」

「乃木さん！」

そして、森の奥から若葉とひなたが来た。

「どうしてここが分かったんですか？」

その問いにひなたが答える。

「神樹様から神託が来て、ここに諏訪のみんなを轉移させたって聞いてすぐに若葉ちゃんと一緒に来たんです」

「そっかー、ということは私たちは諏訪から香川県までワープしたってことね」

「そういうことになるな、とりあえず救急車と他の仲間たちにも連絡しといたから今は安静にしててくれ」

「オツケー、乃木さん。私も少し疲れちゃったな、みーちゃん膝枕お願い」

「うん…いいよたのん、今はゆっくり休んでね」

若葉たちが諏訪のみんなの安否を確認している間、歌野は水都に膝枕をしてもらい、疲れを癒すため眠りについた。

そのあと、救急車と勇者たちが来て、全員無事に生き残ることが出来た。

歌野は怪我や疲労からみんなより入院期間が長かったが、水都と若葉たちが毎日見舞いに来てくれたため、退屈せずにすんだ。

——時は大幅に戻り

香川県のどこかの山のとつぺんに、たった一人、夜空を眺めていた。今の時間帯は午後九時で、山に登る人などいないことを狙って、徹は山を登った。

なぜ徹がこの時間に登ったのかというと、諏訪の様子がわかるように一番高い山のとつぺんで見るという理由だった。

諏訪の人々がどんどんと光の玉となって香川県の方に飛ばされることに安心し、次は白鳥歌野と藤森水都をさがした。

「くそっ、どこにいやがる…無事だといいいんだが」

徹は内心焦りながらも探し続けた。

そして…

「見つけた！」

二人の姿が見え、少し安心するつかの間、二人の所に進化体が突っ込んでくる姿が見えた。

「あぶねえー！」

そう言い、徹は大災害の日と同じことをやった。

「(今回はまじでやしないと二人は助からない！左腕を捧げた今どれだけ力が出せるかわからないが全力で行くぞ！)」

着弾点を予測し、武器召喚で武器を召喚し、右手で投げる構えに入る。

そして、全魔力を右手に集める。

「それじゃ、行きやがれ！」

徹はそう言い、武器を投げる。

あの大災害の日に投げた時よりも強く投げたためか、夜空の彼方に消えるまでが早かった。

「ふうー、これで諏訪のみんなは無事、救出っ」と

そう言い、徹は、夜空の景色を楽しみながら歩いて山を降りていった。

——そして現在

千景から電話が来て、急いで来ないと乃木さんが考えた。うどんフルコースという拷問に近いレベルをやると言われ、急いで言われた場

所に向かう徹の姿があった。

## 第五話

### 初陣での転生者の行動

私は徹先輩を初めて見たとき、私たちとは何か違う感じがしました。まるで、徹先輩がこの世界の人間ではない、そんな感じでした。若葉ちゃんも徹先輩から何かを感じたと私に言い、私も感じたと言いました。

でも、初陣でみんなが帰ってきたとき彼から感じてしまった。

彼が、徹先輩が、あの大災害の日感じた強い力だということに。

諏訪のみんなを救出した翌日の朝、いつもより一時間早めに起き、自分はバーテックスと戦うための準備をしていた。

本当はしなくてもいいのだが、左腕を神樹に捧げたことで力がどれほど弱っているのか確認しなければならなかった。

「まずはよく使う身体強化から」

最初はいつもお世話になっている身体強化からやった。

一から、左腕以外の身体全体に魔力を流し、魔力回路をつくる。そのあと義手となった左腕にも魔力を流し込み回路作ったあと身体の回路と左腕の回路を繋げる。

義手の左腕には苦労したが、なんとか身体強化は成功、これで安心して使える。

「(でも少し弱いな…こりや、体の一部一部を大切にしなければならぬ。よし、次に移ろう)」

次に全然使っていない再生だが、できなくなっており使い物にならないかったため、最後の武器召喚に移る。

「(武器召喚…まだ色々わからないことがあるが、今はわかるところだけを確認しなければ)」

意識を集中させ、武器を空中に召喚させる。

空中に召喚されたのは、一本の黒い剣だった。

「(武器は…増えてないか、とりあえずこの黒い剣から調べるか)」

武器を手に取り、じっくりと見た。

剣身から取っ手まで真っ黒に染まっっていて、例えば言うところの世の

絶望を凝縮したかのような色をしていた。

スツキリとしたフォルムをしていて非常にシンプルなため、使いやすさが抜群にあった。

「(これで武器召喚も完了、でも…何かが足りない。この武器以外に、まだ他の武器がある違和感がする)」

武器を消し、そう考える自分。

そして、時計を見たときには午前六時を指していた。

自分は考え事を止め、朝食の準備にとりかかった。

いつもどおりの日常を送り、夕日が落ちかけあたりが暗くなる頃、自分を含めた七人は丸亀城の外郭にいた。

「ひなた、神託では今日が奴等が来る日なのか？」

「はい、そろそろ来ますよ」

若葉の問いにひなたが答えたとき、ひなた以外の六人のスマホが警戒音を鳴らした。

直後、世界が静止した。鳥も雲も、海の流れも、風の音さえも、全てが止まってしまった。

自分はスマホを手に取り画面を見ると、そこには、『樹海化警報』の文字が大きく表示されていた。

「(始まった!)」

自分がそう思ったとき、海に向こうから巨大な樹木が伸び、街やそこにいる人々、あらゆる物を飲み込んでいった。

樹海化、神樹がバーテックスの侵入を許したときに発生する現象であり、勇者達が安心して戦えるように街と人々を守る障壁でもある。「……これが私たちの初陣だ。我々の手でバーテックス共を討ち倒す」

若葉がみんなに向けて言った。その言葉からは責任という重みがあつた。

「それはいいけど……当然、あなたが先頭で戦うのよね……あのバケモノたちと。リーダーなのだから……」

「誰が先頭とかじゃなくて全員で戦えばいいでしょ。それがチーム

ワークつてもんですよ」

「チームワーク……」

千景が呟いてるとき、自分は一人の勇者を見た。

その勇者は体を震わせていた。顔色も悪く、ひどく怯えてる様子が誰の目にも分かった。

「なら、伊予島さんは戦えるのかしら？ ひどく怯えてるようだけど」

千景はそう言い杏の方を見る。

そう、先程から怯えているのは杏だった。

彼女は元々大人しい性格で、自ら立ち向かう精神なんて持っていない。そして、彼女はまだ十代の女の子だ。

一歩間違えれば一瞬で命を失ってしまう戦いに恐怖を持つのは当然の反応だ。

「千景、もうよしとけ。初めての戦いだからな、怖がるのは当たり前のことだ。」

「…兄さんが言うのなら…分かった」

千景は少しふてくされてしまった様子でそっぽを向いてしまった。これは後で何て言われるのかわかったもんじやない。

まあ、それは一旦おいといて、まずは杏を落ち着かせないと。

自分は杏に近づき、優しく杏の頭を撫でる。

「あつ…徹…先…輩？」

杏が驚いたように顔を上げる。その顔からは少し安心したかのようを感じた。

自分は杏の頭を優しく撫でながら、優しくな表情で語りかける。

「安心しろ杏。誰だって恐怖に立ち向かうことは怖いことだ。戦えないのなら、戦わなければいい、ただそれだけの理由でいいんだ」

「徹先輩…」

杏は安心したのか体の震えが止まり顔色もさつきよりよくなった。

「そうそう、徹先輩の言うとおりだよ杏。後はタマたちに任せタマえ」  
そこからの球子のナイスフォロー。よくやった球子と自分は思った。

「はあ…徹先輩。勇者が一人欠けてしまえば戦力が大幅に下がるんで

すよ」

「若葉。確かに君の言うとおり、一人欠けることで戦力が下がってしまふ。でも、そこで無理やり出してしまえば、戦力の問題ではなくなってしまう」

「それでも——」

若葉が言いかけようとしたとき、この空気を一新するかのようにな友奈が声をあげた。

「みんな！仲良しなのはいいことだけど、話し合いは後にしようよ！」  
「友奈の言うとおり、話し合いは後だ。今は目の前の敵に集中しよう」  
「……………」

自分は普通に対応したが、四人は微妙な顔をしていた。

「……………そうだな、今は目の前の敵に集中しなければ」

「よーし！タマたちもそろそろ気合入れっか！」

「みんなで仲良く勇者になるー！」

友奈の掛け声と共に自分たちは一斉に勇者システムのアプリを起動させる。自分たちは光に包まれ、それぞれの服装が変化した。

若葉の戦装束は、桔梗を思わせる青と白の混合。

友奈の戦装束は、山桜を思わせる桃色。

球子の戦装束は、姫百合を思わせる燈。

千景の戦装束は、彼岸花を思わせる紅。

自分の戦装束は、黒百合を思わせる黒色。

五人の変身が無事終わったが、杏だけが変身できずにいた。

この勇者システムは、勇者の精神面に大きく左右する。戦う意思が無い場合、これは起動できない。

「ごめんなさい……………私……………まだ……………」

「気にすんなって！タマたちが全部倒してくるからさ」

申し訳なさそうにする杏だったが、球子が元氣付ける。

「そういうえば徹先輩。あなたの武器は一体どこに？」

と、若葉からの質問が来てしまった。

そう、勇者にはそれぞれ靈力を宿した専用武器がある。

若葉は刀、友奈は手甲、千景は大鎌、球子は旋刃盤、杏はクロスボ

ウを専用武器として持っていた。

そして、今の自分は武器を持たずに手ぶらだ。怪しむのも無理もない。

ここで武器召喚で武器を出してもいいのだが、まだばらさない方がいいと思う。

「ああ、大社から俺に合う武器がないって言われてな、変身出来るけど武器は今のところないんだ」

ここはあえて嘘をつかせてもらおう。

さて、若葉の反応はつと…

「そうですね、確かに徹先輩は初の男の勇者ですからね、あなたに合う武器もあんまりないことでしょう。

仕方ありません…今回は徹先輩は伊予島さんと一緒にここで待機してください」

若葉からそう言われ、自分は「へいよっ」と言ったあと伊予島とここで待機した。

周りの反応からは、若葉の言葉でほとんど納得していたが、千景だけが納得いかないような目で自分を見てきた。ほんと、後で何言われるか恐ろしくなってしまうた。

そこからは、若葉が先陣に切り、球子、友奈、千景がそのあとに続いていった。

みんなの背中が遠くなっていく中、横からの杏の声。

「みなさんはほんとに強いですね…徹先輩だって、武器さえあればきつと若葉さんのように一緒に先陣を切っていたと思いますし…」

杏は最初は微笑んでいたが、途中から苦笑いになった。

「私みたいな弱い存在は…ほんとに勇者になってよかつたんでしょうか」

不安からかクロスボウをぎゅっと握り、うつむきながら杏はそう言った。

…これは少し助言を与えなくては。

「杏。君は少し勘違いしている」



「勘違いですか？」

「ああ、人っていうのは何の目的なしでは強くなれないんだ。例えば、自分の憧れる人物になりたいとか、自分がとても大切に思う人物、ものとかを守るとかそこらへんかな」

「……………」

杏はそれを聞いたあと考え事をした。

これで少しは自信を持てたかなと自分は思い、目の前の光景に集中した。

目の前に映る光景は完全に掃討戦だった。

若葉がバーテックスを次々と一閃で斬り捨て。

友奈は拳でバーテックスを打ち砕き。

球子は旋刃盤を飛ばし、バーテックスを斬り刻む。

千景は大鎌でバーテックスを刈り取る。

よく見れば、千景は友奈と共に効率的に倒していることが分かる。

このまま行けばみんな無事に済むだろう、そう思ったときだった。

球子が旋刃盤を投げ、戻ってくる間にバーテックスが迫ってきた。

誰もが危ない！と思ったとき、球子に迫るバーテックスが幾本もの

金色の矢に串刺しにされた。

「杏…その格好はまさか！」

これには球子も驚いていた。そう、これをやったのは変身した杏がやったものだ。

杏の戦装束は白いストックを思わせる白色。その姿でクロスボウを構えていた。

「変身…できました。徹先輩の言うとおりに、タマっち先輩が危なくなってるときに、助けなきやって思ったらアプリが起動して…」

「そっか…杏、ありがとな！タマが前に立つから杏は後ろで援護をしてくれ！」

「はいっ！」

「徹先輩…ありがとうございます」

杏は自分にお礼をいってからクロスボウを前に構え、打ち始めた。

自分はそのまま戦いの光景を見ていた。

結果は、記憶通りとなった。

バーテックスが減ってきた時、バーテックスの動きに変化があり、何体かが一箇所に集まり進化体となった。

最初に杏が攻撃するが、発射された矢は赤く透明な板状組織に当たって跳ね返るが、間一髪、球子が旋刃盤で跳ね返った矢を防いだ。

進化体は普通のと違い少しだけ知性を持っている。そのため攻撃が、バーテックスとは違うため、手こずってしまった。

それでもみんなは諦めず最後は友奈の切り札で、進化体を粉々に砕いた。

「たくっ、ほんとひやひやさせんよ…。」

自分はこのようになることは記憶で分かっていたが、いざ実際に見てしまうとほんとに焦ってしまう。

「まあ、無事に終わったことだしいいとするか…ん？」

自分はそう思い、敵がもういないかスマホの画面を見た時だった。画面には自分の所に、バーテックスを示す赤い点が付いていた。

「周りを見てもバーテックスの姿が見えないとしたら…まさか！」  
気づいたときには遅く自分の立っている地面が大きく膨れ上がり爆発した。

自分はその衝撃で、空高くに吹き飛ばされた。

なんとか空中で体制を立て直し、下を見る。そこには、さっきの進化体とは形が違う巨大な蛇のような形をしていた。

「(こんなの記憶ではなかった…仕方ねえ、使うか!)」

自分は覚悟を決めた。武器召喚で黒い剣をを右手に召喚し強く握る。

そして、空中に足場を作り、勢いを作るために両足を乗せる。

「(相手が悪かったなあバーテックス) 終わりだ!」

そう言い両足で足場を強く蹴り、進化体に向かう。

進化体との距離が近くなったとき剣を振り、進化体を一刀両断し

た。

最後の一体を倒したことで樹海が揺れ、それと同時に花びらが空を舞う。

このとき、四国勇者の初陣は華々しい勝利で終わった。

視界が晴れると、見覚えのある景色に戻っていた。

「ふうー、みんなお疲れさん！」

自分はみんなの方を向いて言ったが、五人とも自分の方を見て唾然としていた。ひなたの方をちらりと見ると、ひなたも唾然としていた。

「(おかしい、確か自分は進化体に空高く飛ばされ、そこでみんなに見えないように武器召喚をして進化体を一刀両断してそのあと……あっ)」

自分は致命的なミスに気づいてしまった。だが時すでに遅し、そのミスは若葉の口から出た。

「徹先輩……答えてください。その黒い剣は一体なんですか」

そう、自分の右手には黒い剣が握られていた。

「(やつちまった……ああ、先が思いやられる)」

自分は致命的なミスを犯したことにひどく後悔した。

## 第六話

### 優しさと感謝

初陣での戦いで、自分たちは素晴らしい勝利を収めた。多分、今頃そのことでニュースでもやっていると思う。人々も勇者たちの素晴らしい活躍に今夜はお祭り騒ぎになるだろう。

自分もみんなが無事に勝利したことに祝福したかったが、今はそんな状況ではなかった。

なぜなら、今の自分の置かれている状況は……

「徹先輩…答えてください。その黒い剣は一体なんですか」

若葉にできれば答えたくない質問を受けているからだ。

「くそっ！どうやってこの状況を打開する」

自分は必死で考える。ここで正直に話せばめんどくさい事になることは確実、ここは嘘と本当を混ぜた証言で、なんとか切り抜けるしかない。

「さあな、俺にもこの剣がなんなのかまだ完全にわかってないんだ。分かることといたら、強く武器を念じると出ることと、しまうことしかわからん」

「そうですか…なら、それはいつ出来るようになったのですか？」

「今さっきだ……」

「「「「……………」」」」

やばい、ちゃんとみんなの方を真剣な眼差しで見ているのに、友奈以外ジト目で見つめてくるんだが。

「（頼む！これ以上は勘弁してくれ！）」

自分は祈るようにして顔をふせる。

「みんな！そんなことより、みんなで一緒にご飯でも食べに行こうよ！」

この重い空気の中、友奈の言葉で一瞬で空気が軽くなった気がした。

「友奈…はあ、そうだな、確かに腹も減ってきたことだしみんなで食べに行くとするか」

「そうだな、タマもお腹すいたし。どうせ徹先輩のことだから問題ないしな」

「タマっち先輩……徹先輩、大丈夫ですよ。みんな徹先輩のことを責めたりしませんから」

「ふふっ、そうですね。今はそのことは置いて、みんなの勝利を祝いましょうか」

「それじゃー郡ちゃんもおさんも一緒に行こー！」

「ええ、行きましよう高嶋さん……ほら、兄さんも早く行きましよう」

「え、あ、ああ、すぐ行く」

まさか友奈の言葉がここまで効果あるとは、友奈にはいつかお礼の一つや二つしてあげなければ。

自分は剣を消して、そのままみんなの後について行った。

「ありがとう、友奈。君は命の恩人だ……」

自分はそう思った。

そして、数十分歩いてついた店はうどん屋だった。

どうやらこの店は自分以外みんなのお気に入りのお店らしく、よく行くらしい。

どうりでよく千景と外食するとき、大体はここになるわけだ。

お店に入ったとき店員たちが自分たちを見たとき大いに歓迎してくれた。

しかも、なんでも好きなものを頼んでいいと言われ、自分たちは喜んだ。

「さーて、何かあるかなつと……あれ？」

自分はメニューをパラパラとめくり見たが、ほとんどがうどんで、最後ページにいくと蕎麦がちよこんとのとっていた。

「(この店……まさかの丼系がなくなっているだど!)」

先週までは、天井やら親子丼があったはずなのに今はその名前がメニューから消えていた。

「店員さん、私たちにはいつもの、徹先輩にはうどんフルコースを」  
「(若葉?!)」

必死で探している中、若葉が勝手に注文しだした。若葉たちは問題ないと思うが、自分にいたっては問題大有りだ。てか、うどんフルコースでなんだ？

「徹先輩、いくら丼系を探しても無駄ですよ。なぜなら…タマたちが消したからだー！」

「なっ!？」

まさかの犯人が身近にいたとは、まあ大体は予想してたが。

「すいません、徹先輩。私は止めようとしたんですけど、若葉さんとタマっち先輩が話を聞かなくて」

「ごめんね、とおさん。私も止めようとしたけど若葉ちゃんが『これも徹先輩の為なんだ!』って言われちゃって止めるに止められなかったんだよね」

「そうですね、あの時の若葉ちゃんの顔はかつこよかったですもんね、つい撮っちゃいましたよ」

杏と友奈はいいが、ひなたは止める気はさらさらなかったか。

「はい、お待ちどうさま」

そう話している間にもう店員が運んで来た。

若葉たちのうどんは乗っているトッピングが違うだけで後は全部同じに見えた。

そして、若葉が勝手に頼んだうどんフルコースが自分の所に来た。運ばれてきたのは、かけうどん、ぶっかけうどん、生しよううどん、釜玉うどん、肉うどんの五種類。

普通にうまそうに見えるがそれ以上に驚くところがあった。

「おい若葉。このうどんフルコースほんとに一人分の量なのか？」

「なにを言っているんですか徹先輩。男ならこれぐらいの量が普通じゃないんですか？」

「明らかに普通じゃないだろこの量は、てか誰情報だよ」

「土居さんから聞いたぞ」

自分は球子の方を見るが、それと同時に球子は目をそらした。

へえー、どうりで量がおかしいことだ。今、自分の前に並べてあるうどんなのだが、全部大盛りの量という明らかにおかしいと言うしか

なかった。

「まあいいや、全部食ってやる!」

自分は、食べきれない不安を捨て、絶対に食べきるという自信を付ける。

「さっすが徹先輩。男前っすね」

「(いつか仕返ししてやる。覚えてろ球子)」

「うむ、全員来たことだし食うとするか」

「うん!それじゃあみんな、いただきます!」

「」「」「いただきます」「」

友奈の掛け声と共に自分たちは食事を取り始めた。

「なあ、若葉。今回の戦いで分かったことがあるんだけどさ」

「なんだ?」

みんなが食事を取っているとき、球子が口を開く。それに若葉は不思議そうに首を傾げる。

「今までは大社に言われたから若葉をリーダーだとしてきたけど、やっぱり若葉がリーダーをしたほうがいいんじゃないかって思ったんだ」

「……どうしたんだ、急に?」

「いやさ、今回の戦いで若葉が先頭で戦っていたからこそ、タマたちも戦うことができたんだ。それに若葉がいなければ危なかったところもあったわけだし」

「そう…か」

「私も、若葉さんがリーダーやるのがいいと思います!」

「うんうん。若葉ちゃんって、いかにもリーダーって雰囲気あるしね」

「……反論はないわ。あなたの活躍は確かだったし……高嶋さんも、あなたがリーダーに的確っていうから……兄さんはどうなの?」

「ん?ああ、俺も若葉がリーダーをやるのに賛成だ」

確かに、若葉は性格、実力も自分たちよりずば抜けている。だから自分は若葉がリーダーをやるのに賛成した。

でも……まあ、その件は後でいいか。

「みんな……ありがとう……」

「良かったですね、若葉ちゃん」

ひなたが微笑んで言ったことで場の空気も少し暖かくなった。

「ところで……そうと決まれば若葉。一つ言いたかったことがあるんだけどよ」

そんな中、球子がジト目で若葉に言った。

「なーんーで、お前はタマのことを名字で呼ぶんだ？ 友奈とかは『友

奈』って言うのに」

「私は名前で呼んでって、前に言ってたからね！」

「むう………だったら私も『球子』とか、もっと親しみを込めて『タマっ  
ち』でもいいから」

球子は不機嫌そうに言ってきた。

「実はタマっち先輩、若葉さんに名前で呼ばれないこと、実は気にして  
るんですよ」

「はあ!? そそそ、そんなことねーしっ！ 別に気にしてなんかねーから  
な！」

「あと、私のことも名前で呼んでください」

「杏！ 都合よくタマの言葉に乗っかるな！」

二人が仲良く微笑ましいやり取りをする中、千景が小さな声で予想  
外な一言を言った。

「……私も……名前で呼んでいいわ……」

「!?!?!」

自分と友奈とひなた以外、千景の一言で驚いていた。

「何よ……その顔……?」

「いや、少し意外だったと言いますか……」

若葉がそう言うのと、千景はそっぽを向いた。頬がほんの少し桜色に  
染まっている。

「他のみんなが名前で呼ばれてるのに……私だけ名字なんて……変だ  
から。あと、敬語使って話すのもやめてほしいわ……むずがゆい」

「…千景」

自分はそう言い千景の頭を優しくなでる。本当なら抱きついて褒



めたいところだが千景が恥ずかしがりそうだからやめておこう。こは良い兄としていかなければ。

「いい一步を踏めたな、千景。兄さんは嬉しいよ」

「兄さん……」

そう言うと、千景の頬が一層赤くなつた。ああ、可愛いなあ。

「なるほど……ならば後は徹先輩、あなただけですよ」

「え、なにが？」

「みんな名前で呼ばれるのにあなただけ『徹先輩』じゃ寂しいでしょう？みなさんもそうですよね？」

ひなたの問いに頷くみんな。

「やれやれ、好きに呼んでくれ」

「はい、そうさせていただきますね、『徹』さん」

そうして自分の呼び名が決まつた。

若葉と球子からは『徹』と呼ばれ、杏とひなたからは『徹さん』と呼ばれた。

友奈は『とおさん』と呼ぶのに定着していたため変わらずそう呼び続けることになった。

「それじゃあ、みんなで記念撮影をしましょう！ふふふ……これで若葉ちゃんの秘蔵コレクションが増えます」

ひなたが満面の笑顔でスマホを取り出した。

なんか最後、個人の欲が出たような……まあいいや。

「ひなた！お前はまだそんな収集していたのか！いつか絶対に跡形もなく消してー」

「ひなた、なんだ秘蔵コレクションって？」

「なんか面白そう！ひなちゃん、後で見せてね！」

「私も後で見たいです！」

「ええい、お前たちは興味を持つんじゃない！」

「賑やかなことはいいことだな！」

「……私は別にどうでもいいわ……」

「そう言うなって千景、ほら行くぞ」

自分はそう言い、千景の手を握って若葉を中心にみんな集まつた。

そして、ひなたのスマホがその光景を写真に収めた。  
その写真には、七人全員の笑顔がくつきりと写っていた。

なんとかうどんフルコースを完食した自分はなんとか立ち上がり  
みんなと店から出た。

外はもう暗くなっていたが、まだ辺りはお祭りムードだった。

「徹さん、少しお話しませんか？」

「ん？どうした二人とも。話っていったい？」

千景は今、友奈と話しているため、話が終わるまで一人で待っている自分にひなたと若葉が来た。

「ここだと少しまずいので、話が聞こえない場所に移動しましょう」

一体なんの話なのかわからないが、自分は「分かった」と言って、ひなたと若葉と一緒に人通りの少ない場所に移った。

「で、一体話ってなんだ？」

この問いにひなたが答える

「はい、今回の徹さんの件ですが…若葉ちゃんと決めて、大社にはまだ  
言わないことになりました」

「へえー、そりやなぜ？」

「まず、謎が多いんです。徹さんがまだ完全にその剣の分かりきっていない状態で大社に渡してしまえば、何が起こるか分かったもんじやないですからね。しかも、まだ弱い力ならまだしも、若葉ちゃんから、みんなが苦戦していた進化体を一撃で斬るぐらいの力があると聞いて徹さんが持っていた方が安全だと分かったからです」

「なるほど……ていうか見ていたのか若葉」

「ああ、遠かったが進化体が一刀両断されてるところが見えてな、戻った後の徹の持つ剣で推測できる」

「さすがだな若葉。で、これで話は終わりか？」

「いや、最後にお礼を言わせてくれないか」

「ん？なんか俺、お礼を言われることなんかしたか？」

自分は不思議そうな顔で言った。

その内容はひなたと若葉の口から出た。

「徹さん、三年前の大災害の日救ってくださってありがとうございます。」

「徹、私からも三年前の大災害の日みんなを救ってくれてありがとうございます。」  
「そう言い、二人は頭を下げた。」

「おいおい、なんで俺にお礼を言うんだよ」

「えーとですね、徹さんから、三年前の私たちを救ってくれた強い力と同じだったので一応そのお礼を・・・ですね」

「ああ、私も一緒だ。私も三年前、徹の持つ剣と同じやつが救ってくれたおかげで全員生存できたお礼をだな一応」

「そうか、それはよかったな」

「ええ、ほんとに。ご本人に会ってみたいものです」

「ああ、まったくだ」

ひなたは微笑んで言ったが、若葉は少しぎこちなく微笑んて言った。

「(こいつら、完全にわざとやってるな)」

ひなたは隠しきれているが、若葉はバレバレだ。

そこからは少し雑談しながらみんなのところに戻った。

戻る際、ひなたから「なにかあつたらすぐ連絡してください」と言われ自分は「分かった」と言って、そのまま解散する流れになった。

「(まあ、左腕のことがみんなにバレてないことだけ、まだましなほうか……)」

千景と一緒に帰っている際、自分はそう思った。

## 第七話 二回目の侵攻と兄妹の買い物（デート）

初陣が終わってその翌日の朝、自分は自室で記憶の確認をしていた。

「うーむ…どうしたもんか」

自分は今、あることで悩んでいた。

それは……

「（若葉の件、どうしようかなー）」

記憶では、自分の母親の症状が悪化したと連絡がくるはずだが、今回は来なかったためまだ安心できる。

でも、問題は若葉だ。若葉は三年前の大災害からバーテックスに強い憎しみを抱いている。そのため、戦う時はいつも最前線にいた。しかし、その憎しみが強いせいも、よく周りを見ずに突っ込んでしまう。そのせいで色々と問題が起こってしまうわけなんだが……

「（二回目の侵攻で、俺がどう行動するかで大きく変わるな……）」

三年前に手助けをしたわけだし、少しは言うこと聞いてくれると自分は信じ、そのままいつも通りに日常を送った。

時は経って、二回目の侵攻。

「徹、今回はあなたも戦ってもらいますよ」

「無論、そうさせてもらう」

若葉の言葉にすぐに自分は返答した。

昨日の件もあって今回の戦いは自分も出た。

「うんうん！これで全員戦えるね！」

「そうだな、まあ徹はタマたちの足を引っ張らないことだな」

「ほおー言ってくれるな球子」

「まあまあ、落ち着いてください徹さんにタマっち先輩。バーテックスがもうすぐくるんですよ」

「そうだよ！二人とも、今は目の前のことに集中！」

友奈と杏の言葉で自分と球子は少し落ち着いた。

「すまん、友奈、杏」

「ごつちもすまん」

「さて、話はおしまいだ。そろそろ起動しろ」

若葉の言葉で自分たちは勇者システムを起動し、構える。

自分は剣を右手に召喚し、若葉の隣に立つ。

「徹、私が行く。だから徹たちは後ろから——」

「若葉、その前に約束事がある」

「なんだ、約束事とは？」

自分は若葉の言葉を遮る。遮ったことで若葉は少し不機嫌な顔をしたもののすぐに冷静な顔に戻る。

「奴らを率先して倒すことはいいいことだが、単独先行はやめろ」

「…理由を聞こうか」

「俺たちは神樹に向かう奴らをここで食い止めなくちゃいけない。お前がそこから離れれば色々と困難になる」

「…極力近くにいることを努力しよう」

若葉は少し考え、そう言った。

「そうしてくれ、俺たちが今を生きる人々を守ることを忘れるな」

「ああ、わかった」

こうして、二回目の防衛が始まった。

それから数分、自分たちは順調に敵の数を減らした。

最初は若葉が先行で突っ込んだため、また注意しなければと思っていたが、そんなに遠くには行っておらず支援できる範囲で戦っていた。

そこから自分たちは出来るだけ離れずにそれぞれの敵に突っ込んだ。ちなみに自分は身体強化を使って訓練で学んだ技術をいかし、動きを最小限に、思考を加速させ敵を一体一体確実に一撃で斬った。

「進化体がくるぞー！」

そうしている間に若葉の言うとおり、バーテックスの融合が始まり、一体の進化体となった。

その姿は元の姿の口部分を残したまま巨大化した形だった。

「でかくなっただけか……？」

「どうなんでしょう……?」

球子と杏は不思議そうに首を傾げる。

「とおさん、なんかやばい予感がするんだけど」

「兄さん、私も高嶋さんの言うとおりに、なにか嫌な予感が——」

千景が言い切る瞬間、進化体の巨大な口が開き、無数の矢が自分たちめがけて射出された。

「みんな！各自で防御しろー！」

若葉の言葉で、それぞれ行動した。

球子と杏は、球子の旋刃盤の楕円形状で防御し、若葉は神速の居合で来る矢を斬っていた。

そして自分と千景と友奈は……

「と、とおさんって結構早いなだね」

「に、兄さん……急につかまるとびっくりするからやめて……」

「すまん、とっさの行動だったからさ」

進化体が矢を射出する瞬間に自分は千景と友奈を抱えて先に攻撃範囲から出ていた。

「それよりどうするの兄さん？あのままだと三人とも危ないわよ」

「そうだよとおさん！ぐんちゃんの言うとおりに、早くしないと！」

「ああ、わかってる」

自分は攻撃範囲内にいる三人を見る。杏を守る球子と矢を斬る若葉もそろそろ限界だと分かる。

それを見た自分は次の行動に急ぐ。

「えーと、とおさん、なにしてるの?」

「ん？なにってこっから進化体を倒すんだよ」

「まさか兄さん……その剣、投げるつもり?」

「そのつもりだが」

「ええ……」

「……兄さん……」

友奈と千景の視線がなぜか痛く感じた。剣を槍投げの構えで投げるのが、そんなにおかしいのだろうか？

だが今はそんな考える暇もない、一刻も早く助けなければ。

「まあ、見てなっつて」

自分はそう言い、狙いを定める。

「(少し照準を上を上げてつと) 行っけええ!!」

自分は進化体の口部分の少し上を狙い、思いつきり投げる。

進化体も接近してくる剣に気づいたのか、射出する方向を剣の方に  
変え、矢の波が剣を襲う。

だが、剣の勢いは止まらず逆に迫り来る矢の波を壊していき、その  
まま進化体の狙った部分に当たり大きくのけぞった。

「すごい…やったよぐんちゃん!とおさんがやつつけたよ!」

「いえ…まだよ高嶋さん…まだ倒しきってない」

「ああ、まだだ…当たった部分が浅すぎる」

隣で千景に抱きついて喜ぶ友奈に自分と千景は注意する。

そうしている間にも進化体が起き上がろうとしている。

「だったら早く攻撃しないとまたたくさんの矢が降ってきちゃうよ  
!」

「わかってるわ高嶋さん…でもさっきの兄さんの速さでも間に合わな  
いわ」

後ろで話し合っている友奈と千景は一旦置いて、無数の矢の範囲に  
いた三人を見る。

球子も若葉も限界だったのか膝を付き息切れしていることが分かる。  
杏の方もなんとか攻撃しているが効果が薄いことが分かる。

「(このままでは誰かが切り札を可能性が高い…仕方ない、初めてだが  
あれを使うか)」

自分はそう思い、目を閉じ集中する。

「…?兄さん、どうしたの?」

「おーい、とおさん、どうしたの?」

自分の行動に気づいたのか、千景と友奈は不思議そうに見る。

だが今自分は集中しているため声は聞こえない。

「よし!イメージは出来た。後は実行するだけ) んじゃ、行ってくる  
!」

そう言い自分はイメージしたことを実行した。

その時、自分以外のみんなは啞然としていただろう。特に目の前で見ていた友奈と千景は驚いただろう。

なぜなら自分は……

友奈と千景の目の前から突然消え、進化体の剣が刺さっている部分に現れたからだ。

「(初めての『シフト』は成功つと) 残念だったなバーテックス、終わりだ！」

そう言い、自分は剣を取り、進化体を切り刻み、最後は跳躍をして体の遠心力を使って進化体の体を両断した。

こうして、二回目の侵攻も勇者たちの勝利となった。

二回目の侵攻が終わった翌日。自分はリビングでくつろいでいた。

あの後、昨日とまったく同じ状況になりちゃんと言みんなに『シフト』の説明をした。説明したことでなんとかみんな納得することができ、最後は友奈の「みんなでご飯食べに行こー！」発言で解決した。

「今日は休日だからなー、しかも侵攻もないっていうしどうしよう…」

今日は休日で、しかも、ひなたから今日は侵攻はないと神託がきたと聞かされ自分は今の中ですらでまるで久しぶりに休暇がとれた社畜のようなテンションになっていた。でもいざとなると全然やることか思いつかない。

「兄さん、ちよつといいかしら」

そうしていると、千景が部屋から出てきた。

「どうした千景？」

「今日、買い物に付き合っって欲しいんだけど、いい？」

「ああ、いいよ」

どこかに出かけに行くのは分かったが、今日に限って千景の頬が少し赤くなっているのが気になる、兄妹で買い物に行くのが初めてじゃないし、なぜ恥ずかしくていいのか謎だ。

「それじゃあ兄さん、先にいつもの場所に行っって」



「ん？一緒に行くんじゃないのか？」

「いいから……」

「あ、ああ、分かった」

一瞬千景の言葉に恐怖を感じすぐに自分は答えた。

とりあえず、一回自室に戻り、財布とスマホをポケットに入れ、普段着の上に着用を羽織る。

「じゃあ、先行ってるからな」

そう言い、自分は先に寮から出た。

そこから数分後、自分はいつものショッピングモールの入口で待っていた。

「おまたせ、兄さん」

「ああ、千景。意外とはやかっ……た……」

自分は歩いてくる千景の方を見て、言葉を失った。

なぜなら千景の服装がいつもと違うからだ。

胸元に白いリボン、白黒の縦じに、スカートの部分に白いフリルのついたワンピース、そのうえから深紅の上着を羽織っていた。しかも、黒ニーソで絶対領域も見えてしまう。

「どう……かな……兄さん……」

千景の頬が赤くなり、恥ずかしそうに聞いてきた。

この時、自分はこの買い物の本当の目的に気づいてしまった。

千景が自分を先に行かせたこと、そして千景のいつもと違う服装、これらから分かること、それは……

「(まさかの兄妹でのデートだ?!?)」

よし、落ち着け自分。ここはまず千景の質問に答えよう。

「ああ、その服、すごく似合ってる。可愛いよ、千景」

「っ?!?!……ありがとう……兄さん」

千景があまりの恥ずかしさに、小声になっていた。

これで分かった。今回のデートで、自分が行うべき行動を……

「(自分がやるべきことはただ一つ、千景が望む行動をいち早く察して実行に移すことだ!)」

恋愛ゲームなら暇な時に何回かやったことがある。今それで身についた知識をフル活用する時が来た。

自分は意を決して、この兄妹でのデートに望むのであった。

視点は千景に移り――

あのあと私と兄さんはショッピングモールに入り、のんびりと歩いた。

「落ち着くよ、私。昨日予習したことをただやればいい、簡単なことよ。でも……」

私は兄さんの方をちらりと見る。

兄さんの顔はいつもどおりの優しい顔だった。でも今日はその顔を見るだけで、緊張してしまう。

私はこれまで、兄さんとデートするために昨日、高嶋さんに協力してもらった。

高嶋さんから、デートを成功させるまでの過程と、工夫するポイントを教えてもらった。

最初は大丈夫だろうと思っていたけど、実際にやるとしたら不安でしかなかった。

「でも、私から言わなければ始まらない……よし、いこう」

私は決意をして口を開く。

「兄さん、買い物する前に、ゲームセンターで遊んで行かない？」

まずは楽しく遊べる場所で、互いの仲を深めなくては。

私の勝手の発言だけど、兄さんはどう返してくるのか……

「ああ、いいよ。今日はなにもないんだ。思う存分遊んでいこう」

兄さんは笑顔で答えてくれた。

「よかった……やっぱり兄さんは優しい」

私は少し安心することができ、兄さんと一緒にゲームセンターの中に入っていった。

この時、徹と千景は気づいていなかった。

ゲームセンターに入ったとき、その後ろをこそこそと付いていく五人の姿を…

そして……

「うたのん…昨日退院したばかりだけど大丈夫？」

「ノープログラムよ、みーちゃん。だから今日は、必要な物をたくさん買っちゃいましょう」

「そうだね、うたのん」

「それじゃ、レッツショッピング！」

ショッピングモールに諏訪の二人が向かっている事に。

## 第八話 　　ある意味忘れられない一日

ここはゲームセンターの中、ここならではの騒がしい音が鳴り響く。

「さて、何をやろうか千景？」

「えっと…それじゃあ、私のおすすめするゲームを一通りやる…でどう？」

「ああ、それでいこう」

そんなことで、自分たちは一通りのゲームをやった。

シューティングや、レースゲーム、達人がやりそうな太鼓のリズムゲームなど色々をやった。

ちなみに結果をいうと、全部引き分けだった。

それから一通りやり終えた自分と千景はベンチに座っていた。

「ふう、一通りやったな、千景」

「そうね、兄さん…次はあそこで買い物してもいい？」

千景が指を指した方向にあるのは、女性を中心とした洋服屋だった。

「ああ、別にいいが…服なら結構前に友奈と一緒に買ったんじゃないのか？」

「えっと…兄さんが選んだ服…買ったことないから…」

自分は「ああっ」と納得する。

確かに、千景が持っている服、そして今着ている服は全部友奈が選んだ服だ。自分が千景の服を選ぶなんて一回もなかった。

「それなら行こうか、千景」

「うん」

自分と千景はゲームセンター出て、その洋服屋に向かった。

向かっている途中、何か複数の視線を感じたが気にしないことにした。

一方その頃、ゲームセンターから少し離れているベンチに座り、徹

と千景を見守る五人はというと……

「兄妹デート…これはこれで素晴らしいですね、タマっち先輩」

「なにが素晴らしいのか、タマにはわからんぞ杏」

「この素晴らしいさが分からないんですかタマっち先輩!? 兄と妹の関係が、恋人関係になる素晴らしいさよー!」

「うわっ! 分かったから杏、顔が近い近い!」

杏の興奮した様子に、球子は苦勞していた。

「うんうん、さすがぐんちゃん。昨日の教えた通りにやって安心だよ」

「うむ……覗き見などして二人に迷惑じゃないだろうか……」

「いいんですよ若葉ちゃん。これは覗き見ではなく、ただ二人のデートを遠くから見守るだけです」

「ただの屁理屈ではないか」

若葉と、友奈、ひなたはそう言いながら徹と千景のデートを見守っていた。

目的の洋服屋に着いた時、店の前に立っていた店員が、自分たちを見て、近づいてきた。

「いらつしやいませ。現在、お二人にぴったりのイベントがやっておりますよ」

「俺たちにぴったりのイベントってなんだ?」

「それは今回のイベントの題材が、『可愛い服で、男性の心を掴みとろう』でして」

なるほど、店員がなぜ今回のイベントが自分たちにぴったりと言ったのかわかった気がする。

「つまりだ、俺が千景の服を選び、それを千景が試しに着て、それを見た俺が心をつかまれるってことだ」

「……………」

千景も自分と同じくそう思ったのだろう。顔を伏せているが、顔全体が真っ赤っかだ。

「まあ、そりゃ恥ずかしくもなるわな……」

「……兄さん……行く……」

そう思っているとき、千景が自分の手を握って、小声でそう言った。「ああ、そうだな」

自分はそう言って、手をつないだまま店の奥へと行った。

一方、遠くから様子を見ていた五人はというと……

「すごいよぐんちゃん！見てるこっちもどきどきしちゃうよ！」

「キヤー！タマっち先輩！手をつないで店に入って行きましたよ！これほもう、兄妹の関係ではないのでは！」

「た……タマにはもう、杏が言ってることがわからなくなってきたぞ」

友奈と杏は、キヤーキヤーと騒ぎだし、球子は杏の言っていることに頭が混乱していた。

「ふむ……千景さんがあんなに恥ずがしがるのは初めて見るな」

「ふふ……そうですね若葉ちゃん。なら私たちも早く店の中に入りましょうか」

「いや、別に店の中に入らなくてもいいのでは……ん？」

「若葉ちゃんどうしました？……あれ？」

若葉が途中で言葉を終え、ある方向をじっと見ていた。ひなたも若葉のしている方向を見たとき、見覚えのある二人が徹と千景がいる洋服屋に入っていたのが見えた。

「若葉ちゃん、私たちも入りましょうか」

「いや、別に行かなくてもいいのでは？」

「いえ！若葉さん、見に行きましょう！」

「うん！あんちゃんの言うとおりに行こう！」

「ええ……」

杏と友奈の説得？で仕方なく店に向かった。

「……それじゃあ兄さん……私が着る服を選んで……ここで待ってるから」

「あ、ああ、分かった」

とりあえず自分は、千景の言われた通り服を探しにいったのだが

……

「(服が多すぎて決まらん!)」  
今は十月で、季節はまだ秋だ。それに似合う服を探そうとするが、とにかく服が多い。

服屋だから当たり前前っていうレベルではないくらいに多過ぎるのだ。

「(とりあえず、千景が似合いそうな服を考えながら探すか:)」

自分はそう思い、探した。

そして…

「これだな…」

「千景、これを試しに着てくれないか」

「……分かった……」

意外と早めに千景の所に戻り、自分が持ってきた服を渡した。

それを受け取った千景は少し恥ずかしがっていたが、着てくれるよ  
うだ。

そして、千景は試着するために、試着室に入った。

数分後、千景が試着室から出てきた。

「兄さん……似合……てる?……」

「……(か、可愛すぎる……!)」

自分は千景の試着した姿を見て、最初に思った。

千景に渡した服は、ほとんど同じ物で、色が違うだけだった。

それなのにこんなに可愛くなるとは、驚きを隠せない。

「兄さん?どうしたの?」

「…は!すまん、あまりに可愛すぎてな、つい見とれてしまったな」

「……っ。に、兄さんが選んだ服だから着たのよ…恥ずかしいけど……」

自分の感想に、千景は恥ずかしいのか、先程よりも顔が赤くなり、まるで湯気が出そうなくらいだった。

一応言うと、今の千景の服装はというと。

胸元には赤いリボンがあり、薄いピンク色のブラウスとスカート。

その上にところどころ花模様が付いている白い上着を羽織っている。

「そ、それじゃあ……この服でいいなら、もう私着替えてくるけど……」

「ああ、それでいいぞ」

服が決まったので、千景は着替える為、試着室に入った。

「ああ、今日はなんて幸せな日なんだ。こりゃ、最高の思い出もんだな……」

自分は試着室から少し離れたところで待っていた時だった。

「あれ？徹くんじゃん」

後ろから知っている声がしたため、振り返るとそこには、諏訪の勇者と巫女の、歌野と水都がいた。

「ああ、歌野さんに水都さん。昨日退院したって聞いたが、もう大丈夫なのか？」

二人の面識は見舞いに来た時の、自己紹介の一回ぐらいしかないが自分はいつもおりの口調で話す。

「ノープロブレムよ、あんな怪我、私のボディには無いも同然よ」

「うたのん……さすがに無理があると思うけど……」

歌野の言葉に突っ込みを入れる水都。

まあ、重傷を無いも同然って言っちゃあ無理があるな。

「それより徹くんはなんで女性物の洋服屋にいるのかな？」

「ああ、千景と一緒にここに買い物しにきただけだ。で、今千景の服が決まったから千景が着替え終わるまでここで待っているわけだ」

「ふーん……そうだ！いいこと思いついた！」

歌野が何やら思いついたようだが、嫌な予感がする。

「ねえねえ、徹くん。私とみーちゃんは何色が似合うと思う？そこらへん男性の意見が聞きたいんだけど」

「まじか……」

正直、自分はこういうのは苦手だ。千景は大丈夫だが、他の人となると難しい。

「(仕方ない、直感でいくしかないか……)分かった。頑張って考えてみるよ」

「ほんとー！じゃあお願いするわ、徹くん」



こうして、自分は歌野の頼みを受けた。

一方、遠くから徹たちの様子を見ている五人はというと……

「歌野さんは、徹さんに何を言ってるんでしようか？」

「うーん……全然聞こえないよー」

「気になるな」

杏と、友奈、球子は徹たちの会話が気になっていた。

「盗み聞きは流石にだめでは」

「そうですね、今は黙って見守っていきましょう」

「いや別に覗き見を許した訳では……」

「あっ！徹さんが歌野さんたちの体をジロジロ見えています！」

「なに！それは本当か！」

ひなたと若葉が話してるとき、杏の言葉で全員驚き、その様子を確認した。

その様子は、徹が歌野たちの体を見ながら何かを考えてる様子だった。

「いや、あれは多分、歌野さんたちに何か頼み事をされたのではないだろうか」

「いいえ！あれは多分浮気の可能性が——」

「徹——!!」

杏が最後まで言う前に、球子が全速力で徹の方に向かった。

「えっ！タマちゃん!？」

「た、タマつち先輩！まだこれは可能性の話で！」

「ふふふ……これは面白くなりそうですね、若葉ちゃん」

「私には、徹がかわいそうなめに合う未来が見えるのだが……」

若葉たちは、球子を止めるため徹たちの所に向かった。

「そうだな……まず歌野さんは黄緑色かな。で、水都さんが明るい水色が似合うと思うよ」

「なるほど……いいわね！グットよ！徹くん」

「ありがとうございます……徹さん。貴重な時間を取らせてしまってます

いません」

「別に平気だ。こっちもまつてる時間、暇だったからな」

なんとか歌野たちの頼みも終わり歌野たちは自分の言ったことを参考にして服を探しに行った。

「(そろそろ千景もくる頃かなつと……ん？なんか俺の方に誰かが向かってきている?)」

その足音は段々と大きくなってたため、自分はその音のする方に振り向いた。

この時自分は振り向かなければ、多分痛みも和らいだろう。

「このおお、女つたらしがあー!」

「ぐはっ!!」

振り向いた途端、勢いのある球子のドロップキックを受けた。しかも顔面に。

自分はその勢いで数メートルは吹っ飛んだ。

「タマっち先輩!?!やりすぎです!」

「とおさん!大丈夫!?!」

「徹!生きてるか!」

「面白くなるどころか、とんでもない展開になってしまいましたね」

「兄さん着替え終わったからって、兄さん!?!」

そつから先は簡単に言うのと、なぜか自分が浮気していると球子に誤解され、自分と、友奈、杏で球子の誤解を解き、千景の服を買ったあと、最後にみんなと食事をして、一日が終わった。

幸せか不幸かはわからないが、まあ楽しい一日を送れたことだけは言えた。

## 第九話 遠征、そして警告

デートの日から数日が経った。

その数日間、侵攻が数回起き、後の『丸亀城の戦い』と呼ばれるバーテックスの大規模侵攻も来たが、若葉の件の解決、イレギュラーの自分がいた事で無事、完全勝利を収めた。

そして今日、自分たち勇者六人、巫女のひなたは、瀬戸大橋記念公園に立っていた。

これから自分たちは、結界の外へ調査遠征に出かけることになった。

ひなたからの神託で、しばらくは侵攻が来ないこと分かり結果、遠征に行くことになった。

多分バーテックスの大規模侵攻で、敵側は大幅な戦力を使い、それが原因でしばらくは襲撃は来ないだろうと推測できる。

今回の遠征の目的は、生存者がいる可能性の高い北方を目指す。そして移動手段はバーテックスがいる為、徒歩のみだ。

「さて、誰がひなたを背負うんだ？」

ここで問題だ。さつき自分が言ったとおり、勇者たちは問題ないが、普通の人間の身体能力と変わらないひなたを勇者たちの中の誰かが背負って移動しなければ行けなかった。

「すみません、皆さん」

「気にすることないよ、いつもヒナちゃんには、私たちができない巫女のお仕事をやってもらってるんだから！」

ひなたは申し訳なさそうに言い、それに友奈が明るく答えた。

「ありがとうございます、友奈さん」

友奈の言葉に、ひなたは微笑んで礼をいう。

「それじゃ、最初は誰が二人を背負ってくか、ジャンケンで決め——」

球子が言い終わる前に、若葉がスツとひなたをお姫様だっこした。

「では、行くか」

「……」

「まあ、そうなるわな」

若葉のごく自然にお姫様だっこすることに、自分以外のみんなは一瞬呆気に取られていた。

「当然かのようにお姫様だっこするなんて……」

「なんか、見てるこっちが照れるっ！」

「……」

「千景、なぜそこで俺を見るんだ……」

「……別に……」

杏と球子は頬を赤らめていて、千景は自分の方を向いて、いかにもやって欲しそうな目をしていた。

「……？何かおかしいか？」

「……まあ、若葉がおかしいと思わなければ、それでいいよ……」

「お姫様と王子様みたいだね！」

若葉の反応に、自分は少し呆れた表情をし、友奈は感心したように目を輝かせていた。

これにはひなたも、照れたような笑みを浮かべ、若葉はいまだにきよとんとしている。

「じゃあ、若葉ちゃんの荷物は私たちで持つね！」

「そうだなっ！」

「よーし！ それじゃあ勇者、しゅっぱーっ！」

若葉の荷物を他の勇者たちで分担したあと、友奈の掛け声を合図に、自分たちは跳躍をし、瀬戸大橋を通って本州へと向かった。

結界の外はまるで世界の終わりだった。

建物はほとんど破壊されていて、ここにはもう、生存者が居ないのが当たり前だと分かってしまう。

バーテックスに破壊尽くされたこの世界は、空気が以前よりも綺麗としか思えなかった。

そうしている内に、神戸に着いた。

自分たちはかろうじて形を残しているビルの屋上に降り立った。そこから神戸の全景を一望するが、ここも同様、破壊尽くされていった。

「「「「グーとパーで別れましょ！ ほしい！「「「」」

時間を短縮するため、二手に分かれて探索することになり、グーパージャンケンでグループ分けをした。

結果、自分、千景、ひなた、若葉。そしてもう一方は、友奈、球子、杏というグループ分けになった。

こうして、三時間後に神戸港のフェリー乗り場近くに集合することに決め、それぞれ別方向に向かった。

廃墟と化した街並みを歩きながら、生存者の気配を探す。

崩れた建物の瓦礫や横転した車が各所で道を塞ぎ歩き回るのも困難だった。

どれほど多くの命が、ここで失われたのだろうか。

「(考えたくもねえな……)」

人の命は無限ではない、いつか終わってしまう。

自ら命を終わらせる人もいる。

だが今は違う、今は奴らが命を勝手に消していく。

奴ら、バーテックスに消されてしまう。

最悪な最後を奴らに与えられてしまう。

「(くそっ！今はそんな考えは捨てる！)」

自分は深呼吸をして、気を取り直した。

「生き残ってる人は、いないのでしょうか……」

ひなたがポツリとつぶやく。

「(ここも全滅したのよ……きつと……)」

千景の口調にはやるせなさど怒りが滲んでいた。

「まだそうと決まったわけじゃない。どこかに避難した人がいる可能性だってある」

そんな中、若葉だけは、まだ生存者がいる可能性を捨てていなかった。

自分もまだ人が生きている可能性があると思っていると信じていたかったが、実際にこの光景を見てしまえば、そんな希望、雀の涙ほどしか無いと思えてしまう。

「それでも…その希望を信じるしかないんだ……」  
そう思い、自分は生存者を探し続けた。

あれから三時間後、自分たちは待ち合わせの場所で他の三人と合流した。

結局、生存者を見つけることができず、他の三人のほうも見つけることはできなかった。

日は落ち、あたりが暗くなってきた頃、球子の提案で、自分たちは六甲山近くのキャンプ場跡でキャンプをすることになった。

球子の活躍もあり、テントを張ることや焚き火を起すのが早く出来た。

そして、夕飯も食べ終わり、自分以外のみんなは川で汗を流しに行った。ちなみに自分はバーテックスが奇襲してくる可能性があるため、川の近くにある寄りかかれる岩に寄りかかり、川に背を向けて見張る見張り役を受けた。

「ううっ、冷たいっ！　これが夏だったら、もつと楽しいのになあ……  
こう、水のかけ合いとかしてさっ！」

「うわっ！　何するの、タマちゃん！」

「友奈も水、かけてこい！　せめて気分だけでも、夏のキャンプ気分を味わうんだ！」

「よーし、わかった！　だったら容赦しないよ！」

見えていないが、水のバシャバシャつとする音から球子と友奈が水のかけ合いをしていることが分かる。

「冷たい水に浸かる時は、ジツとしているべきだ……動けば、体温を余計に持っていかれる」

「ええ、まったくですね……」

「冷水の中で動き回るなんて、銃撃戦の中に自ら飛び込んでいくよう

なもの——」

「うりやああっ！」

「ひゃあああー！」

さつきよりも大きい水の音と杏の悲鳴から、球子が思いつきり水をかけたんだろう。

「むむっ、不意打ちは卑怯ですよ、球子さん！」

「うるさーいっ！どうせ動いてもジツとしてても冷たいんだっ！だったら、お前らも遊べーっ！」

「そうそう！ みんなも一緒に楽しもうよ！」

「くっ、ならば私も容赦しないぞ！」

「……えい」

「きやー！ やったなーぐんちゃん、それー！」

みんなの楽しんでいる声が聞こえる。

その声を聞いた自分は思ってしまった。

「俺はたどり着くことが出来るのか…？ みんなが笑顔で、そして勇者が一人も死なない運命に変えられるのか…」

自分は不安に思っていることがあった。

それは今までの自分の行動だった。

自分はここまで、みんなが不幸になる所を回避してきた。そのこともあつて諏訪の二人、そして人々を救うことができたのだ。

しかし、そのせいなのか、最初のバーテックスの侵攻の時、記憶にないことが起きてしまった。

自分は抑止力を受けずに運命を変えることができる。でも、抑止力が効かないせいで、自分の余計な行動で、最悪な運命に落ちてしまうんじゃないかと不安になってしまう。

「…暗い考えはよそう…大丈夫だ。記憶にないことが起きたら、それを自分が解決すればいいだけだ。例えばそれが、自分が犠牲になろうとしてもだ)」

そう思っていた時だった。

『みーつけた』

「っ!? 誰だ！」

急に後ろから声が聞こえ、自分は勢い良く後ろを振り返り、周囲を一心不乱に見る。

その声は、少年のような声だったが、それを聞いた時、殺気のようなものを感じた。

それはまるで、子供が新しいおもちゃを見つけ、それをどう壊そうか考えている感じだった。

「(なんだったんださっきのは…?)」

後ろに振り返った時にはもう、それを感じるのとはなくなっていた。

自分は落ち着いて、正面に視線を戻した。

「(あつ)」

正面を向いたとき、自分は気づいた。

自分は見張り役を受け、みんなが川で遊んでいる中、自分はその川に背を向けて見張っていた。

そして先程、後ろに向いてしまったため、視線を正面に戻した時、そこに見える光景は……

「「「「「……………」」」」」」

みんなの全裸姿だった。

しかも、見えてはいけない部分が見えてしまうというラッキースケベをリアルで体験した。

「(さて……せめて苦しまずに殺ってくれ……)」

自分はまだ色々察していた。これから起きること、この天国のような光景が地獄に変わることを。

そして……時が来た。

「「「「「きやあああああああああ!!」」」」」

そこからはリンチの嵐だった。

大鎌の背と刀の峰と旋刃盤の表面と手甲の本気の攻撃だった。

自分は悲鳴をあげることもかなわず、その攻撃を受け、自分は意識を落とした。

「てっ、死んでしまうわ!!」

「ひいっ!」



自分は目が覚め、上半身を起こして思いつきり叫んだ。

だが、目覚めた場所は先程の所ではなく、ただ真つ白な空間に自分はいた。

それにさつき、久しぶりに聞き覚えのある声が聞こえたような。

自分はその声の主を見た。そこに居たのは……

「え、えーと、久しぶりですね徹さん」

自分をこの世界に送り出した張本人の姫神がいた。

自分がいきなり叫んだことが原因なのか少し震えていた。

「久しぶり、って言いたいとこだが姫神、どうして俺がここにいるのか聞いてもいいかな？」

自分はそう言うと、姫神は姫神は一旦落ち着いて、笑顔で答えた。

「えーとですね、徹さんに伝えたいことがありまして、徹さんが寝ているときに伝えようと思つたら、なにがあつたかは知りませんが、徹さんが気絶していたので体は置いて魂だけここによんだのです」  
「なるほど」

なんか魂だけここによんだとか物騒なことを言ってるけどそれは別にいい、ただ姫神にあの光景が見えてなくて本当によかつたと思つている。

「で、伝えたいことってなんだよ？」

とりあえず、早く戻つてみんなに謝なければいけないため、本題に移した。

「そうですね、こっちもあまり時間がないんで手短かに伝えます」

そう言い、先程まで笑顔だった姫神の顔が真剣になった。

自分もあの姫神の真剣な顔から、何か重要なことが伝えられると思ひ、耳を澄ます。

「徹さん、これは警告です。明日の大阪で、彼に出会つたら絶対に逃げてください。彼はバーテックス側の転生者であり、徹さんと同じ、抑止力の影響を受けずに運命を変える力を持っています」

その言葉はあまりにも衝撃的だった。

## 第十話

### 天の神からの転生者

「俺と同じ力を持っているか……だがなぜ逃げなければ行けない？ 敵側だとしても話し合いは——」

「出来ません」

言い切る前に姫神に断言されてしまった。

「徹さん、言っておくと敵側の転生者は私がやったわけではなく、人類の敵、天の神がやりました。なので、敵側の転生者が味方に寝返ることはまずないと思ってください」

「なるほど……」

天の神に転生された転生者が寝返ることはないのか…変なことでも吹き込まれたか、洗脳の可能性があるな。

「…徹さん、その転生者は天の神に力と情報を貰っただけで、あなたの考えている、洗脳や変なことを吹き込まれたというのはないんです」  
自分が言う前に姫神から答えが帰ってきた。

「まじかよ……じゃあその転生者はここに転生する前からやべー奴つてことか」

「はい、その転生者は平然と人を殺す殺人鬼です」

「殺人鬼って……いや…まさかな……」

「どうしました？ 徹さん？」

自分は川の出来事を思い出した。

突然と後ろから聞こえた少年の声、それと同時に来た殺気、それからわかることは……

「なあ、姫神…その殺人鬼ってまさか——」

「っ！ すいません徹さん、もう時間ないようです。これ以上ここに居続けると、天の神に気づかれてしまいますので」

そう言つて、少し焦っている姫神はあの時と同じように自分の方向にかざした。

殺人鬼の件は実際に見ればいいとして、それよりも今まで気になっていたことを言わなければ。

「姫神！ 最後に聞きたいんだが、この剣は一体何なんだ!？」

少しずつ意識が遠くなっていく中、自分は剣を召喚し、姫神に見せた。

「ごめんなさい！徹さん！その剣は色々複雑で、今は説明する時間はありません！多分、そちらの世界の本に載っていると思いますので！自力で見つけてください！」

「はあ！ちよ……待て……よ……」

姫神のまさかの人任せの返答に少し怒ろうかと思ったが、先程よりも意識が遠くなり、自分は意識を落とした。

「……………」

姫神は意識を落とした徹の魂が帰る所を最後まで見届けていた。

「言えなかった…真実を…私が原因なのに、言うのが怖くて言えなかった…」

姫神の目には涙が浮かんでいた。

いつか言わなければいけない時が来るのに、恐怖でそれを言うのができなかった。

「徹さんはまだ彼と対等に戦える力を持っていない…でも、いつか徹さんの力は無意識に進化する。今はそれを信じるしかない」

姫神は涙を拭い、祈るように手を合せ目を閉じ、口を開く。

「徹さん、あなたはこの先、多くの苦しみを味わい、そして地獄を見ると思います。それでもあなたは進み続けるでしょう。何度も世界をやり直し、人々の希望を集め、その希望をあなたに全て託しました。それもこれも全て——」

姫神は祈りを止め、視線を正面に戻し目を開ける、そして…

「私が犯してしまった罪なのだから」

姫神は呟くように言った。

翌日の朝、自分はテントの中で目覚めた。

外からはみんなの声が聞こえる。

「誰かがここに運んでくれたのか…とりあえず外に出てみんなに謝るか…」

自分は意を決してテントから出た。

テントから出ると、みんなは朝食の準備をしていた。

とりあえず自分は誰かが言う前よりも早く、土下座をした。

何度も何度もした結果、何とか許してもらえた。

その代わり、みんなからの距離が少し遠くなったけど。

「……大丈夫だ。自分の心は硝子ではなく鉄で出来ている……だから大丈夫だ……」

その時に食べた朝食の味はしょっぱかった。

朝食が終わった自分たちは片付けをし、荷物をまとめ、梅田に向かった。

梅田に着いた自分たちは話し合い、結果、梅田駅と大阪駅の地下街を探索することになった。

そこからは記憶通りだった。駅の階段には、破壊されたバリケードがあり、そこから暗く荒れた地下街を、懐中電灯を点けながら進んで行った。

「誰かいないか……！ツッ！」

通路を歩きながら若葉が何度も呼び掛けるが、自分たちの声と足音以外、何も聞こえなかった。

「人がいた痕跡はあるのですけどね……」

ひなたの言ったとおりゴミ箱が倒れ散乱していた。その中から生活ゴミが見える。

そして歩き続けると、円形の広場に辿り着いた。

中央に、水を吹き出していない噴水設備がある。

「な……なんだよ、これっ!？」

球子が声をあげる。その先に見える光景は最悪としか言い表せなかった。

白い塊、率直に言う人骨が山のように積まれていた。

大量の死体がここに積みまれ、そして白骨化した。

杏が悲鳴を上げた。

ひなたも力が抜けたのかその場に座り込んでしまった。  
他のみんなも、呆然と立ち尽くしてしまっている。

「……ひどい……地上は、ボロボロになって、地下も、こんな……」  
千景はこの光景に恐怖し、声が震えていた。

「(精神的にくるな、この光景は……)」

そう思っていたその時だった。

「誰っ?」

「「「「「っ!?!」」」」」

奥の暗い通路から一人の少年が出てきた。

その少年は自分たちと同じ中学生ぐらいの体格で、声からは自分たちを警戒している様子が感じ取れる。

「大丈夫だ。私たちは助けに来たんだ。安心してくれ」

若葉は少年を落ち着かせるように言葉をかけ、一歩ずつ近づいて行く。

少年は若葉の言葉を聞いて安心していいのか逃げずに立ち止まっていた。

「……………」

他のみんなは動かさず見守っていく中、自分だけはあの時の姫神の警告を思い出し、胸騒ぎしていた。

「(運良くあの少年だけが生き残った可能性があるが、なぜだろう、嫌な予感がする……)」

自分はすぐに若葉の所に行けるように足を一点集中して身体強化する。

「この手を取れ、君を安全な所に連れて行く」

そうしているうちに若葉と少年の距離は近くなり、少年に手を取らせようと若葉が手を差し伸べた。

「いや、別に連れていかなくてもいいよ、『勇者』さん」

「っ!若葉!そいつから離れろ!」

その少年の声を聞いたとき、予感確信に変わった。

少年が若葉になにかする前よりも早く、足場を思いつき蹴り少年

の所に一瞬で向かった。

そして…

「離れろ！」

足場を蹴った反動を使って、思いつきり少年の顔面に拳を叩き込んだ。

拳を叩き込まれた少年は抵抗出来るはずもなく吹っ飛ばされ、暗い通路の中に消え、大きな衝突音が暗い通路から聞こえた。

「なっ！徹、何を!？」

「とおさん!？」

「なにやってんだ徹!？」

「徹さん!？」

「兄さん!？」

「徹さん…なんで…」

みんなは突然の自分の行動に驚き、それぞれの反応が来た。

もっといい方法があったと思うが、咄嗟に出たのがこれだった。

「みんな、後で説明するから今は——」

「もーひどいなー、急に殴ってこないでよ、おかげで殺しそこねたじゃないか」

「そう言い切る前に、先程吹っ飛ばした少年が無傷で暗闇から出てきた。」

「ちっ！流石にこれで倒せるわけないもんな」

無傷だったことに自分は舌打ちをする。そしてみんなからの反応はと言うと。

「「「「「……………」」」」」」

みんな信じられない光景に呆然としていた。

そりや、生身の人間に耐えられないレベルのパンチを食らって無傷なのは驚きもんだよな。

「まーまー、まずは自己紹介でもしようかな、僕の名前は新崎しんざきあもん亜門、天の神様から使命を請け負った転生者さ」

新崎は口角を吊り上げ、自分たちに自己紹介をした。

「新崎と言ったか、私には何を言っているのかさっぱり理解できない

が、これだけは言える。貴様、ほんとに人間なのか？」

若葉は新崎に質問した。若葉の目からは、少し警戒していることが感じ取れた。

「うん、僕はちゃんとした人間だよ。僕は天の神様から力を貰っててね、そのおかげで体が頑丈なのさ」

「…そう…なのか…」

新崎の返答に若葉は困惑を隠せないようだ。

「そろそろいいかなあ、僕は彼に用があるんだ。ねえ、徹くん」

「あんたにその名前で言われたくないな」

なんで名前を知っているのかわからないが、多分、みんなの会話を聞いて知ったんだろう。

「そう…まあいいや、徹くん、とりあえず——」

新崎がそういつた時、突然自分に、あの時川で感じた殺気を感じた。

「(まずい!)」

自分は咄嗟によけようとするが、そうする前よりも早く新崎は自分の所に一瞬で来た。

そして、自分は何もできないまま…

「ぐはっ!」

蹴りをもろに喰らい打ち上げられた、そのまま勢いは止まらず天井を突き抜け、地上に飛ばされた。

体制を立て直そうとするも、気づいた時には新崎は自分の上を取っていた。

「——君の力、見せてもらおうか、イレギュラー」

新崎はそう言い、そのまま蹴りをくらわせた。

「ぐっ!」

自分はそれをガードするも、空中にいたため勢いを殺せず、自分はそのまま地面に激突した。

## 第十一話 怒り

空中で新崎の攻撃を受け、その勢いで地面に激突し、土煙が起きる。

「くっ、こりやきついな…」

「こちら、よそ見は厳禁だよ」

「危なっ!？」

体制を立て直そうとするも、空中から自分の所に向かって新崎の追撃が来る。それをなんとか回避し、距離を取る。さっきまで自分がいたところに、新崎の拳が当たり、そこから轟音が鳴り響き、土煙が舞った。

「徹！無事か!？」

「兄さん！」

若葉と千景が自分が吹き飛ばされて出来た穴から出てきた。

「はあー、僕は徹くんとか避けたいんだよ、邪魔はしないでくれ」

「いや、それは無理の話だ。今すぐにそれをやめろ」

「兄さんに手を出さないで…さもなければ…」

若葉と千景は武器を構え、戦闘準備をした。

「若葉！千景！俺のことはいいから早くみんなと一緒に逃げてくれ！」

「それはだめだ！危険にさらされている仲間を見捨てていけるか！」

「他の三人はひなたを連れて先に避難しているわ…後は兄さんだけ」

「ふーん、君たちって結構仲間思いなんだ。でも、そう簡単にはいかせないよ」

そう言った新崎は指をパチンツと鳴らした。

音が響いた直後、突然、数体のバーテックスが穴から出てきた。

「なっ!」

「うそでしょ…」

「マジかよ…」

自分たちはそのバーテックスを見て呆然としてしまった。

バーテックスは四国の侵攻の時に何回も見ているため見慣れている。



た。

だが、今自分たちが見ているバーテックスは例外だ。

あれは、他のバーテックスとは訳が違う。

あれは、あのバーテックスは……

「人型の……バーテックス……だと……」

人の形をした二足歩行型のバーテックスが数体、若葉と千景に立ち  
はだかった。

「どう？すごいでしょ。これが天の神様から貰った力だよ」

「そうか……だが、人の形をしてもバーテックスというのは変わら  
ん。ただ切り捨てるのみ」

「容赦はしない……」

そう言い、若葉と千景は人型バーテックスに立ち向かおうとした。

その時、新崎の口から、最悪な言葉がでた。

「ああ、言っておくけど、そのバーテックスは元人間だからね」

「なっ」

「え……」

「おい、新崎、一体どういうことだ……」

「うーんとねー、この能力の詳細わねー、『その人の負の感情を利用し  
て、バーテックスにさせ、操れる』って能力なんだ。まあ簡単に言う  
と、僕の操り人形になるってことだよ」

「……………」

自分たちは絶句した。

信じたくなかった。あいつの言ってることが嘘であつて欲しかつ  
た。

でも、もしあいつの言ってることが本当だとしたら……まさか……

「新崎……ひとつ……聞いてもいいか」

「ん？なんだい？徹くん」

自分はおそろおそろ言った。

「お前はそのバーテックス……いや、元人間は地下街にいた人間か？」

「うん、そうだよ」

新崎は何の躊躇もなく答えた。

「いやー、凄かったよ。最初ここに飛ばされた時はみんなが地下街に避難している最中だったからさ、僕も地下街に避難しているみんなに紛れ込んだよ。いやねー最初は地下街にいるみんなを全員バーテックスの餌になる前に殺そうかなって考えてたんだよ。でもさー僕は思ってたんだ。この能力を使うときだつて！」

新崎は楽しそうに言った。

そこから新崎は段々と興奮し、話を続けた。

「それから僕は能力が使える時がくるまで、地下街で暮らしてたんだよ。最初はみんな助けがくると信じて助け合ってたんだけどさー、段々と日数を重ねる内に、みんなの醜い部分が表に出始めたんだよ。特に大人かな、精神的にやばくなるとすぐケンカしちゃうんだよ。それで死人も出しちゃうし、まあ暇つぶしにはなったけど」

自分は歯を食いしばった。

「でもさー、まだまだ面白くなるんじゃないかなって僕は思ったわけよ。だから僕はね、みんなが寝ている時にこっそり武器を置いといたんだ」

無意識に拳を強く握る。

「結果だけ言うとなね、大成功だよ！大人たちは自分の欲を満たすために化けの皮をはがして殺し合いを始めたんだよ！怒り、憎しみが大量に来たときには、僕は興奮してしまったよ。まあ最終的には殺し合いに参加しなかった大人数名と子供たち、そして僕が生き残ったけどね」

怒りがこみ上げてくる。

「それから僕はね、みんなの絶望してる時に使ったんだ、この能力を。いやー、負の感情がたまってたから楽だったよ。簡単にバーテックスになっていくんだから。そういえばあの時の姉妹の絶望した顔は愉快だったよ。妹の方がずっと、『お姉ちゃん』って、バーテックスになるまで言っていてさ、中々——」

その時、自分の中adenaにかが切れた。

「貴様アアアアアアアアアッ!!」

新崎の話を聞いて冷静にいられる人なんていない。

自分と若葉は叫びながら、千景は怒りの表情を浮かべながら新崎に突進した。

自分は剣を召喚し、新崎に斬りかかる。

若葉と千景は、一步も動かない人型バーテックスを飛び越え、新崎に武器を振るう。

しかし…

「おおっと、危ない危ない」

「!？」

自分は新崎を斬ったと思った。だが違った。

剣を振った直後、大きな金属音が響いた。

いつの間にか新崎の手には、自分と同じ剣だが、その剣は自分の持つ剣とは違い、まるで希望の光を象徴にしているかのような、黄金の色をした剣が握られていた。

「ほい」

「なっ!？」

「くっ!」

そこから新崎はもう片方の手で、人型のバーテックスにかざすと、人型のバーテックスは、新崎を守るように立ち上がり若葉と千景の武器を右腕を使って防ぎ、鈍い金属音を響きわたらせた。

「言っただろう、このバーテックスは僕の操り人形だつて。君たちの相手は、そいつらがしてくれるよ」

「貴様っ!」

「……」

若葉と千景はどうかしようとするも、人型のバーテックスに邪魔をされてしまいどうすることも出来なかった。

「さあ、続きをしようか」

「っ! いつの間にか剣を! …… いや、武器召喚を使ったな」

つばぜり合いをしてるなか、自分は冷静に観察した。

「正解! でも僕には能力の限界があつてね、これしか出せないんだ」

「そうかい、そりゃ良いことを聞いた!」

自分はそう言い、剣を受け流そうとした。

だが……

「でも、徹くんの剣と僕の剣の性能が同じってわけでは無いんだよね」  
「?なにいつて——うお!?!」

新崎がそう言った瞬間、自分の剣に重みがかかった。

それは、最大出力の身体強化をしていてもなんとか耐えられるぐらいの重みだった。

「く、くそがつ……」

「凄いや、よく耐えられるね。でも、残念だったね」

新崎はそう言い、逆に剣を受け流され、体制を崩した自分の腹に、膝蹴りをかました。

「っ！ぐはー!」

「徹!」

「兄さん!」

それをくらった自分は、なすすべなく膝から崩れ落ちた。

意識が朦朧としているせいか、若葉と千景の声が遠くなっている。

「ふう、今回は見逃してあげるよ、別にここで殺してもいいけどそれじゃ面白くないし、対等じゃない。僕はね、戦う時は自分の力と相手の力が対等じゃないと楽しめないんだ。それに、そろそろ他の勇者の援軍が来そうだからここで帰らせてもらおうよ」

そう言うのと、突然、新崎と人型のバーテックスの体が光だした。

自分は知っている、これは諏訪の救出に使われた神樹の転移と同じだということ。

「(だめだ。もう、意識が……)」

意識が薄れかけ、視界がまともに見えないなか、新崎は自分に近づき、言った。

「剣を調べてくれ。そしていつか、その剣で僕を、呪縛から解いてくれ」

その時の新崎の声は、陽気な声ではなく、冷たい声だが、どこか希望を求めているような感覚がした。

「(一体、なにを……言つて……)」

その言葉を最後に自分は、意識を落とした。

## 第十二話

## 帰還

自分は何も無い荒野に立っていた。

空を見れば、血のような色をして、太陽は闇に飲まれたかのように黒く、それでもなぜか光を照らしていた。

「ここは…一体？」

自分は辺りを見回した。

すると、少し離れた所に、何かを話し合っている一人の男と女が見えた。

ここからじゃ聞こえないため、自分は近づいた。

しかし、口が動いてるのにもかかわらず声は聞こえなかった。

二人は自分の存在に気づかずそのまま話していた。まるで、自分はここに存在していないかのように。

だが、近づいたことで、二人の顔が見えた。

「!?…嘘だろ…」

自分は驚きを隠せなかった。

なぜなら、絶対に合わないと思った二人がここで話し合っているからだ。

「新崎と…姫神が…なぜ?…」

そう、新崎と姫神だ。

二人は真剣な表情をして何かを話し合っていたのだ。そして、話し合いの最中、新崎が何かを取り出そうとした。

「!?」

その時だった。突然、頭に激痛が走った。

まるでここから先は踏み込んではいけないと警告しているかのよう。

「なんなんだ…この光景は…一体…」

その言葉を最後に、自分は意識を落とした。

「……さん……兄さん！」

「……ち……かげ……？」

誰かの呼ぶ声に目を覚ますと、そこには涙目で自分を見る千景がいた。

「……兄さん！」

「うわ！」

自分は体を起こした時、突然千景が抱きついてきた。

不意に起こったことだが、自分は倒れないよう両手を後ろにやり、自分の体を支えた。

「よかった……兄さんが無事で……本当によかった……」

千景は抱きついたまま言った。

体が密着しているため、千景が震えていることが分かる。

……また自分は、千景を不安な思いにさせてしまったらしい。

「ごめんな、千景……不安な思いをさせてしまった」

自分は千景の頭を優しく撫でながら言った。

「……もう無茶な行動はしないって約束して」

「ああ、約束するよ」

そう言うと千景は抱きしめていた自分の体から離れ、言った。

「絶対……だからね……」

その時の千景の表情は、先程の悲しみではなく、安心した表情をしていた。

そんなこともあったが、とりあえず自分が意識を失っている間、何があつたのか千景から聞いた。

聞いた理由は他にもある、自分が意識を失った場所は、荒廃した建物周りに沢山あるところだ。

だが目を覚ましたときには、視界に映る光景は荒廃した建物ではなく、どこかの田舎の村にいたのだ。

千景から聞いた情報を整理すると以下の内容になった。

自分が意識を失い、新崎と人型バーテックスが消えた後、巨大な旋刃盤に乗った球子、杏、ひなた、友奈が来た。なぜ巨大な旋刃盤に乗って来たかという点、どうやら球子達が避難した場所が名古屋だったらしく、そこには無数の巨大な卵のようなものが大地に根付いているという、異様な光景を大型ビルの屋上から見たらしい。

その光景を見た球子は、ついカツとなり、切り札を使って無数の巨大な卵のようなものを薙ぎ払ったらしく、その後球子が、『これに乗って徹たちの所に向かおう』と提案したらしく、戻ってきたらしい。そして、自分が意識を覚ますまでここで待機するのは危険なため、巨大な旋刃盤に乗って進む事に決まり、諏訪に着いたらしい。

諏訪に着いても自分は目覚めることはなかったため、誰かが留守にする事になったが、妹である千景に決まったらしい。

そして、千景以外のみんなが諏訪の探索に向かった数十分後、突然自分は苦しみ出したらしく、先程の出来事になったと……

まとめた結果、今自分に出来ることは……

「とりあえず、みんなが来るまでここで待つか」

「そうね」

ただ待つことだけだ。

そのまま自分と千景は、適当な木に寄りかかりみんなを待った。

「徹！目を覚ましたのか！」

待つこと三十分後、若葉たちが探索から戻ってきた。

「ああ、みんな迷惑かけてすまな「心配かけんじやねえ！」ぐほあ!?!」  
戻ってきたみんなに迷惑をかけたことを謝罪しようとしたらいきなり球子に腹を殴られた。しかも思いつきり。

「なぜ殴るんだ球子！徹が気絶してしまうじゃないか！」

「大丈夫だ若葉、気絶しない程度に殴ったから問題ない」

「そうか、なら問題無いな」

「ええ……………」

なんで球子の行動を許したんだ若葉。

なんか二人に恨まれることなんてしたか、自分？

「すいません徹さん、こればかりはどうしようもなくして」  
「まあ、私たちを心配させた罰つてことで諦めてください」  
「…千景から聞いた話だとサクサク進んでた気がするが…」

杏とひなたが慰めの言葉？をかけるが、自分は殴られた痛みを我慢して、言った。

「もおー、とおさんはなにもわかってないんだから」

友奈が頬を膨らませて言った。

「なにが？」

「女心つてやつだよ。とおさんがどんなに短い時間に起きたとしても、私たちにとつては長い時間をかけて起きたことになるんだから」  
「そうか…みんな、心配かけてしまって本当にすまなかつた」

とりあえず、みんなに心配かけすぎてしまったことが分かつたため、自分は頭を下げみんなに謝罪をした。

「今回は無事に目覚めたから許すが、次に無茶な行動をしてみろ…その時は、分かるな」

若葉が刀をちらつかせながら言った。

半分脅迫に近かつたが、これは自分のせいでもある。

「分かつた」

そのため自分は即座に返答した。

「よしっ！徹の件も終わったことだし、これからみんな農作業をやるぞー」

「「おーっ!!」」

「…おー」

若葉の掛け声でみんなが声をあげる。千景も大声ではないが、みんなと声は合わせていた。

「すまない、なにがどうなつたら農作業をやることになつたんだ」

だが、自分はそんなことは知らないため、頭が混乱していた。

「ああ、徹は意識を失っていたから知らなかつたな。じつわな、遠征に行く前日、歌野さんからもし諏訪に着いたら畑を耕しておいてって頼まれてな、徹が意識を失つてる間にみんな話合つてやることに



なつたわけだ」

「そうか：：なら早くやつちやいますか」

若葉の言葉に、自分は納得する。

「ああ、早速やるとしよう」

自分たちは、一本の鍬と蕎麦の種や他多数の種を持つて農作業をした。

なぜ鍬が一本だけかというと、若葉に聞いた所、地上にある鍬は全部ダメになってしまい使えなかった。

だが、あの一本は木製の箱に入れられ、埋められていたものらしい。その証拠に、耕そうとする畑の付近に穴を掘った形跡があり、その隣に人の身長ほどの大きさがある木製の箱があった。ちなみに箱の中はもう何もなかった。手紙が入っていたはずだが、多分若葉が持っているんだろう。

作業が終わり、みんなが諏訪大社上社本宮への階段で少し休憩している中、自分は諏訪大社上社本宮にいた。

しかし、諏訪大社上社本宮も本宮境内は無事だったが、神殿はバーテックスによつて破壊されていた。

それでも自分は気にせず神殿の前に立ち、手を合わせて祈った。

ちなみに、ここに来た目的は、この神様に報告するためだ。

なにを報告するかはもう決まっていた。

「諏訪の土地神、あんたがまだ生きてるかはわからないが一応報告はしておく。あんたが今まで守ってきた諏訪のみんな、そして歌野と水都は無事に四国で暮らしている。だから、今はもう休んでくれ」  
これがちゃんと伝わってるかはわからない、でも、自分は伝わっている信じ、立ち去ろうとした。

その時だった。

ドサツと後ろから聞こえた。

「なんだ？」

自分は後ろを振り返る。

そこには、一冊の古い本が落ちていた。

自分はその本を拾う。

「結構古いな…題名は『願いを叶えるための戦い』つか、なんでこの本がここに?…まあ、土地神の贈り物ってことで貰っておきますか」

自分はそう言い、本を持って神殿から立ち去った。

そのあと、自分がみんなの所に戻ったと同時にひなたが神託を受けた。

内容は、四国が再び危機に晒されているということだった。

そのため調査遠征は中断し、自分たちは四国へと帰った。

## 第十三話

### 模擬戦にて

土居球子と伊予島杏

この二人の記憶は、実に運命的な出会いをしていた。

安芸真鈴の受けた神託に従い、球子が杏を救った時、そこから二人は意気投合し、姉妹のような関係を持つようになった。

自分には無い女の子らしさを持つ杏を守る球子、物語の王子様のような人に救われる事に憧れていた杏。

それはまるで、物語で言う姫を守る王子と、守られる姫のようだった。

だが、運命的な出会いをした二人は、バーテックスの戦いでの最初の犠牲者だった。

変えてやる、死なせはしない、自分の持つこの力で、絶対に変えてやる。

遠征から帰ってきた数日後の昼食時間。

自分たちは食事をしながら、設置されたテレビから流れるニュースを聞いていた。

「嘘ばっか流してて嫌になるな」

「仕方ないですよタマっち先輩、人々の士気を下げないためにはこうするしかないんですから」

「そうだけどさあ……」

球子が不満を漏らすのも無理もない。

今流れているニュースの内容は、これまでの勇者の功績を嘘を混ぜて盛った内容だった。しかも、前に起きた諏訪の人々を救った光は、勇者たちが起こした奇跡と報道されていた。

「(いつか神樹から罰が当たるぞ)」

そんなことを思いながら自分は久しぶりに食う天井の残りを片付けた。

放課後、自分は本屋で、目当ての本を探していた。

千景は、友奈と一緒に訓練をしようと言っていたため、今は自分ひとりだ。

目当ての本を見つけ、それを手にとって買い、その本が入った袋を受け取り外に出た時だった。

「あれ？徹じゃん」

「ん？球子と杏か、こんなところで出会うなんて偶然だな」

そこには、帰りの途中である、球子と杏がいた。

「そうですね…徹さん、よければ一緒に帰りませんか？」

「ああ、いいぜ」

「タマつち先輩もそれでいいですか？」

「タマは別にそれでいいぞ」

そんなわけで、自分は、球子と杏と一緒に帰ることになった。

「そういえば徹、あの本屋でなにを買ったんだ？」

帰りの道中、尋ねてきた。

「これだが」

自分は袋から買った本を取り出し二人に見せる。

「なにになに……ってこれラノベじゃん！」

「私は読んだことないですが、よくテレビとかのCMとかでやってましたね」

そう、ラノベだ。

ちなみに内容は、主人公が異世界転生して無双する話だ。

……正直、話は面白いが、ちよつと主人公がチートすぎる。

「で、話は変わるが、今日二人は一体何してたんだ？」

「はい、私たちも徹さんと同じで本を買ってたんです」

「ふーん、どんな本を買ったんだ？」

「はい、私が買った本は——」

そっからは寄宿舎に着くまで、杏の買った少女漫画の話をかきされた。

ちなみに杏が話してる途中、球子を買った本を見せてもらった。

球子を買った本は、ヒーローものの漫画で、いかにも男心をくすぐ

る内容だった。

：いつか買って読んでみようと思った。

それから翌日、調査遠征でもあまりにもショッキングすぎる光景を見て、雰囲気が悪くなっているのをどうにかしようと、若葉はある事を提案した。

「これより、レクリエーションとして、バトルロワイヤル形式の模擬戦を始める」

そこからルール説明された。

- 1 範囲は丸亀城の敷地全体（先生から許可は取っている）
- 2 武器は模擬戦用の武器を使うこと
- 3 最後まで勝ち残った者が他のメンバーに対し、常識の範囲内で自由に命令する権利が与えられる

「それでは、今から一分後に開始だ。それでは…始め！」

若葉の開始の合図で、自分たちはそれぞれ別れた。

一分後

「徹！覚悟！」

「とおさん！かくごー！」

「兄さん…全力で行くよ…」

「徹！勝負だ！」

「徹さん、最初に脱落させていただきます！」

「一対五とかふざけんなー!!」

そこには若葉、友奈、千景、球子、杏の総攻撃から逃げる、自分がいた。

「徹！逃げるのか！」

「こんなん普通逃げるっての！」

なんとか逃げるも、一向に撒けない。それよりも、段々と追い詰められていってしまう。

「(やられるのも時間の問題か…:…だったら)」

自分は逃げるのを止め、木刀を構え、若葉たちに立ち向かった。

「逃げるのを諦め立ち向かうときか、ならこちらも好都合、受けてみ

よ！」

若葉が先に攻撃を仕掛けてきた。

若葉の居合は早いのが防ぐことはできる。だがそうした場合、その居合を守ることに集中してしまい他の勇者の攻撃を受けてリタイヤだ。でもそうしなければ、居合で即リタイヤだ。

実質詰んでいると断言できる。

だが……

「……ふっ」

自分は口角を上げる。

確かにこの状況は詰んでいる。でも、自分は違う。

自分は、この状況を逆転させることができる。

「はああああっ！」

若葉の居合が自分を斬る。

誰もが『やった！』と思っただろう。

だが、若葉斬った先には、自分はいなかった。

「っ!?後ろ——」

「遅い！」

若葉が言う前に、他の三人を斬り、そして若葉に重い一撃を加える。

「くっ！」

しかし、そんなに若葉は甘くない、若葉は重い一撃を木刀と鞘を使い、重い音と風圧を立ててぶつかり合う。

「い……一体……なにが……」

「なんで……とおさんが……私たちの後ろに……」

「た……タマはまだ……」

だが、若葉が防いだとしても、千景と友奈、そして球子はそれに対応することはできず、木刀の重い一撃を受けリタイヤとなった。

「一体なにをした！どうやって私たちの後ろをとった！」

若葉の問いに、自分は答える。

『縮地』を使ったのさ」

ウソですごめんなさい。本当は『シフト』を使いました。

この『シフト』長距離のワープは剣を使わなければいけないけど、短

距離のワープは剣を使わなくても出来る。ただし意外と体力を使う。

「(みんなには、長距離の『シフト』しか話してないからなあ……)」

適当に『縮地』と言ったものの、普通こんな速さ出ないため、そくバレルと思っていたのだが……

「これが『縮地』なのか！実際にこんな速さを出せるなんて、驚きだ」

あつ、信じちゃったよ、どうしよう……このままほったらかすと面倒だし、バラすか

「すまん、嘘だ」

「……えっ?」

本当に信じていたのか、ばらした瞬間、若葉の力が緩んだ。

「すまん」

自分はまだ呆然としている若葉に、謝罪しながら木刀を振り下ろす。

「いたっ!?くっ、不意をつかれるとは……無念」

若葉は呆然としていたため攻撃を防ぐこともできず、降りおろされた木刀を受け、リタイア。

「(これで若葉はリタイアしたわけだが……うん……ほんと……ごめん)」

自分は少し罪悪感を感じるが、最後の一人、杏を探しに行った。

いや、行こうとしたが正しい。

「いたっ!」

突然どこからか来る矢に対応するも、先程の戦いで体力の使いすぎか、対応することができず、武器を持つ右手に当たり、衝撃で落としてしまった。

「すいません、徹さん。優勝者の特典、私にももらいますね」

そう言いながら、木の影に隠れていた杏が出てきた。

「(体力がもうないから、『シフト』は不可、武器を回収しに行っても矢でリタイヤ……打つ手なしか)」

その考えに至った自分は両手を上げ、高らかに言った。

「降参します!!」

こうして、勝者は杏となった。

勝者となった杏は、その権利を何に使ったのかという……

「私のものになれよ、球子……」

「わ、若葉君……そ、そんな事を言われても、タマには他に好きな人が……」

「待ちなよ、若葉君！ 球子さんが嫌がっている！」

「あ、高嶋君……って、なんじゃこりやあああああつ!!」

「カット、カットおっ！ ダメだよー、タマっち先輩！ ちゃんと台詞通りに言ってくれないと！」

途中まではよかったが、球子の我慢の限界を迎えたことよってダメになってしまった。

杏は権利を使って、杏のお気に入りへの恋愛小説のワンシーンを球子と若葉、そして友奈を使って再現していた。

ちなみに内容は、若葉が球子に壁ドンをし、甘い言葉を囁いてる所に友奈が割って入るというよくある三角関係だった。

若葉は背も高いし、言葉遣いも問題なしなため男子役をやっても違和感はなしだ。

友奈も優等生役をやっているけど違和感がなかった。普段から真面目だからか。

で、肝心のヒロイン役の球子だが、杏の手によってやんちゃな球子が、美少女になっていたではないか。

「（…ほんと、ちゃんと女の子らしい格好をすれば普通に可愛くなれるんだけどなー）」

「うーん…もう少し再限度を上げるためには…徹さん、若葉さんの役をやってください」

「……まじで」

「はい…やっぱり壁ドンは男子がやったほうがいいのかと思いましたが、そんなことを思っていると杏からの役交代を言い渡された。

自分は命令に逆らえず、やることにした。

「よし…徹、さっさと終わらせるぞー！」

球子は半分ヤケになりつつあった。

「そうだな、杏、始めてくれ」



「わかりました！それでは…三、二、一、スタート！」

なんかよく映画をとる時に使うパチーンとなるやつが鳴ると教室が静まる。

自分は落ち着きながら、全力で演技することにした。

「よう。急に呼び出して悪かったな」

「うん、別に用事はないから大丈夫だよ、徹君。それで、話って何？」

誰だこいつ!?と思いたくなるぐらいに球子のキャラが変わってて、違和感が凄い。

だが、ここで台無しにするわけにもいかないため演技を続けることに。

「ああ、お前に言いたいことがあるんだが…：…なんて言えばいいかなー…」

「？」

そこから先の言葉が出ず、口ごもる仕草をする自分に対し、球子は不思議そうに首を傾げる。

「(ここで一気に畳み掛ける!) …：…ああもうめんどくせえ！」

「きやつ…：…!?徹…君？」

自分はそう言って球子に詰め寄り壁際に追い詰める、そして勢い良く右手で壁に手を突く。

バン!と音が鳴り、その音に驚いたのかのように球子は体を竦める。

「(…：…ちよつくらアレンジしてみようかな)」

そこでなぜか自分の遊び心が出ってしまった。

後はセリフを言えばいいだけなのだが、そこに自分は余計な行動を入れた。

左手を使って球子の顎を少しクイツと上げ、強制的にお互いの目を合わせた。

そして、球子の耳に囁くように、セリフを言った。

「俺のものになれよ、球子…：…」

さて、ここから先は自分のセリフはないため内心、ホツとしながら球子のセリフを待った。

「……………」

しかし、球子はセリフを言わず黙ったままだった。  
というか、段々と顔が真っ赤になっているような。

「おーい、球子大丈夫か？顔がめっちゃくちや赤いぞ」

「も…」

「も？」

「もう…耐えられにやい」

「ちよっ、おい球子!？」

そう言った球子はそのま自分の方に倒れた。

自分は球子が床に倒れないように抱きつくように支える。

「みんな！球子が急に倒れたから保健室に…て…みんな？」

「「「「……………」」」」

なぜかみんなも、球子と同じように顔を真っ赤にして呆然としていた。

「え…ちよっ…みんなー!？」

あのあと、数秒経って球子以外はみんな我に帰り、色々とみんなから言われたが、全部言葉があやふやで全く聞き取れなかった。

## 番外編 レッツ農業!

模擬戦が終わった翌日。

今日は雲一つない晴天だった。

春のあたたかな光が、自分たちを照らしてくれる。

桜の木の花びらが緩やかな風で空を舞う。

ここで花見をしたら、いい思い出を作れるだろう。

そんな中、自分はというと……

「はあ……はあ……後……半分……っ！うおおおおお!!」

現在進行系で土を耕していた。

なぜこうなったのかというと、それは昨日の夜に来た、若葉からの一通のメールからだった。

『明日の朝、体操着に着替えて丸亀城前に集合』

「……明日、なんかあんのか?」

自室でラノベを読んでいた時、急に来たメールに自分は首を傾げる。

「兄さん、入ってもいい?」

「ああ、いいぞ」

すると、ドアのノック音と共に千景の声が聞こえたため、千景を自室に入れた。

「それで千景、一体どうしたんだ?」

「えっと……兄さんのところにもメール来た?」

千景がスマホの画面を見せながら言った。

画面には、自分が見たメールと同じ内容だった。

「俺のところにもそのメールが来たが……なにがあるのかが分からないんだ。千景は?」

「私も知らないわ」

「そうかー」

こうなると当日に説明される可能性が高いな、だったら……

「とりあえず、今日は寝よう」

「そうね、今日は色々な事があって疲れがたまっているし今日はもう寝るわ」

「そっか、おやすみ、千景」

「ええ、おやすみなさい、兄さん」

明日になれば分かることなので今日はもう寝ることにした。

そして今日、教室に行ってみると、若葉とひなた以外全員いた。

みんなに聞いたところ、みんなの方にも同じメールが来ていた。

若葉が何を考えているが分からないが、とりあえず着替えて丸亀城前に行こうつと自分たちは結論づけ、男である自分は女子と一緒に着替えられないので、後で合流しようと言って、教室から出て、少し離れた男子トイレで着替えることにした。

あのあと、丸亀城前に行く途中でみんなと合流したため、みんなで行った。

「おはよう、みんな」

「おはようございます、みなさん」

集合場所には、体操着姿の若葉とひなたがいた。

二人は自分たちに気づき、挨拶をした。

自分たちも若葉たちに挨拶し、球子は自分よりも早く若葉に聞いた。

「それで、昨日のメールは一体なんだ？タマたちに教えてくれ」

「ああ、その説明は歩きながら話そう、とりあえず付いてきてくれ」

自分たちは若葉の言うとおりにして行った。

「それじゃ、タマたちに教えてくれ」

「ああ、今日はある人からの依頼でな、手伝いに行くんだ。だから昨日みんなにそのメールを送った」

「ある人？」

「若葉ちゃん、ある人って誰？」

球子は首を傾げ、友奈が話を続ける。

「ふふ、それは会ってからのお楽しみだ」

「若葉ちゃんの言うとおりです。なんせみんなが知っている人なので」

「そうだな、ひなた」

若葉とひなたがお互いに笑う。

「俺たちが知っている人？…なんか嫌な予感がする」

自分はそんな不安を覚えながら、若葉の後について行った。

歩いて数分後…

「グッドモーニング！みんなー！」

「皆さん、おはようございます」

「場所が畑って所で気づいてたけどやっぱりかあああ！」

自分たちが着いた場所は、広い畑だった。

そこには、鍬を持った歌野と、水都がいた。

「とゆうことで、今回の依頼人の歌野さんとその付き添い人の水都さんだ」

「おはよー！歌野ちゃんに水都ちゃんー！」

「おー、タマたちが知っている人って歌野と水都だったのか、タマは納得したぞ」

「おはようございます、歌野さんに水都さん、あの一件以来お会いしていませんでしたね」

「…おはよう…」

「……」

みんなが挨拶をしている中、自分は考え事をしていた。

「(さて…明日はどうするか)」

記憶ではバーテックスの侵攻は明日だ。

しかも一番重要な分岐点だ。

「それじゃあ、今日手伝ってもらうことを言うねー」

正直今日は仮病を使って明日の準備をしたかったわけだが、あのメールが来たせいでうっかり忘れてしまった。

まあ、今思い出したけど…

「——つと言うわけで、徹くん、いいかな？」

「別にいいよー」

「いいの!? ありがとー、徹くん」

「……ん? ちよつと待つて、つい反射的に言ってしまったが一体なんの話をしていたんだ？」

「それじゃー徹くん、よろしくねー」

そう言つて歌野は鍬を渡してきた。

自分はそれを受け取る。

「えつと…すまん、つい反射的に返してしまつて話を聞いてなかった。もう一回説明してくれるか」

自分しか鍬を持つていない時点で嫌な予感がするが…

「だから、徹くんはこれからこの畑を一人で耕すの、だいじよーぶ、少しはやつてあるから」

「へ、へえー、そうかーそうなのかー」

自分は畑を見る。

畑の大きさは一軒家が二軒入るほどの広さを持っていて、歌野がやつてあるところが、その畑の四分の一だった。なので残りの四分の三は自分一人でやることに…重労働すぎるだろ。

「(ああ…くそ! これも訓練だと思つてやるしかねえ!)」

自分はこれを訓練だと思ひ込んで畑を耕すことにした。

そして今に至る…

「あー、もう無理、疲れた」

畑仕事を終えた自分は、適当な場所に倒れた。

「お疲れさま、徹くん、ナイスガッツだったよ!」

「そうか、もう俺がやる仕事はないよな?」

「うん、そろそろ若葉さんたちの種まきが終わりそうだしそこで休憩してて」

どうやら自分が土を耕すと同時に種まきもやっていたらしい。  
とりあえず、みんなが終わるまで休憩した。

「みんなー今日は手伝ってくれてありがとー！それじゃあ、乾杯！」  
「「「「「かんぱーい」」」」」

みんなの仕事が終わり、ちようど昼食時間だったため今は桜の木の  
下で花見をすることになった。

「みなさん、お弁当を多く作ってきたので沢山食べてください」  
「「「「おおー」」」」

そこからは、水都の作ってきた弁当を食べたり、ひなたが若葉の写  
真集をみんなに見せて若葉が恥ずかしがったりと、楽しい花見になっ  
た。

「徹さん」

「ん？どうした、水都」

そんな中、みんなが楽しくしているのを少し離れた場所で見ている  
と、水都が話しかけてきた。

「えつと…今日はうたのんの無理なお願いに受け入れてくれてありが  
とうございます」

「ああ、別にいいよ、こっちもいい体力づくりになったしな」

「そうですか、聞いてはいたんですけど徹さんってすごいですね」

「ん？聞いていた？何を？」

水都の発言に自分は違和感を感じたため、水都に聞いた。

「えつと…昨日うたのんと一緒に若葉さんの所に畑仕事の手伝いを話  
したとき、若葉さんが『畑仕事なら、徹をビシバシ使っていいから  
な』って言ってて」

ふーん、若葉がそんなこと言っていたのかー、へえー。

「ありがとう水都、俺にそのことを言ってくれて」

「あ…はい、どういたしまして」

とりあえず水都にお礼を言った。

「よし、いつかひなたに若葉の写真を沢山あげるとするか」  
若葉の仕返しを考えた自分は、そのまま花見を楽しんだ。





## 第十四話

### 進化

あの時、徹が来なければタマも杏も死んでいた。

でも、徹はタマたちを助けるために新しい力を使った。

かっこよかった。まるで漫画に出てくる正義のヒーローみたいだった。

その時の徹の姿を見て最初に思ったことはそれだった。

でも、現実はそう甘くなかった。

タマたちのせいだ。

タマたちのせいで、徹は……一人で苦しむ思いをしてしまったんだ。

ある日の夕方、事前に神託で言われていた、バーテックスの侵攻が起こった。

今回の神託には『今までにない事態が生じる』という不吉な解釈があったため、ひなたは勇者全員に普段以上の警戒を促した。

いつも死と隣り合わせでバーテックスと戦っているため、今までにない事態が起こるなんておかしくないだろう。

「(しかし、今回の侵攻はとても重要な分岐点だ。なんと少しでも球子と杏を助けなくては)」

「今回は切り札を使う事は無しにしましょう」

そんなことを内心思っている杏からの注意がきた。

そこから杏の精霊を宿す危険性を説明で自分たちは納得し、使わなければいけない場面以外は使わないと決め、バーテックスとの戦いが始まった。

戦闘開始から数分後、ことは順調に進んでいた。

今回は事前に若葉に前衛から中衛に移ると行っているため、前衛は若葉と友奈、千景が敵を倒し。

中衛の自分は前衛から抜けてきた敵を残さず倒す。

そして後衛の球子と杏は互いに支援しながら遠距離から攻撃する、

バランスのいい陣形で戦闘は進んだ。

「進化体が出るぞー！」

そうしているうちに、若葉の言ったとおり遠くの方でバーテックスが集まり出して進化体が形成し始めていた。

「させませんっ！」

唯一射程が届く杏が射撃するが、仕留めてもすぐ埋め合わせがくるため効果がなかった。

「だったら俺が『シフト』を使って——」

「待ってください、徹さん！ここは私がやります！」

『シフト』を使おうとするが、杏に制止されてしまった。

「皆さん、その場から動かないでください！今いる敵は私が一掃します！」

そう言い杏は、神樹へとアクセスし、精霊をその身に宿した。

その精霊の名は、全てを凍て付かせる氷と雪の化身であり真白な死の象徴、雪女郎。

杏はクロスボウを上空に放つ、するとそこを中心に猛吹雪が起こった。

吹雪は進化体と周囲にいるバーテックスを飲み込み、止んだ時には全てのバーテックスが氷漬けになり、そして地面にそのまま落下し砕け散った。

「おお、すごいな……あんず」

「やったね、アンちゃん！もう敵、少ししか残ってないよー！」

「はあー、別に切り札は使わなくても俺が——ッ！」

球子は驚き、友奈は杏を褒めながら残りの敵を片付けてる中、頭痛が突然自分を襲った。

「……? 兄さん、どうしたの？」

「いや、大丈夫だ。ちよつと目がくらんだだけだから」

「そう……」

自分の異常に気づいた千景が声をかけてきたが、大丈夫と返した。

だが、頭痛は未だに収まらない。

「おい……ヤバイのが来たぞ……」

「(くそっ…こんな時に)」

そしてとうとう、分岐点の最大の敵が来た。

球子が言った先には、バーテックスの大群がいたが、問題はそれを率いるように進む、今まで戦ってきたのとは格が違う、まるで巨大なサソリのような姿をした個体だった。

「何て言うか…：巨大なエビ…：かな？」

「むしろ、サソリに近いと思うわ…：高嶋さん…：」

「私が行きます！ 今は一番攻撃力は高いはずです！」

そうしてる間に杏は跳躍してサソリ型バーテックスを射程に捉え、先程の拡散した雪を今度は一点凝縮し放った。

普通ならあの攻撃を受けたら一撃で倒せる。

だが自分は記憶を見ているから知っている、あれは、自分たちが知っている奴らとは大きくかけ離れていることに。

「そんな…：っ！」

杏が驚きの声を上げる。

一撃を食らったサソリ型には体表に霜が着いた程度で全く効いていないと思われる様子だった。

そしてサソリ型は鋭い尾針を杏に突き出した。

「わっ!?!」

間一髪で杏はよける。

自分たちも援護に向かおうとするが、バーテックスの大群がその道をふさいだ。

杏がサソリ型の集中攻撃を受けていたが、球子が輸入道を宿し、巨大化した旋刃盤で相手の尾を弾き、その隙に杏を旋刃盤に乗せて救出した。

だが安心するにはまだ早い。

恐らく杏が発案したのだろう、高熱と極低温の連携攻撃を受けてもサソリ型には全くダメージを与られず、逆にサソリ型の尾に強く叩き飛ばされてしまい、二人は地面に落ちた。

それによって切り札の装束は消滅し、精霊による強化が解除されてしまった。

「くっ…俺があの人を助ける！若葉たちはコイツらを頼む！」

「分かった！頼んだぞ！」

「任せて、とおさん！アンちゃんとタマちゃんをお願い！」

「兄さん、行つて…！」

ここは三人に任せて、自分は未だに収まらない頭痛を我慢しながら『シフト』を使いながら球子たちの方に向かった。

しかし、向かっている間にも、サソリ型の巨大な針は攻撃が来る、それを球子が旋刃盤を楯形状にして防ぐ。

だが、それを防ぐ旋刃盤にもヒビが入り始め、いつあの巨大な針が二人を貫き通すのは、時間の問題だ。

「間に合え……」

自分は全力で向かう。

「間に合え……」

時がスローモーションのように動く。

「間に合え……」

誰かの声が重なる、だが考える時間はないため自分は気にせず向かう。

視界には、最後の一撃だと思われるサソリ型の鋭い尾針が振り上げられていた。

「間に合ええええええええええ!!」

ついたときには、鋭い尾針が突き出してきた。

自分は考えるよりも早く、球子を後ろに突き飛ばし、先頭に立つ。

先頭に立った時には鋭い尾針は目の前まで来ていた。

その時、自然に右手が構えをとった。その構えはまるで楯を構えるようだった。

「(死んでたまるか…みんなを救うまで、絶対に!)」

そう思ったと同時に、右腕に光が纏わる。

そして、右腕の光と鋭い尾針がぶつかり、轟音と強い風が発生した。

時間は少し戻って球子視点――

「あんずっ！ 起きろっ！」

意識が失っている杏に呼び掛けるが、目を覚まさない。

「くそっ……………」

サソリ型は巨大な針を振るう。

「くそおおおおおっ！」

旋刃盤を楯形状にして尾の針を防ぐ。

「ぐっ、うう……………」

尾の針は何度も突き出される。

「ううああああ……………」

殺すために、何度も。

防ぐ度に、全身の骨が衝撃で砕けそうだ。

「逃げるな、杏を守るために、耐え続けろ！」

自分に言い聞かせるように心の中で叫び、耐える。

「……………た、タマっち……………先輩……………」

「目、覚ましたか……………」

「タマっち先輩……………」

「早く逃げろ……………あんず……………」

目を覚ました杏に言っている間に、楯にヒビが入り始めた。

「壊れるのも、時間の問題か…杏、早く逃げてくれ」

「何言ってるの!? タマっち先輩こそ逃げないよ！」

「タマは、無理だ……………」

「どうして……………」

「こいつの攻撃で……………足が、痺れて……………！ とうか……………骨、砕けて

るかも……………動けない、んだ……………！」

「……………」

杏は言葉に詰まる。

その時だった。

「間に合えええええええええええ!!」

「徹さん!」

「と、おる……………」

後ろを少し覗くと、先程まで遠くにいたはずの徹が目の前まで来て

いた。

「(頼む…杏を連れて、逃げてくれ…)」

球子是最悪、自分を犠牲に杏が助かればいいと思っていた。

二人が助かる方法なんて無く、徹はきつと杏を連れて逃げるだろうと。

だが徹は違った。

「なっ!?!」

徹は球子を後ろに突き飛ばし、先頭に立った。

そして突き飛ばされたと同時に、サソリ型の尾針が突き出された。

「とお——うわっ!?!」

徹の名を言う前に、轟音と強い風で音と視界が遮られた。

「徹、無事か! って……ええ?」

「徹さん、大丈夫…で…すか…ええ、うそ…」

轟音と風が収まり、徹の無事を確認しようとした時、視界に映った光景に驚きを隠せなかった。

なぜなら…

「なんで…徹が…タマの武器を持っているんだよ!」

そこには、球子の武器、旋刃盤の楯形状でサソリ型の尾針を防ぐ、徹の姿があった。

## 第十五話

### 力の対価

あの時の徹さんの笑顔に少し違和感があったのは間違いではなかった。

でも、その時の私は気付くことができなかった。

…いえ、あの時言っても徹さんは嘘をつくでしょう。

それでも聞いておけばよかった。

あの対価は、あまりにも理不尽すぎるのだから。

「(一体：何が起きたんだ?)」

自分は今の状態に混乱していた。

なぜあの時自然に右腕が出たのかを、そして、なぜ自分は球子の持つ旋刃盤を召喚出来たのかを。

「徹!」

「うおっ!」

球子の声で自分は我に帰ったと同時に、サソリ型の攻撃がまたきた。

それを旋刃盤でなんとか防ぐ。

「ちっ、お返しだ!」

旋刃盤で尾針を上を飛ばす。

「(まずはあの針を何とかしないと)」

あの針を壊すには十分な破壊力のある武器が必要だ。

自分は旋刃盤を消して拳を構える、すると両腕にまた光が纏わる。

「ハアアッ!」

自分は尾針に拳を叩きつけた。

叩きつけられた尾針は、鈍い金属音を鳴らし、拳を叩き込んだ所を中心にヒビが入り、次第にヒビは広がり始め、そして壊れた。

それと同時に、両腕にまとわりついた光は無くなり、武器が姿を表

した。

「今度は友奈さんの手甲を!？」

「あの数秒で今度は友奈の武器を…一体徹に何が起こっているのか、タマにはもう分からないぞ」

球子と杏が驚きの反応を見せる。

それもそうだろう、旋刃盤で尾針を上へ飛ばし、流れるように旋刃盤を消して手甲を召喚して尾針に叩き込んで壊したのだから。

それに…

「(なんか自然の流れで友奈の手甲を召喚して壊しちゃったよ、しかも一撃で!?)」

自分も混乱しているのだから。

まさか尾針を壊したいと思ったと同時に、体が勝手に旋刃盤を消して拳を構えるし。しかも構えたら両腕に光が纏わるし、勢い任せに声を出しながら拳を尾針に叩き込んだら、一撃で尾針が壊れてしまうのだから。

「(ああくそっ!もうなるようになりやがれ!)」

そう自分は思い、サソリ型の本体めがけて飛んだ。

サソリ型はまだ尾針を再生している途中なため無謀みな状態だ。

「(このチャンスを逃すわけには行かない!)」

そして、サソリ型に拳を叩き込もうと落下の勢いを使い、距離を縮めようとする。

しかし…

「うおっ!?!」

サソリ型は尾針を使わず、尻尾で風ぎ払った。

自分はそれを防ぐが、場所が空中だったため踏ん張ることもできずそのまま勢いで遠くに飛ばされる。

そしてそれを追撃するようにバーテックスが数体突撃してきた。

「(くそがっ!このまま手甲で一匹ずつ倒していたらサソリ型の再生が終わっちゃう!…だったら)」

自分は地面に足がつくと、身体強化で足を重点的に強化し、思いつきり地面を蹴り、突っ込んでくるバーテックスの方に跳躍した。



そして手甲を消して次の武器をイメージする。

「(イメージするんだ。素早く倒せる武器を：)」

すると光が集まり、一瞬で刀を作った。

自分は鞘をつかみ、流れるように居合の構えをとった。

「(なぜだろう：分かってしまう、初めて体験しているのに、俺の体だけが、慣れているように勝手に反応している)」

そう思っていると、バーテックスとぶつかる寸前まで来ていた。

「来いっ！『源義経』！」

そう口に出した瞬間、体の全身から力が湧く感覚がした。

それと同時に刃を鞘走りさせた。

速度を維持したまま、ひと振りひと振りが神速の速さで、自分に来るバーテックスを斬った。

「(後はサソリ型だけだ!)」

視線をサソリ型に戻す。だがサソリ型の方も再生が終わっていたようで、迎え撃つように尾針を構えていた。

「(あれを防いでも最悪、重傷レベルだな：遠距離武器は出るのか?)」

そう思った自分は、刀を消して、遠距離武器のイメージをする。

するとまた光が集まり、今度はクロスボウになった。

自分はクロスボウを取ると、すぐにサソリ型に向けて乱射した。

乱射された矢は、サソリ型には効かないものの、少しでも標準はずらせただろう。

「(この一撃に全てを!)」

武器をクロスボウから手甲に変える。

破壊力のある手甲にこの速度だ。これを受けたらサソリ型でも一撃で倒せる。

「終わりだあああああ!!」

自分は叫びながら全力の拳を振るう、それと同時にサソリ型も尾針を突き飛ばす。

ふたつの攻撃は交差する。

自分はサソリ型の正面部を破壊し、サソリ型は自分の肩をかすめた。

「よし、やったか!？」

そう思い振り返ると、サソリ型の正面部が自分の攻撃によってデカイ空洞を作っていた。

しかし……

「(な、嘘だろ!?)」

まだサソリ型は終わっていないなかった。最後の力を使って自分も道連れにするきだろう、自分の方に向けて尾針を突き飛ばそうとしていた。

「(早く防御を——ツ!?)」

防御をしようと体を動かそうとするが、体が全く動こうとしなかった。多分肩にかすめたときにサソリ型の毒をもらったのだろう。

「(ここまでか……)」

そう思い、目を閉じた時だった。

「勇者パ————ンチツ!!」

上空から声が聞こえると、何かが地面に激突して、強い衝撃から風が発生する。

自分は抵抗出来ぬまま風に飛ばされ、地面と体が強くぶつかった。

「たく、一体なにが起きたんだよ」

そう言って目を開くと、尾針を向けていたはずのサソリ型は無惨にも破壊されており、その中心には、友奈が立っていた。

「とおさん!大丈夫!？」

友奈が、動けない自分の所来て心配そうな顔で聞いてきた。

「ああ、大丈夫だ。ちよつと毒をもらったがな」

自分は大丈夫と返す。

だが、自分は今の友奈の姿に一つ、疑問点があった。

「……なあ友奈」

「ん?どうしたの、とおさん?」

「友奈の頭に生えている角とその巨大な手甲は一体なんだ?」

そう、今の友奈の姿には、あまりにも友奈の体には合わない手甲と鬼のような角が二本、頭に生えていたのだった。

「えつとね……『酒呑童子』って言う精霊を宿したらこの姿になっちゃつ

て…」

「結局、その力を使うことになるのか：俺の実力不足だな」

自分は溜息をついた。

あの時ちやんと一撃で倒せれば、友奈は『酒吞童子』を使わずに済んだだろう。

「もう過ぎてしまったことは仕方ない、部屋に戻ったら対策でもねるか」

内心そう思っていると、ちょうど戦いが終わったのか樹海化が解け、元の風景に戻った。

戻ったと同時に毒も抜けたので、体が自由に動けるようになった。

今回の戦いで、友奈の精霊『酒吞童子』を使わせてしまった。でもその代わり、球子と杏が生存することが出来た。

大きな結果を出せた自分は嬉しい余韻に浸っていた。

…まあ、それはすぐになくなったけど。

「さて徹、聞かせてもらおうか」

現在、自分は久しぶりの若葉の尋問を受けていた。

「え、えっと：今回に関しては俺も知らなかったんだ。うん、仕方のないことだ」

「ほーう、球子と杏から聞いた話だと、知らない割には余りにも動きが良すぎると聞いたが：本当に知らなかったのか」

あ、やばい、あれ絶対怒ってる奴だ。嘘ついたら絶対やばいやつやられるに違いない。

正座しているから顔が見えないのがせめてもの救いだな。

でも、今回の事に関しては本当に自分にもわからないのだ。

「だから俺は本当に知らないんだって」

そう言い、顔を上げた時だった。

「(球子と杏、それに友奈になんで黒いモヤがかかっているんだ：?)」  
自分は目を疑った。

なぜなら自分の映る視界には、球子と杏、友奈だけが黒いモヤにかかっていたのだ。

その黒いモヤを見ていると、突然三つの黒いモヤは動き出し、一箇

所に集まってひとつになった。

「

若葉が何か言っているが、何を言っているのか聞こえなかった。

「あれ？　そういえば、今回の戦闘で切り札を使ったのは、球子と杏、友奈だったな……まさか、あの黒いモヤは！」

自分が気づいたときにはもう遅かった。

その黒いモヤは、自分の体の中に入っていた。

入った瞬間、ひどい目眩と頭痛に襲われた。

「(たくつ……そういうことか、新しい武器が使えるが、その対価が、勇者たちの対価を全て変わりに受けるってことか)」

みんなが心配そうな顔で声をかけているが、自分の耳には届かず、そのまま自分は意識を失って倒れた。

## 第十六話

### 初めて対価で失ったもの

夢を見ていた。

一人の少年が黒い剣と黄金の剣を持ち、百を越えるバーテックスを難なく斬る。

そして少年は叫びながら奥を目指す。

その先には、二人の勇者がサソリ型の攻撃を受けていた。一人はサソリ型の攻撃を防ぎ、もう一人はサソリ型の攻撃を防いでいる勇者に何かを言っていた。

そして、少年が二人の勇者に着くと同時にサソリ型の尾針が二人の勇者を貫く。

少年は間に合わなかった。二人を助けることが出来なかった。

杏と球子を救うことが出来なかった。

「——おい」

「——おい起きろ」

「起きろ、徹!!」

「うるせえええ!」

訳の分からない夢を見たと思ったらうるさい声で起こされる始末、最悪の目覚めだな。

「目覚めて最初の言葉がそれか、徹」

「当たり前だろ若葉、人がぐっすりと眠ってるところを普通邪魔するか?…ていうかなんで俺病院のベットで寝てるの?」

自分は現状を確認する。

さつきまで病室のベットで寝ていた自分、服装が患者が着る服で、腕には管が刺さっていた。

そして自分が起きたことがまるで奇跡のような感じで驚いているみんな（若葉とひなたを除いて）。

…ああ、うん、これだけでもう察してしまおう。とりあえず、今自分がやることは一つ。

「えっと…心配かけてすまなかったな、みんな」

それは謝罪だ。自分が眠っている間、色々みんなに苦勞をかけたこと、不安をかけてしまった事への謝罪だ。

さて、みんなの反応は…

「「「…し」」」

「…しっ？」

「「「心配かけすぎ（だよ！）（よ！）（です！）（だ！）」」」

友奈、千景、杏、球子に同時に怒られてしまった。

「はっはっは、まあ私は徹が目覚めると最初から分かっていたがな」

「ふふっ、若葉ちゃん、そんなこと言って、この二日間、徹さんのことばっかり考えてたじゃないですか」

「なっ！ひなた、それは言うな！」

「ちよつと待って、今二日間って聞こえたけどそれはほんと——」

「徹くん！やつと目を覚ましたのね！」

「徹さん！」

「ああもう、みんな一回落ち着いてくれー！」

歌野と水都の介入によってこの場がさらにうるさくなり、最終的に看護師さんに怒られてしまった。

みんな落ち着いた所で、自分はみんなから色々聞いた。

どうやら自分は、あの時意識を失った後すぐさま病院に搬送されたらしい。それで医者が診断した結果、心身ともに大丈夫だが意識が戻らない、いわば植物人間だったらしい。

でだ、それから二日が経ち、みんながお見舞いに来たときに起こった。突然自分が何かを呟いたらしい、それで若葉が大きな声でかけたら自分が目を覚ましたってわけだ。

…うん、ほんとに目覚めたのが奇跡レベルだったなほんとに。

それからのこと、授業の時間を削って来たらしいが、訓練の時間は削れないらしくみんな帰っていった。

歌野と水都も、やることがあるため帰り、病室には自分一人となった。

「…さて、時間はたつぷりある、色々と調べようじゃないか」  
最初にやるのは、武器召喚の確認だ。

とりあえず、一通りやってみて分かったことがある。

まず、今まで黒い剣しか召喚できなかったはずが、あの戦いから、若葉と友奈、球子、杏、そして千景の武器を出せるようになっていた。「…これ以上の調べは部屋でやるか」

まだ調べ足りないが、ここは病院、看護師に見られたら面倒ことになる、これは一旦やめ、次のことをやろう。

「さて、やりますか」

自分は腕に刺さっている管を外し、勇者システムを起動する。

そして、窓から飛び降りると同時に身体強化をし、人に見つからないように移動し、寄宿舎に向かった。

…まあ、ただ自分の部屋にある本を取りに行くだけなんだけど。

「ふうー、ミッションコンプリート」

時刻は夕方になった頃、なんとか無事に誰にも見つからず本を取りに行くことができた。

自分は勇者システムを解除し、そのままベッドに寝転がった。

「さてさて、諏訪で取ってきた本で、色々と分かればいいんだけどなー」

遠征で諏訪に来たときに土地神の贈り物としてゲットした本、『願いを叶えるための戦い』正直、ファンタジーの架空物語だと思ってるが、土地神がくれた本だから信じろと自分に言い聞かせ読むことにした。

数分後――

「おーす、見舞いに来たぞ徹ってなに読んでんだ？」

「ん？ああ、球子に杏か、いやちよつと暇潰しに本を読んでたわけよ、

でも何書いてあるのか分からなくて」

「徹さん、少しその本を見せてください」

見舞いに来た球子と杏に、例の本を見せる。

「…あー、タマにはさっぱり分かん」

「これは…古文でしようか…」

「ああ、でもその古文、滅茶苦茶難しいんだよ」

「…徹さん、その本貸していただけないでしょうか？」

「別にいいが…翻訳してくれるのか？」

「はい、今すぐ部屋に戻ってやりますので」

「えっ!?今からやるの!?!」

「はい!それでは徹さん、また明日!——タマっち先輩、頑張ってください」

「えい(ボソツ)」

そう言い杏は病室から出た。

「……」

病室に静寂が訪れる。こういうのに普段我慢できないはずの球子は、自分から見て右の椅子に座って何か恥ずかしそうにモジモジとしていた。

「な、なあ球子、球子と杏以外のみんなはどうしたんだ?」

なんとか会話しようとして、球子に話題をふる。

「え、あ、ああ!今日の見舞い当番はタマと杏なんだ」

「そ、そうか」

なんなんだ今日の球子は!?!なんか調子が狂ってしまふ。

「…なあ徹」

「ん?どうした」

そう思っていると球子が話しかけてきた。

「あの時助けてくれてありがとな、もし徹が来てくれてなかったらタマと杏あの攻撃で死んでいたと思うんだ」

「…そうか」

「でもさ、徹が意識を失った時、悔やんじやったんだ。タマたちにはどうにもできなくてただ徹が目覚めるのを待つだけ、そんな無力なタマをずっと責め続けたんだ」



「…」

球子の声からは今にも泣き出しそうな声がしていた。

それを自分はただ聞き続けた。

「それから二日が経ってき、徹が目覚めたとき、嬉しさが込上がってきたんだ。徹が無事に目を覚ましたって、また楽しい日々を送れるんだって……なあ徹」

球子は自分の右手に片手を置いた。球子の手の温かさが右手に伝わる。

「お願いだ。勝手にタマたちの目の前から消えないでくれ」

球子は顔を俯きながら言った。表情を隠しているつもりだろうが、頬から涙が流れ、シャツにポタポタと落ちていった。

「…なあ球子」

「なに——ってなんでタマの頭をなでるんだよ！」

球子は頭を撫でている手をどかし、そのまま涙をぬぐった。

「いやー、球子がいつもらしくないんでな、ついからかいたくなっちゃって」

「ぐぬぬ…はあ、やっぱ徹はぶれないな」

「そうか？」

「そうだよ…ってやば！そろそろ帰んなくちや！」

壁にかかっている時計を見るともう六時を指していた。

「もうこんな時間か、いい暇つぶしになってくれてありがとな球子」

「くそー、覚えてろよ徹！」

そう言い球子は椅子から立ち上がって、急いで病室の扉に手をかけた。

「あつー！そうだ。なあ徹！」

「ん？なんだ」

球子が病室から出ようとする時何かを思いついたように自分の方に振り返った。

「これからは球子じゃなくて、タマって呼んでくれ！呼んでくれなかつたら怒るからな！」

「えい！ちよ、まてたま——」

「それじゃ、徹また明日！」

球子は自分の言葉を聞かずにそのまま勢い良く病室から出ていった。

「…はあ、たく仕方ねえな」

まあ別にこれから球子のことをタマって呼べばいいだけだ。そう難しい話ではない。

「まあ、それよりもめんどくさいことが俺の体に起きているんだけどな」

自分は左目に魔力を送るのをやめた。

すると突然、さっきまで写ってた視界の左半分が、真っ黒になった。

「これが今回の戦いで失ったものか…いや、球子と杏を救えたんだ。

こんなの、安いもんだよな」

多分、これからの戦いで自分は色々と失うかもしれない、でもいいんだ。

例えどんなことが起きようと、自分はみんなを守るために戦い続けなければならないのだから。

## 第十七話

### 当たり前の日常

あれから翌日、自分は退院することができた。

医者には、自分の左目の視力を失ったことを気にしていたが、魔力で強制的に視力を一時的回復して誤魔化しておいた。

「徹さん、昨日の古文書の解読が終わりました」

「いくらなんでも早いと思うんだが、杏」

そして今日教室で、杏から昨日の古文書の解読の報告が来た。

「それがですね、学校の教科書に古文について書かれている所があったじゃないですか、それを参考にやったら案外簡単にできました」

「あー、なんか先のページにあつたな、でもあれ最低限のことしか書かれてないような…まあいいや、それで解読したのをまとめたやつは？」

「はいはい」

そう言い杏は折りたたまれた一枚の紙を見せつけた。

「ああ、ありがと——」「その前に」

紙を取ろうとしたらなぜかよけられた。

「別に渡してもいいですが、徹さんに一つ聞きたいことがありますして」「ん？なんだ聞きたいことって？」

「昨日の病室でのことですよ、私が帰ったあと、タマっち先輩となにかありましたか？」

「なにがあつたと聞かれてもなあ……ただ雑談してただけだよ」

「なにを言っているんですか徹さん！タマっち先輩は今教室にはいないですよ。嘘なんてつかずに正直にいつてくださいー！」

興味津々な杏に自分は少し恐怖を覚えた。

「ほんとにたいした話じゃないんだが…そんなに気になる？」

「当たり前じゃないですか！だって今日の朝の出来事を見たら気になるに決まってるじゃないですか！」

「朝の出来事って…」

自分は朝なにがあつたか思い出してみた。

それは朝の教室での出来事だ。

「よお、おはようみんな」

その時自分は教室にいるみんなにあいさつをしていた。

「いくらなんでも退院が早いのではないか？」

「まあ、あんま重傷ってほどじゃないからな、早めに退院したんだよ、若葉」

「それでも今日の学校は休んでもいいのでは？」

「そうだよ！それにぐんちゃんもこれには黙っていなかったでしょ？」

「ええ、私が何度も学校を休んだ方がいいって言っているのに兄さんは大丈夫って言って話を聞いてくれなくて…」

「みんな心配しすぎなんだよ。今までみんなに心配された場面があったか？」

「『前回の戦闘』」

「うっ」

若葉とひなた、千景、友奈が口を揃えて言った。

「おはようございますって、どうしたんですか徹さん？」

そんな話をしていると、杏が入ってきた。

「おはよう杏。いやな、さっきまでみんなからの精神攻撃をくらっていたんだよ」

「全て徹の自業自得だかな」

「まあそうとも言うな……ところでいつも一緒に来ている球子の姿が見えないんだが」

「それがですね、タマっち先輩の部屋に向かおうとしたら、寝坊したから先に行つてと連絡が来まして、なのでそろそろくると思います  
が」

杏が言い終わると、廊下から走る音がだんだんとこちらに近づいてくるように大きくなり、そして足音が止むと同時に教室の引き戸が開いた。

「はあ…はあ…間に合った！」

教室に入ってきたのは、息を切らした球子だった。

「珍しいな、球子が寝坊して遅れるとは」

「昨日色々あってな、それが原因で寝坊したんだ」

「昨日色々って、見舞い以外に何かあったのか？」

「たくつ、いつもらしくねえな、タマ」

「「「!?」」」

「ん?どうしたんだみんな?俺なんか変なことでも言ったか?」

あつ、ここだ。

完全に地雷踏んでる。

どおりで杏以外のみんなは耳を傾けているわけだ。

それにタマもみんなを見て何か察したようにどっか行くし。

「……あー」

「ふふふ、どうしたんですかそんな冷や汗をかいて、さあ私かわざと帰ったあのあと、なにがあったのか聞かせてもらいます!」

だめだ。肝心なタマがいないから逃れられない。

というか今聞き捨てられない言葉が聞こえたんだけど…

「…はあ、仕方ない。正直に話すよ」

「ふむ、では聞かせてもらおうか」

なんでさっきまで離れて耳を傾けてたのに、当たり前のようにみんな近くにいろんだ。

そして、みんなに病室であつたことを正直に話した結果

「球子、あんまり一人で抱え込むなよ」

「若葉ちゃんの言う通り、みんな同じ考えなんですから」

「そうだよたまちゃん!ぐんちゃんもそうでしょ?」

「ええ、球子さん、あなたは間違っていないわ」

「タマっち先輩…そんな思いがあつたなんて…うう…」

「教室に戻つたらなんでみんな、突然タマに優しくするんだ!?まさか徹、話したのかみんなに!?…徹?なんで合掌するんだ。おい徹?徹」

!？」

「許せ、タマよ」

タマがみんなからのほめ殺しを受けている中、自分はただ合掌していた。

そんなことがあり放課後、自分たちは教室に残っていた。  
なぜかというと…

「それでは、徹さんが遠征で私たちに黙って入手した本を發表します」  
「待て杏…發表する前に徹、何か言うことは？」

「後悔が生まれたが反省はしていない」

「よし齒を食いしばれ徹」

杏の古文書の解読した内容をみんなに發表するついでに説教が行われているからだ。

ちなみにみんなは椅子に座っているが自分だけ正座している。

「まあまあ、落ち着いてください若葉ちゃん。そういうのは後にしてください」

「すまないひなた、今は古文書の發表が先だな。杏、本の發表を」

今も後悔が生まれたよ。これが終わったら即逃げるとしよう。

「こほん…それでは解読した内容を發表します」

そして、杏による發表が始まった。

自分もよく聞こえるように耳を集中させる。

「今から千年前の話です。ここ日本にヤマトと呼ばれる大きな都があり、その都の王を守る二人の守護者がいたらしいのです。そしてその二人には、神の力が付与した聖劍を持っていました。一人は邪悪な心を打ち払う力を願えば、浄化の力を与えられる、浄化の劍を持ち。もう一人は、ただ戦う力を願えば、圧倒的力が与えられる、勝利の劍を持っていました。浄化の劍を持つ守護者は人々の穢れた心を浄化し、都の平穩を守り、勝利の劍を持つ守護者は数々の戦で、圧倒的力をふるいました」

その時にバーテックスが来たら一体どうなるんだろうか……まあい  
ま考えることじゃないけど。

「しかし、二人の持つ剣は次第に変わっていきました。数千万の民の  
穢れた心を浄化していくなか、浄化の剣は黒色に染まり。数々の戦を  
勝利していくと、勝利の剣は黄金の色に染まりました。そして、それ  
と同時に二人に変化が訪れました。浄化の剣を持つ守護者は、次第に  
浄化していくにつれ人々の穢れた心を恐れ始め、ついには穢れた心を  
無くすため、民を殺し始めました。次に勝利の剣を持つ守護者は、戦  
をしていく内に、己の中に欲が生まれ始め、王になろうと守護者二人  
でヤマトに攻め込みました」

ん？まさか自分が持つ黒い剣と、新崎が持つ黄金の剣って……

「そして、ヤマトの兵士たちと人々は、二人の守護者によってなにも抵  
抗できずに殺され、ヤマトの王も二人によって殺されてしまいました  
……これが、古文書に書かれていた内容です」

「……」

杏の発表が終わると教室に静寂が訪れた。

それもそうだろう、こんな胸糞悪い終わり方なんだ、誰も言葉が出  
ないだろう。

「すまんな杏、胸糞悪い内容を解説してもらって」

とりあえず、こんな内容を解説してもらった杏に自分は謝罪した。

「別にいいですよ、私が勝手にやったことなんですから」

杏は笑顔でそう言った。

「そうか」

「徹さん、この本返しますね」

「あ、ああ、分かった」

杏はカバンから古文書を取り出して渡してくれた。

その際――

「最後のページに徹さん宛の手紙が挟まっていましたよ、まだ私は読  
んでいないので安心してください」

ボソツと自分に聞こえる声で杏は言ってきた。

「すまない」

自分はボソツとお礼言った。

早速寄宿舎に戻って読もうと思ったが、その前に――

「さて、覚悟は出来てるな徹」

「あつ、あはははは……」

「若葉さんの背中から鬼の顔が……」

若葉が笑顔で言っているのに、その後ろから鬼の顔が見えてしま  
う。

ああ、これ絶対ヤバイやつだ。

「死んでたまるか！」

「待て！徹！」

自分は死にたくないので即座に立ち、逃げることにした。

あれから数時間後、徹の悲鳴がみんなに聞こえたのは言うまでもな  
かった……



## 第十八話

### 偶然出会った巫女

あれから数日がたった。

今日は休日、みんなそれぞれの休暇を送っているだろう。

そんな中、自分は――

「はあっ!!」

叫びながら生太刀を振るっていた。

ここは山の奥にある開けた森の中、つい最近に発見して今は鍛錬場所として使っている。

「よしっ！なんとか生太刀のコツは掴んだところかな、次は大葉刈でも行っとくか」

自分は生太刀を消して、大葉刈を召喚する。

ああ、ここはなんていいところなんだ。人がくることがないためここでみんなに知られたくない力を使いこなすために鍛錬するならうってつけの場所だろう。

自分も今日は試しに切り札でも使おうかなと思った。

でもな、できないんだよ。

だって――

「すごいよとおさん！ぐんちゃんの武器も出せるなんて!」

「兄さん、使い方とコツ、教えてあげるわ」

友奈と千景がいるからできないんだ。

でもまあ、武器の使い方とコツを教えてもらえるし別にいいんだ。

問題は――

「徹君は色々な武器が使えていいなあー、私も使いたいよー」

「うたのんが使うと絶対にひとつしか使わないと思うんだけど…」

なんで歌野と水都がここにいるんでしょうねえ…

それは若葉に説教された翌日のことだ――

「徹！貴様一人だとまたなにをしでかすのかわからん！なのでみんなと話し合いをした結果、徹に監視役を付けようと思う！」

その一言が始まりだった。

もちろん自分はそれには反対しようとした。

でも、反対したらしたで、また説教されそうなので仕方なく受け入れることにした。

そして、自分の監視役は即には決まっているようで、千景と友奈がやることになった。

「…ジャンけんする意味はあったのだろうか（ボソツ）」

理由もなしにジャンけんして決めたのかよ……

そして今に戻る。

本当なら、このまま何もしないで日常を送ればいいのだが、理由があつて自分は鍛錬しなくてはいけなくなったのだ。

理由は簡単、明日戦うことになる超巨大なバーテックスの準備だ。

超巨大なバーテックスはサソリ型とは強さが比べものにならない、なのでこの数日で武器を全て使いこなさなければいけない、だから学校がすぐ終わったらここで鍛錬するようにしている、別に訓練場でやってもいいのだがここはあそこよりも広いし、それにあそこは訓練用の武器しか使えない、だからここが一番自分にとって最高の鍛錬場になっている。

「上出来よ兄さん、これなら問題なく戦えるわ」

「はあー鎌って案外きついな」

「二人ともお疲れ様！もうお昼の時間だからお昼ご飯にしよう！」

「もうそんな時間か」

スマホの時間を見るともうお昼の時間になっていた。

「みんなーこっちこっち」

声のした方を見るとレジャーシートに座っている歌野と水都がいた。

自分たちは歌野の指示に従って遠慮なくレジャーシートに座った。

「えっと…今日はみんなさんの分のお弁当を作ってきましたので、どうぞ食べてください」

水都がそう言うのと、おそらく水都が持ってきたカバンからサンドイッチやらおにぎりがぎつしりと入った弁当箱がたくさん出てきた。

「これは…：豪華ね」

「凄すぎるだろ…」

「それじゃあ、いったただつきまーす！」

「いただきます」

自分と千景が驚いている中、友奈と歌野、水都が食べ始めた。

「いただきます」

遅れながらも自分と千景も言い、食べ始めた。

まずはこの野菜がぎつしり詰まったサンドイッチを手に取り、一口

「うまいっ！」

あまりの美味しさについて声が出てしまった。

「…美味しい」

「このおにぎりすごい美味しいよ！」

「あ、ありがとう、ございます…」

「みーちゃん照れてるー」

「う、うたのん！」

そんなこともありながら自分たちは食事をとっていたが…そろそろ本題に入るか。

「で、今更聞くんだが…なぜ歌野と水都がここに？」

「ほんと今更だね、徹君。えーと、昨日の事なんだけど、偶然若葉さんとひなたさんに出会ってね、それで徹君が監視されるって聞いてね、面白そうだから監視役の友奈ちゃんに連絡をとってねみーちゃんと一緒に来ちゃった」

「なるほど、でもなんでここが分かったんだ？」

「友奈ちゃんに位置情報送ってもらった」

歌野はそう言うのとポケットからスマホを取り出して、画面を見せてきた。そこには自分たちがいるところに赤い目印がついている地図

画面だった。

それだけじゃない、赤い目印の周りには徹、千景、友奈の名前が表示されていた。

「なあ歌野、一つ、いや二つ言わせて欲しい」

「何かな？ 徹君」

「別に友奈に位置情報送ってもらわなくてもいいけど思ってた。それに、歌野がそのスマホを持っているってことは…まさか」

「ふっふっふ、徹君は気づいちゃったかー、後それは今さっき思った。コホンッ、なんとこの前！ 勇者システムが使えるようになりましたー！」

「なるほど、ということはこれからの戦いに歌野が加わるってことなのか？」

「うーん、それはちよつと違うかな、システムは使えるだけで、樹海？ にはまだ入れないんだよ」

「そっかー、それは残念だね」

「でも大丈夫！ いつか私もみんなと戦えるようになるから」

そんなことを話しながら昼食は終わった。

そのあとはまた鍛錬を始めた。今度は自分一人で、他のみんなは自分の動きを見て注意するところがあつたら指摘する形になった。

数時間後――

「つとこんなもんでいいかな…もう夕方か」

気づけばもう夕方になろうとしていた。

「みんな、こんな遅くまで付き合わせてすまんって…えー」

みんながいる方向を見ると、四人ともレジャーシートの上で寝ていた。どおりで途中から指摘がこなかったわけだ。

このまま起きるのを待っててもいいがもう時間も遅いため、みんなを起こそうとした。

その時だった。

「水都ちゃん！ どこにいるのー!？」

「…この声って」

自分は寝ている四人を置いて、声がした方向に向かった。

「もおー水都ちゃん、今日が初めての巫女の訓練だったこと忘れるなんて、しかもなんでこんな人がめつたに出来ないこの山に行ったの？」

私、安芸あき 真鈴ますずは今日が初めての巫女の訓練に来なかった水都ちゃんの迎えに行っているのだ。

「偶然、ひなたちゃんと一緒にいた乃木さんに情報を聞けたからいいけど、もし乃木さんがいなかったらどうなっていたのやら」

乃木さんの聞いた情報だと朝、偶然カバンを持った白鳥さんと水都ちゃんに会って、どこに行くんだ？って言ったらこれからあの山に行くって言ってそのまま別れたらしい。

「といっても道なりに階段を上がっているけど一向に水都ちゃんと会えないなんて、はあーもし会えなかったらどうしよう」

「水都を探しに来たのか？」

「ええそうよ、水都ちゃんの迎えにつて誰?！」

いつの間にか階段の先には、一人の男が立っていた。

「ん？ああ、俺の名前は郡徹、勇者をやっているよ」

「郡…徹!？」

まさかこんなところで男の勇者に会えるなんて！夢にも思わなかったわ。

「それで、水都を探しに来たんだろ？案内するよ」

「え、わ、分かったわ」

少し戸惑いもしたが、とりあえず徹さんについて行った。

「そういえば徹さん、聞きたいことがあるんだけど」

歩いている道中、徹さんに聞きたいことがあった。

「ん？なんだ一体？」

「タマちゃんと杏ちゃんは元気かかって」

バーテックスが初めて襲来してから色々あってもう一年も会っていない。

「…ああ、元気だよ」

「そう、よかった」

「なぜ二人に会いにいけないんだ？」

「…もう一年も会ってないの。さすがにもう二人とも私のことは忘れてるでしょ」

「そうか、つとついたぞ」

そこにはぐっすりと眠る、水都ちゃんと白鳥さん、そして勇者の高嶋さんと千景さんがいた。

「案内ありがとうね、徹君」

私はそう言い、ついでにみんなを起こしにいろいろとしたときだった。

「なあ真鈴」

「えっ、なに？」

あれ？そういえば私徹さんに名前教えていないよね、なんで知ってるの？

「俺からの頼みを聞いてくれるかな」

「頼み？まあ内容によって断るけど」

「そう難しい話じゃないよ、えつとな…いつかこの戦いに終わりがきたらさ、タマと杏、そしてあんたの弟と一緒にどっか遊びにいらいたいんだ」

「え？ちよつと待って、話が急過ぎる！」

この人は急に何を言ってるの!?

というかなんで弟のことをしってるの!?

「あ、やっべ（ボソツ）」

今小さい声でやっべって言ったよ！一体なんなのこの人！

その後徹さんは、全てタマちゃんと杏ちゃんから聞いたと言っていたので、違和感がありつつもなんとか納得した。

徹の自室、彼の机には古文書とすでに読んでいる一通の徹宛の手紙

が置いてあった。

手紙の内容はこう書かれていた。

『この古文書にはまだ続きがある、その内容に奴の手がかりと僕の持つ勝利の剣と君の持つ浄化の剣の本当の力がわかるはずだ。見つけてくれ、そして君の手で終わらせてくれ。君は、僕と姫神にとっての最後の希望なのだから。』

新崎 亜門 より』

## 第十九話

### 浄化の剣

そして翌日、タマと杏の怪我が落ち着いた頃、その日が来てしまった。

大社から、結界の外の瀬戸内海上で形成されつつある進化体バーテックスを討て、という任務を言い渡される日だ。

六人は勇者システムを起動して変身し、結界の間近の瀬戸大橋の上に立った。

この結界の先に、進化体のバーテックスがいる、それも手強いのが。こういう任務って珍しいね。今までは四国に入ってきた敵を倒せてだけだったのに」

「そうだな。大社の方針が変わったのか……」

「何かあったんでしょうか……?」

「いいから倒して終わらせようか」

「……? 兄さん、どうかしたの?」

「あ、ああすまん、大丈夫だ。少しぼーっとしちまった」

「徹、敵は目の前に居るんだぞ、集中しろ」

「すまん、若葉」

若葉の言うとおりで。今回の敵はこれまでのバーテックスとは違う、集中しなければ死につながる。

集中しろ集中!

……たく、あの手紙を読んで以来、頭ん中でモヤモヤがずっと続いている。

新崎、あんたは一体何者なんだ……

それから自分たちは覚悟を決めて、結界の外へ出た。

日常から非日常に変わった世界。

「あれは……?」

結界の外に出た瞬間、若葉が何かに気づき指を指す。自分たちは若葉が指した方向を見る。



指した方向には、サソリ型バーテックスのよりも巨大な、超巨大なバーテックスが形成されている——はずだった。

「おい嘘だろ。あんなのが来るなんて聞いてないぞ」

これが夢なら早く覚めて欲しいと思う。

そこにいたのは、太陽の円環の中心に人のような大きい顔がついた超巨大なバーテックスが完成された状態で浮いていた。

「でかい…それに…」

「人のような顔が付いていますね」

「…気味が悪いわね」

「倒せるのか…タマたちだけで…」

友奈と杏、千景、タマがそれぞれ言う。

「…なににせよ、倒せばいいことだ。行くぞ！」

若葉の合図でみんなは動き出す。

自分はみんなよりも早く金弓箭を召喚し——

「来い、『雪女郎』！」

同時に杏の切り札『雪女郎』を宿らせ矢を射出する。

凝縮された雪を纏った矢は一直線に顔つきのバーテックスに向かっていく。

矢が、顔つきのバーテックスに当たる直前だった。

顔つきのバーテックスは口を開き——

「■■■■■■■■■■!!」

とてつもない咆哮を響かせながら巨大な火の玉を放ち矢とぶつかり合った。

「くっ！」

矢と火の玉がぶつかりそこから強い風圧と体が痺れるような音が襲いかかるが、なんとかくいしばった。

それらが収まり、どうなったか確認する。

「ちっ、やっぱり効いてないか」

結果は分かりきっていた。

射出された矢は火の玉によって相殺されていた。

「切り札が効いていないだ?!」

「嘘だろ……」

「切り札が効かないなんて……」

「一体、どうしたら……」

「諦めないで！みんなでやれば、なんとかなる！」

「友奈の言う通りだ！まだ諦める時じゃないぞ！」

「つ……そうだな、まだ諦める時じゃないな、みんな行くぞ！」

みんなそれぞれの切り札を発動し、精霊の力を身に宿らせ、顔つきのバーテックスに攻撃する。

しかし、どんなに攻撃しても微動だにせず、まるで脅威に感じていないように佇んでいた。

「こいつ、硬すぎるっ！」

タマが不満をこぼす。

…全員の武器が効かないとなると、こいつを使うしかないか。

「ここは退避した方が……」

「待て杏、まだ試していないことがある」

古文書を聞いて以来、これが浄化の剣かもしれないと思い、使い続ける何か不味いことが起こるかもしれないと言う不信感がわいたため、あまり使いたくなかった。

でも、もし自分の予想が当たっているなら試すしかない。

自分は黒い剣もといた浄化の剣（仮）を召喚した。

「黒い剣ですか…効くかどうかは分かりませんが賭けてみてもいいかもしれません」

「よし、援護は任せろ」

「ああ、頼むぜみんな!!」

「」「了解!」「」

自分は顔つきのバーテックスに向かう。

「■■■■■■■■!!」

すると顔つきのバーテックスが咆哮し、途端に全てのバーテックスが自分に集中し突進し始めた。

「行かせるか!」

「させません!」

タマの投擲した旋刃盤と杏の金弓箭の援護射撃で突進してくるバーテックスが次々と倒していく。

それでも多少のバーテックスが突っ込んでくるがそれを自分は回避しながら進んでいく。

「■■■■■■■■!!」

また顔つきのバーテックスの咆哮する。すると次は顔つきのバーテックスを守るように通常のバーテックスが囲み始めた。

「道を開けやがれ!」

金弓箭に切り替え通常のバーテックスを攻撃する。

しかし、倒してもまた次のバーテックスがその穴を埋める。

「とおさん!任せて!」

「道作りは任せろ」

「:兄さんの邪魔はさせない!」

友奈の重い拳の打ちつけ、若葉の神速の斬撃、七人御先によって七人に分身した千景の七の斬撃によって、顔つきのバーテックスへの道が開いた。

「行け、徹!」

「へいよっ!」

通常のバーテックスが穴を埋める前に跳躍で抜ける。

だが、そう簡単に倒されてくれないようだ。

「やべっ!」

通り向けた先には、巨大な火の玉を射出しようとする顔つきのバーテックスがいた。

自分は避けようとするも、跳躍した勢いがあるため避けるのは困難だ。

「■■■■■■■■!!」

そして咆哮とともに放たれた。

自分が跳躍すると想定しての攻撃、間違いなく喰らうだろうと思っているのだろうか。

…なら、これは想定の内かな!

「来い、『七人御先』!」

武器を大葉鎌に切り替え、千景の切り札『七人御先』を宿らせる。  
この『七人御先』は、分身した七人を同時に倒さなければ倒せない。  
例え一人でも生き残ればそこからまた分身する。

そう、たった一人生き残ればいい。

だからー

「「「「こうするんだよー」「」」」」

七人に分身した内の六人が一人の自分を蹴りあげ、そして一人の自分が六人の蹴りを大葉鎌で防ぐ。その時にくる反動を使い、高く飛び上がり一人だけ巨大な火の玉から逃れる。

「喰らいやがれ！」

浄化の剣（仮）に切り替え、顔つきのバーテックスを斬る。

硬い表面が難なく斬れる、効果ありと分かったためそこから次々と斬撃を与える。

「うおおおおお!!」

攻撃を緩めるな、奴に攻撃の機会を与えるな、斬り続けろ！

「終わりだああああ!!」

最後の斬撃を浴びさせる。

それを喰らった顔つきのバーテックス形を崩しながら倒れた。

「はあ…はあ…っ、疲れた…ん？」

そんなことを言っていると、突然浄化の剣（仮）が光り輝いた。

同時に顔つきのバーテックスから黒い煙のような何かが出てくる、それは光り輝く浄化の剣に入り、光り輝いていた浄化の剣（仮）は光を収めた。

「…ッ!」

その瞬間、色々な感情が伝わった。

憎悪、苦しみ、痛み、醜さ、殺意、絶望――

ありとあらゆる感情が伝わる。

「くっ、これは…負の感情か？」

これで色々と分かった。

この剣が浄化の剣だということ、浄化の剣が負の感情を無くすのではなく吸収だということ、そしてあの顔つきのバーテックスは――

「梅田駅でバーテックス化された人たちだったということか」  
自分は今まさに消えようとしている顔つきのバーテックスに近づ

く。  
そして、視界に映るものに自分はホッと息をつく。

「これが、バーテックス化した人の唯一の救出方法か」

顔つきのバーテックスがいたところには、梅田駅で新崎によって  
バーテックス化された人たちが元の姿になって気絶していた。

もちろん、あの日記の主の女とその妹もいた。

「おーい、とおさーん！」

声のした方を見ると、友奈たちが向かってきていた。

「…みんなに借りを作っちゃまったな」

そんなことを呟き、みんなが来るまで少し体を休めようと、自分は  
座って待った。

## 第二十話

### 疑問と神託

顔つきのバーテックスとの戦いから二日が経った。

あの後みんなで気絶していた人たちを結界の中まで運んだ。今はまだ入院中だが、様態は良くなっているとひなたから聞いている。

良いことはそれだけじゃない。ひなたから神樹からの神託で、何日間かバーテックスの進行がないらしい。

よって自分たちには一時的だが、平穏と休息が訪れた。

そんな中、大社の人からお礼がしたいということから自分たちをある場所に招待してくれた。

「とうちゃーく!!」

バスに乗って数時間、目的の場所に着き最初に降りた友奈とタマが元氣よく叫んだ。

「お二人さん、今日はやけにテンション高いですね」

「無理もないだろう杏。こんなこと滅多にないからな、気分が上げるのは仕方ないだろう」

「ふふ、若葉ちゃん。そんな事言って一番楽しみにしていたのは若葉ちゃんじゃないですか」

「こ、こらひなた！それは言うなと言ったではないか!」

「あらあら、今日の若葉ちゃんのテレ顔は一段といいですね」

そう言いながらひなたは持ち前のカメラで若葉のテレ顔を撮る。

「ひなたー!」

「……みんな元氣ありすぎじゃないかしら」

「仕方ないですよ千景さん。だって今日はみんなで旅館に泊まるんですから」

今自分たちがいる場所は、香川県高松市にある最高級の旅館の入口の目の前にいる。

そう、あの日大社から休養としてこの旅館で過ごすことが許された。

「まったく、少しは落ち着けみんな。そんなにはしゃいでるとすぐ寝ちやつて夜の楽しみがなくなっちゃうぞ」

「む、そうだな。それじゃあみんな、自分の荷物を持って入るぞ」

みんな若葉の言われたとおり個人の荷物を持って旅館の中へと入っていった。

「…？どうしたの兄さん、そんなにぼーっとして？」

「ああ、ちよつと寝不足気味でな。バスでたつぷり寝たんだが、まだ眠いんだ」

「部屋に着いたら自由時間らしいから、その時間に寝たら？」

「そうさせてもらおうよ」

そんなことを千景と話ながら旅館の中へと入った。

「くそつ、なんなんだよこれは」

部屋に入って早々自分は荷物を放り出して畳に寝転がる。

自分だけ個人部屋で助かった。

…正直に言おう。自分は昨日からぐつすり眠れていない、寝ると毎回色んな人の痛みや絶望の声が至るところから感じ起きてしまう。

そのせいで今の自分は精神的に少し辛くなっていた。

「一体、どうしたらいいんだ…」

みんなに相談したら余計みんなが苦しんでしまう、かといってこのままいくと精神が病んでしまう。

今はまだ大丈夫なラインだ。でも、これがもし強くなったとしたら最悪なのは確実だろう。

だとしたら後は姫神を頼るしか手段がないわけなんだが、その肝心の姫神が一向に会えないというピンチに陥っているわけだ。

でも、そんなピンチな状態でもあの戦いで良い収穫は出来た。

これは感覚で分かったことなんだが、切り札が使えるのはその時持っている武器に決まる、そして切り札を使った後の対価は無し（その代わりみんなの対価を代わりに受けるけど）。

でだ、これが肝心なのだが、吸収された負の感情が心にやどることは体験済みだから分かる、でも今回一番疑問に思ったのが勇者の対価

の肩代わりのほうだ。

なんといったらいいんだろう…今回勇者全員の対価を肩代わりしたわけだが、全く体に支障が出るわけでもなくただ少しだるいなーつと感じるぐらいだった。

「だったらこの左目を失明させるぐらいの対価は一体なんだって言うんだ？」

ますます謎が深まるな。

…まあ、これもまとめて姫神に聞けばいい話だ。

今は、これからどうするか考えるか。

そんな事を思いながら、自分は自由時間を過ごした。

時は経って夜――

「ああああああああ、生き返るううううううううううううううううう」

「もう、オジサン臭いですよ若葉ちゃん」

緩みきった若葉の顔に思わず苦笑いするひなた。

「ああ!?!もう若葉が入ってる!?!一番風呂狙ってたのに!」

「球子が『旅館探検だ!』と言って走り回ってたからだろううううううううううう」

「うわー、溶けかけの飴みたいな顔をしてる…しかし、三番目はタマのものだ!とおう!」

「湯舟に飛び込んだじゃダメだよタマっち先輩〜」

ぎっぴーんと大きな音を出しながら湯に飛び込むタマ。

杏はタマに注意しながら静かに湯に入った。

「タマちゃんは相変わらずだな〜」

「騒がしいわね……」

そこからさらに友奈と千景が湯に入る。

「そういうえば千景さん、少し聞きたいことがあるのですが」

「なに?」

そんな時、ふとひなたが思い出したように千景に聞いてきた。



「徹さんについてですが、最近なにか変わったことはありませんでしたか？」

「…そういえば、最近兄さんがぼーっとすることが多いような…」

「……やっぱり」

千景の話聞いたひなたがボソリと呟く。

「どうしたひなた？徹に何かあったのか？」

「…」昨日、神樹様からの神託で、二つ神託が来たんです。一つはバーテックスの侵攻が一時的に止まった事。そして二つ目は…徹さんの事についてです」

「二」「ッ!」「二」

あまりにも衝撃的な話に全員驚く。

「…ひなた、徹について何を聞いたんだ？」

「……」郡徹はこの先の未来で、心が黒く染まり敵対するだろう…これが、神託で聞いたことです」

「二」「……………」

ひなたが言い終わると全員言葉を失った。

それもそうだろう、今までの神託ではバーテックスの事しか聞かされていないのに、今回は違う。

徹が神託に出た。それだけじゃない、徹が敵対するのがあまりにも衝撃的だったのだ。

「徹の心が黒く染まる、一体徹の身になにが起きるって言うんだ…」

若葉はそう言い、夜空を睨み付けた。

風呂から上がった後、みんなよりも早く風呂に入り、早く出た徹と合流、そして豪華な食事を堪能した後、徹を部屋に誘い、夜遅くまでランプやら人生ゲームなので遊び、楽しく過ごすのであった。

勇者たちはまだ知らない。

次に起こる戦いが、あまりにも残酷だということに。

そして徹に、数々の試練が待っていることに、徹自身知るよしもなかった。



高知県にある、徹と千景が住んでいた故郷の村。

その村全体が見える山の頂上に、一人の少年、新崎が静かに立って眺めていた。

「探しましたよ」

そんな時、背後から声が聞こえた。

「……………」

新崎は振り返らずにただじっと眺めていた。

「この世界で会うのは初めてでしたね……………元の姿に戻ったらどうです。新崎亜門……………いや、千年前の勝利の剣を持つ守護者ツクヨミ」

「…貴様にその名は呼ばれたくないな、姫神」

そう言い、新崎は後ろを振り返りながら本当の姿へと戻った。

その姿は先程までの少年の体よりも圧倒的に違い、いかにも歴戦の戦士のような体格と顔をしており、陽気な口調から、冷酷な口調へと変わっていた。

「よくそんな性格であの口調ができましたね」

「ふっ、慣れだよ、慣れ」

「…なぜ、こんなことをしたんですか？」

「前の世界でいったはずだぞ。あいつを救うためにはどんな方法でもやると…」

「それでも…あなたのやり方は彼女を苦しませるだけです！」

「何をいつている。俺が手を出さなくても、あいつは苦しんでいた。世界を蹴り返した張本人なら分かっていたはずだが…そうだろう、姫神」

「…確かにその通りです。でもあなたがあんなことをしなければ、彼女の苦しみは無くなる」

「貴様は分かかっていないな。例えこの世界を救い彼女の苦しみを無くしたとしても、この世界の人間の負の感情でまた苦しむだけだ」

ツクヨミは一步、また一步と姫神に近づく。

「そ、それは…」

姫神はなにも言えず、後ろに後ずさる。

「だから俺はこの世界を破壊する。そのために俺は天の神についた。それに貴様の世界をやり直す力はもう無いのだろう、この世界で全てが決まる」

「なんで…あなたはそんな人ではなかった！人々を、彼女を幸福に導こうと戦い続けたあなたに一体何が！」

「……そんな頃があつたな…」

姫神の言葉に、ツクヨミは懐かしむように呟く。

「確かに俺は昔はそうだった。いや、この世界に来たときもそうだったな。最初の頃はあいつと一緒に、みんなが幸福で幸せに暮らせるように戦おうと誓ったな……だが現実はそう上手くいかない。その原因は、貴様も関係しているのだぞ」

「私が…関係している?」

「ああ、そうだ。貴様はこの世界の勇者たちを救うことしか考えておらず、俺たちのことはどうとでもなるとほったらかしにした。そのせいで彼女は負の感情を背負い続け苦しんだ。この世界はいつ救える?どれほど耐え続ければいい?そんなことを考えているうちに俺は答えを見つけた」

「…彼女をこれ以上苦しませないように殺したと。そんなの間違ってますー!」

「いや、間違つてなどいない。この答えが彼女を苦しみから解放する方法だった……しかし、貴様のせいではそれは失敗に終わった。この世界に現れたイレギュラー、郡徹といったか、彼から彼女の魂が感じ取れたことで分かったー」

ツクヨミは一呼吸をおいて、ある疑問を言った。

「姫神、彼は何者だ?彼女の魂は眠っていると分かっている、だが表に出ているはずの彼の魂はどこにもない、そして彼と戦ったとき何かは分からないが人ではない何かを感じた。まるで、誰かに作られた存在かのように。心当たりがあるのだろうか、姫神?」

「知っていたとしても敵側についたあなたに教える必要はありません」

ん」

「ふっ、まあいい。ただ俺の目的に一つ加わっただけだ、何の問題もない。天の神から貰った力もだいたい分かったのだな。それに、彼と勇者たちと戦う舞台も用意できた、後は待つのみだ」

「…そうですか、ならもうあなたに言うことはありません。それに、これ以上表に出ていると天の神にばれそうなので戻らせてもらいます」  
「いい暇潰しになったな…最後に彼に言っしてほしいことがある、試練を乗り越えてみせろ、そう言っておいてくれ」

「分かりました、それでは」

姫神はそう言い、どこかへと消えていった。

辺りが静かになった後、ツクヨミは村の方へと振り返った。

「……郡徹」

ツクヨミはふと、梅田駅で彼らと別れる際、自分が最後に言った言葉を思い出した。

『呪縛から解いてくれ』か、あの時自然と口に出してしまったが…俺の本心が揺らいでいるのか？彼なら俺を、彼女を救ってくれると願って…ふっ、ありもしない可能性に賭けるなんて、まるで昔の自分に戻ったようだな」

―だが、それは昔の話だ。もうあの頃には戻れない。悪も正義もない、ただ信じる道を通き進むだけだ。だから貴様も己が信じる道を通き進め、郡徹。そして決着をつけよう、この世界に訪れるのは破壊か、それとも救済か、決めようじゃないか。

## 第二十一話

### 助けを願う

「……」

バスが目的地に向かっていているなか、郡千景は最後尾の席の端で暇潰しにゲームをしていた。

「……はぁ」

なんだろう、今日はゲームにまったく集中できない。

多分、今日の朝の出来事が原因だと思う。

時間は戻ってー

「母さんの様態が悪くなってる？」

温泉旅館から帰って来たとき、大赦の人からその知らせを受けた。

「はい、昨日千景様の父親から知らせを受けました。一度ご実家に帰ってはどうか？」

「……分かりました」

ほんとは行きたくない、あの村は悪い思い出しかないのに……でも、お母さんの見舞いに行かなくちゃいけない。

「ちなみに言いますと、千景様のお兄さん、徹様は現在病院で検査を受けていますので、徹様も後から向かうので先に千景様お一人で行ってきてください」

「えっ？まっつてください、兄さんが病院で検査してるなんて一度も聞いていないのですが」

「つい先程のことなので、情報が行き届いてないのは仕方ありません。安心してください、ただの検査ですすぐ徹様も追い付きますよ」  
「そう……ですか」

私は大赦の人の言葉を信じ、故郷まで行くバスに一人で乗った。

そして今に戻る。

外の様子でも見ようと窓から覗くと知っているものがちらほらと

見えた。どうやらそろそろバスが目的地に着くらしい。

「変わらないわね」

その村はあまりにも変わっていないかった。

嫌な思い出が蘇ってしまうため出来れば変わってほしかったのだが、この村はそう簡単には変わらない。

目的地に着き、バスから降りた後母さんがいる家に向かおうとしたその時だった。

「あれ、もしかして千景さん？」

「えっ？」

突然後ろから自分を呼ぶ声が聞こえたため、後ろを振り返るとそこにいたのは、かつて小学校で自分をいじめてきたグループの一人がそこにいた。

「あー、やっぱり千景さんじゃん！最後に会ったのは小学校以来だね！」

「え、ええ、そうね」

最悪だ。一番会いたくない人たちの一人と会ってしまった。

話しているだけでも嫌な思い出が蘇ってくるのに、ここはなんとか早く話を切って急いで家に向かおう。

「えつと……ごめんなさい、これから母さんのお見舞いに行かなくちゃいけないからもう行くね」

「えー、もつと話したかったのになー。千景さんのお母さんのお見舞いならこれ以上話したら悪いもんね。それじゃ、バイバイ！」

そういうとその子は走り去った。

「……ふっー」

緊張が一気に抜けたのか、息をついてしまった。

とりあえずこれ以上面倒ごとが起こる前に家に向かおう。そう思い、荷物を少しまとめ、人に会わないよう急いで家へと向かった。

急いで向かったため、早めに家に着いた。

家は、あの時とは違い張り紙などが張られておらずきれいになっていた。

「…ただいま」

家の中へと入るとごみ袋が散乱していなく綺麗に掃除されていた。

「おお、お帰り千景」

そして、最初に玄関に来たのは父さんだった。

「…母さんは？」

「母さんなら二階の寝室のベッドで横たわってるよ。荷物は父さんに任せて母さんに会いに行きなさい、久しぶりに会うんだ、母さんだつて喜ぶよ」

「分かった」

荷物を父さんに預けて二階に上がる。二階には、自分の部屋と父さんと母さんの部屋があり、自分は母さんがいる部屋に入る。

「……千景…なの？」

そこにいたのは、ベッドに横たわり、娘との久しぶりの再会に驚きを見せている母さんがいた。

「ええ、そうよ母さん」

自分はそう言いながら母さんの隣にある椅子に座る。

「よかった…無事に帰ってきてくれて本当に良かったわ」

そう言い、母さんは自分の頬に優しく手を触れる。

「…母さんの方は大丈夫なの…様態が悪化したって聞いたけど」

「大丈夫よ、少しずつ悪化はしているけど…私のたった一人の娘が勇者として頑張っているのよ…母さんだって頑張らなくちゃ」

大赦から聞いた話だと確か母さんは…あれ？

「母さん。母さんってどんな症状を持っているの？」

「えっ？確かお医者様から聞いた話だと…確かー」

「母さん、食事持ってきたよ」

母さんが言う前に父さんが食事を持って入ってきた。

「ありがとう貴方。ねえ貴方、私ってどんな症状にかかってたんだっけ？私忘れちゃって」

「ん？えっ？確か……」



結局父さんも母さんも覚えておらず、今父さんが電話で医者にどんな症状か聞いています。母さんは薬を飲んだ後眠った。薬から症状が分かると思っていたが、偶然にも症状の名前の部分だけが消えていた。

そして、自分はどうと。

「……おかしい」

洗面所で顔を洗った後、ある一つの疑問が気になっていた。

「バス停で出会った人、父さんと母さん、まるで別人のようだった。一体なにが起きているの」

あれはもう勇者なんて関係ない、元からそうだったと言っていていいぐらいだった。

それに…

「とつても大事な人を忘れてる気がする」

思い出せない、小さい頃自分を守ってくれた人が、大好きだった人が、忘れるはずのない大事な人が、何も思い出せない。

「…これ以上考えると頭が痛くなるわ」

考えるのをやめ、母さんのいる部屋に向かおうとした。

その時だった。

「なにかしらこれ？お守り？」

向かう途中、床にお守りが落ちていることに気付きそれを拾う。

それは手作りで作られてることが分かり、どこか懐かしい感覚があった。

「…兄さん」

なぜかは分からない、ただ自然にその言葉が口に出た。

「…あれ？」

すると急に目がにじんだ。目を何度もこすってもそれは収まらず目から流れ出る。

「なんで…私は泣いているの？」

自分は涙を流していた。

理由もなく、ただこのお守りと兄さんという言葉で涙をながし続けていた。

「……助けて」

自分は助けを求めた。

「助けて、みんな……」

勇者になって一度も助けを求めなかった。勇者としてのプライドがあるから。

でも、この時だけは――

「助けて、兄さん!!」

自分の本心が助けを求めていたんだ。

握りしめていたお守りが輝き出し、自分を囲むようにお守りから出てきた光が包み込む。

「……」

意識が段々と無くなってくる、でも恐怖は感じなかった。ただ、大丈夫という安心感と誰かに守られているような暖かさを感じながら、自分は意識を落とした。

「う、ううん……」

自分は目を覚ました。

「……ここは、どこ?」

自分が目を覚ました場所は、家の床ではなく道のだ真ん中だった。

「……これは、ひどい有り様ね」

立ち上がり周囲を確認すると、何一つ変わらなかった村は今はずいぶん、目で見える家は全て人が住めないレベルに壊され、空は青色から赤い色へと変わっていた。

「……ずっとこのお守りを肌見放さず持っていてよかった。ありがとう、兄さん」

「恐ろしいな徹とやはは、いまだにそのお守りに力が残っているとは恐れ入ったよ」

「ッ!」

声が出た方を振り向くとそこには一人の男が立っていた。

「……生存者って訳じゃないはね」

自分は隣にある自分の荷物から大葉鎌を取り出し、相手を警戒するように構える。

「まあ待て、俺は貴様らの敵だが、今回貴様と戦う意思ない。俺の名はツクヨミ。神の名を持つものだ。今回俺は、貴様と交渉したいがために現れた」

「交渉？」

「……ああ、交渉だ。取引内容は、俺が貴様にだす内容で天の神について、それとも神樹につくか決めてほしい」

「…内容はなに」

自分は猛烈に嫌な予感がした。

「郡徹の真実を貴様に言おうじゃないか」

## 第二十二話

### イレギュラー郡徹の真実

「兄さんの…真実？」

「ああ、郡徹の真実を貴様に話そう。そして聞いたあとはどうするかは貴様の自由にしろ」

「分かったわ…話して、兄さんの真実を…それとなぜ私を選んだ訳も話して」

「ふっ、いいだろう。それも含めて言おうじゃないか」

ツクヨミに向けていた大葉鎌を納め、耳を傾けた。

「さて…まずは貴様を選んだ訳を話そうか…といってもただ貴様が奴の妹だから、という単純な理由だがな。天の神に協力してもらい貴様に幻術をかけ記憶の上書きをし、人質として役に立つてもらった役目だったがな…結果は失敗に終わったよ…」

「…見くびられたものね」

「まあこれは分かりきってたことだ。本題は奴の真実だ。まずは問おう、貴様にとって郡徹とはなんだ？」

「…私の兄よ、それ以下でもそれ以上でもない、優しく、私の憧れる人」

そう言うと、ツクヨミはふっ、と息をつき口を開いた。

「なるほど、なら貴様にとって奴の死を見たくないのは当たり前か…なら、単刀直入に言おう。このまま進み続けると奴は死ぬぞ」

「……えっ？」

彼は何を言ってるの？

このまま進み続ければ、兄さんが死ぬ？

「で…出鱈目なこと言わないで！」

「いや、これは本当のことだ。奴は俺と同じ、それぞれ使命を持って存在する者だ。使命を達成すれば違う世界に転生され、また使命を受ける。だが奴は、郡徹だけは違う。奴は使命を終えれば、奴の存在は消滅し、奴に関わった人達は奴の記憶だけが消え、奴は最初からこの世にいなかったと認識するようになってしまう」

「……………」

「…まあ転生していない貴様には分からないか、簡単に言えば、奴は自らこの世からの消滅を進んでいるということになる」

「待ってー！」

頭が混乱してきたため、ツクヨミに待ったをかける。

そして、一回深呼吸して、口を開く。

「…あなたの言っていることが本当かどうかはまだ確証はないけど。でももしそれが本当だったとしたら、私たちがやってきたことは全部、兄さんを死に導くようなものだったっていうの！」

「ああ、そういうことだ。貴様らがいくつものバーテックスの侵攻に勝利を収め、平和に近づいていると思うが、郡徹だけは逆だ。奴だけは逆に自分の首をしめている」

「…じゃあ兄さんはその事を黙って戦い続けたの？」

「そういうことになるな。そこで貴様に問おう、貴様は今、二つの選択肢がある。交渉を断りこのまま平和を進み続けるか、奴を救うためにこちら側に付くかだ。平和を進み続ければ奴が助かるすべはない。だが、貴様がこちら側に付けば奴が助かる保証はある。さあ選べ、時間は刻一刻と進んでいる。貴様の出す答えが奴の生死を決める」

そう言いツクヨミは手を差し出す。

「……………」

自分はどうしたらいい？

彼の手をとれば兄さんは助かる。でもそれだと世界はどうなる？  
きつとバーテックスと彼によって終わるに違いない。逆に手をとらなければ兄さんが助かる方法はない。それにこれまでのバーテックスの侵攻は全部兄さんのおかげで勝利している、最近の兄さんは体調が悪そうに見えた。いつ戦闘に支障がでてもおかしくない。

「……………そういうことね」

つい声に出してしまった。でも、仕方のないことだ。

選択肢なんてただの嘘、本当は一つしかなかったんだ。

これはあまりにも理不尽だ。自分は彼の話聞く前からもう……詰んでいた。

「……」

自分はツクヨミの手にゆつくりと手を伸ばす。

「ほう、平和よりも奴を選んだか。運命とは残酷だな、たった一人の少女の選択で貴様の仲間、そして人々の命が決まるのだからな」

「……………」

彼は何か言っているがもう自分にはその声は届かない。

涙も、怒りさえも出てこない。ただ無表情で目には光がなく、静かにゆつくりと手を伸ばした。

——その時だった。

「ッ!？」

突然ツクヨミは後ろへ飛んだ。

その瞬間、ツクヨミがいた所に何かが飛んできた。

「くっ!？」

そこからくる轟音と衝撃に少しのけぞるが、なんとか足で踏みとどまる。

「……………一体……なにが?」

轟音と衝撃が収まり土煙も晴れたことで、飛んできた物の正体が姿をあらわした。

「……うそ……………」

それは、自分が知っているものだった。そしてそれを使う人もよく知っている。

この黒い剣を使う人はたった一人しかいない。

「兄さん!」

「なぜだ……………なぜまだ立っている。答えろ、郡徹!」

剣が飛んできた方向には、郡徹が離れた位置にたたずんでいた。

「…はあ、今日は散々だな。でも、悪くねえ。姫神から色々聞いたぜ、あんたのこと。まあなんだ、とりあえずあんたに言いたいことがある……………てめえ俺の妹になに手を出してんだ!」

## 第二十三話

### 試練

「お久しぶりですね、徹さん」

「……………」

なぜか自分は、白い空間とそこに立つ姫神が目映っていた。

「あれ？えつと…徹さん」

「ああ、すまん姫神。状況に追い付けなくて少し混乱してな、反応が遅くなった。とりあえず状況を整理したい」

「あまり時間が無いですけど…分かりました。私も少しだけ状況の補足を言いますね」

「ああ、頼む」

そこから数分がたち、状況が飲み込めた。

まず自分は、大赦から一人とある病院来てほしいとメールを貰い、なんの疑いもなくその病院に一人で向かった。まあその病院が自分たち勇者が定期的に検査する病院だからか警戒心がなかった。

そこから医者の人に新しい勇者システムの適正実験に付き合っしてほしいと言われ、自分は断る理由もなく受けることにした。

そこからはいい結果を残すためと言われ薬を打たれた後ベッドに寝かされた。ここまですべて自分が覚えていることだ、そこに姫神の補足を入れよう。

どうやら大赦は信託を恐れ自分を殺す計画をたてていたらしい。メールで病院まで誘導し薬で眠らせ毒で殺す、なんとも分かりやすい計画だ。

「…これはやく戻らないと俺死ぬんじゃない？」

冷静に考えると自分は薬を打たれ眠っている状態、後は毒を打つ所までいつている。

「徹さん、ご安心ください。どうやらその件は彼女がやってくれましたよ。今は…彼の元に向かったいるようですね」

「？彼女って誰だ？」

「それはこれから話す内容に関係しているので一旦置いてください」

い」

「はあ……」

「それでは本題に移ります、質問は後で聞くのでまずは聞いてください」

姫神はコホンツと咳払いをし、口を開いた。

「徹さん、あなたの敵、新崎という者はこの世界に転生したときの名前なんです。彼の本当の名前はツクヨミ、1000年前の勝利の剣を持つ守護者です。彼は戦いを終え、英雄となりましたが彼はあることを叶えるため私に転生させてほしいと頼んできました。彼の願いは彼にとつてとても大切な人を助けてほしい、そういう願いでした。幸い、条件は揃っており世界とこの世界の勇者たちを救うという使命も了承し、二人をこの世界に転生させました」

「二人？」

「黙ってきいてください！で、最初はよかったんです。仲間たちと順調に勝利を納めてきたのですが、問題がふたつあったのです。それは情報の少なさです。それが原因で何度も世界をやり直しました。そしてもうひとつは、ツクヨミの持つ抑止力を受けない能力のお陰で運命が大きく変わってしまうことです。ツクヨミは徹さんと同じ抑止力を受けずに運命を変える力を持っています。でもそのせいで予想外なことが起きやすかったんです。そんな過酷な状況のなか、なんとか戦いの終わりを迎えるところまでできました。しかし、彼が天の神に突然寝返り彼の大切な人を殺したのです」

「……………」

「……これが今教えられる範囲です。徹さん、なにか質問はありますか？」

えつと……なんだ……まとめると今の新崎は1000年前の守護者ツクヨミで、彼の大切な人を助けるためになんでもすると姫神に頼んで使命とかあったけどめげずに頑張ったけど最後らへんでなぜか裏切って大切な人を殺したと……

「……それじゃあ、ツクヨミが助けたいと思っていた大切な人って誰だ？」



自分は全然教えてもらえなかった多分今自分の体になんかしている彼女と同一人物であろうツクヨミの大切な人について聞いた。

「それはですね…今徹さんの体を操っているアマテラスさんのことですね」

「アマテラス？」

「はい、彼女もツクヨミさんと同じ1000年前の守護者であり、もと浄化の剣を持っていた人です」

「なるほど…」

「あ、そろそろ目覚めた方がいいと思いますよ」

「ん？それは一体どういうことだ？」

「目的の場所に着いたということですよ。それではここで一旦目覚めさせていただきますね」

そう言うのと、あの時と同じように自分の方へ手をかざすと段々と意識が薄くなっていることが分かる。

「徹さん！ツクヨミさんから伝言で『試練を乗り越えろ』と言われてましたので十分警戒してください！」

「任せろ！」

そう答えた自分は、目を閉じた。

そして今に至る――

自分はツクヨミと千景の方へと近づき、ツクヨミとにらみ合う。

「貴様の妹を人質として使えば俺の目的は楽に出来たが、どうやってここがわかった？」

「さあな、実は俺も分かってないんだ。目が覚めたらお前が千景を追い詰めている光景が見えたんでな、邪魔させてもらったよ」

「ふん、まあいい、こつちとしても貴様が来るのは好都合だ」

「そうかよ…ハアッ！」

地面に刺さっている浄化の剣を取り、ツクヨミに斬りかかるが、ツクヨミはそれを余裕で回避する。

「甘いな、不意打ちをするにも殺意でバレバレだ」

「わざわざご指摘、どうもなごった」

「さて、貴様のために色々と用意したんだ、乗り越えることはできるかな？」

ツクヨミは指でパチンツ！と音を鳴らすと、あらゆる方向から地響きを鳴らして、なにかが飛び出してきた。

「兄さん…あれって」

「ああわかってる、下がってる千景」

そのなにかは人がバーテックス化されたものだとはすぐ分かった。

普通のバーテックスの頭のとっぺんに人の上半身の形をした銅像がついているものが空中を浮いていた。

「たくつ、やりやがったなツクヨミの野郎。あのバーテックスの数から見るに、この村全員をバーテックス化させたな」

「その通りだ。ここの住民は負の感情が多く持つている、そのお陰で簡単にできたよ。貴様はこの数を相手に耐えられるかな？」

「さあな、やってみなくちや分かんねえよ」

でもさすがにこの数はきついな、負の感情をこれ以上受け止めたらどうなるか…いや、これ以上考えるのは野暮な話だ、逆にこれは都合な話じゃねえかよ、あの中には子供の頃、千景へのいじめを止めるために痛みと苦しみを与えたいじめっこのグループ、俺の友人の翔大、それに父さんや母さんだっている。だから俺は今ここで、自分の犯した罪を償うために、みんなを助ける!!

「うおおおおおお!!」

自分は浄化の剣を構え、突進しようと声をあげ足を踏み入れた。

「まだこれだけじゃないぞー！」

「なっ!？」

足を踏み入れたと同時に空から槍のようなものがいくつも降り注いだ。

「兄さんー！」

「来るな、千景ー！」

自分に近づこうとする千景を止め、上を見上げる。

そこにいたのは、竜の形をしたバーテックスと槍のようなものをい

くつも浮かばせている眼球の形をしたバーテックスがそこにいた。

「おいおい…まじかよ」

「さあ郡徹、たった一人で乗り越えてみせろ!!」

ツクヨミは上げていた手を振りかざすと、空にいる二体のバーテックスからの攻撃が始まった。

## 第二十四話

### 絶望の中に希望あり

「——兄さん」

「——兄さん起きて！」

「…千景か？」

目を覚ますと勇者システムを起動した千景が仰向けになっていた自分を起こしていた。

「よかった…兄さん、怪我はない？」

「ああ、全然問題ない、勇者システムのおかげで助かった」

自分は体をおこし、周囲を確認する。

周りは奴等の攻撃で荒れ果てており、自分が仰向けになっていた場所はクレーターの中心部になっていた。そして奥には空に浮かぶ二体の進化体と何とか少し数を減らした人型バーテックスがこちらに迫っていた。

「兄さん、私も加勢するわ。倒すことが無理でも怯ませるぐらいなら出来る」

「分かった。でも油断はするなよ、奴等は連携して攻撃してくるぞ」

それは少し時間が戻る。

空にいる二体の進化体の攻撃が始まった時、自分は避けながら人型バーテックスを倒していこうと考え突っ込んだ。竜型の進化体から放たれる帯状の光線と眼球型の進化体から来る槍を避けながら人型バーテックスを浄化の剣で斬り、順調に数を減らしていく、ここまではよかった。

それは突然の出来事だった。奴等が連携してきたのだ。

光線と槍を避けた瞬間、人型バーテックスが突進してきた。それに油断した自分はその突進をくらってしまい、今に至った。

「大丈夫よ兄さん、いざとなったら切り札を使うわ」

千景の切り札か…確かに『七人御先』なら安心出来るがまたあの黒いモヤを取り込まなくちゃいけない、女神の所に来てから少し和らいただが、それを取り込んで持つかどうか…くそっ！何を躊躇してい

るんだ自分は！落ち着け、落ち着くんだ！

「……分かった。いざとなったら俺があゝの進化体二体を抑える、その間に逃げる」

「……」

静かにうなずく千景。

「よし、行くぞ！」

自分と千景は奴等の方へと走り出した。

「兄さん、お願い！」

「ハアツ！」

竜型と眼球型の進化体の攻撃を避け、千景の支援もあつて最後の人の型のバーテックスを斬った。

「これであらかた片付いたわね」

「ああ、後はあゝの進化体二体だ」

……それにしても妙だな、あゝの進化体二体の攻撃が前の攻撃より雑になってる。結局千景は切り札を使ってないわけだし。逃げてる最中に攻撃されるんじゃないかと恐れていたんだが、これなら千景を逃がした方がよかつたんじゃないのか？

「……」

肝心のツクヨミは離れた場所で静かに立っているだけ……一体何が目的なんだ。

「兄さん避けて！」

「ん？あぶな？！」

突然二体の進化体の攻撃が激しくなった。

自分は千景の警告のおかげで少し遅れたもののなんとか避ける。

「くっ！」

さっきよりも攻撃の命中が正確になっている!?

完璧に避けたと思つたが、急に狙いが正確になりかすり傷だが何カ所か受けてしまった。

「兄さん！今そつちに——しまつ、きやあ！」

「千景！」

千景も油断してしまい、光線と槍を防いだものの着弾したときの衝撃で飛ばされてしまった。

「くそっ！なんなんだよ一体！」

一刻もはやく千景の所に向かいたいが、一瞬でも隙を見せたらやられてしまう、そのため隙を見せないために自分は二体の進化体と睨む。

——来る！

そう思ったと同時に自分は走り出す、二体の進化体もそれと同じに攻撃が始まった。

「同じ鉄は踏まない！」

そう言い、自分は旋刃盤で光線を防ぐ、そしてすぐさま手甲に切り替え次に来る槍を破壊は出来ないものの、弾くことは可能なため、槍を弾き飛ばした。

「よし、これならいける！」

そう思った時だ。

「なっ!？」

後ろから殺気を感じ、前の方へ倒れこむ。すると何かヒュンツと勢いよく通りすぎた。自分は通りすぎた何かを目視する。

槍だ。先程弾き飛ばした槍が帰って来たのだ。

「まじかよ……」

そう言っている間にも容赦なく槍と光線は自分を襲う。

「くそがあああああ!!」

自分は恐怖を打ち消すように叫び、旋刃盤で光線を防ぎ、手甲に切り替え、槍を弾き飛ばしながら突き進んだ。

多少の傷も気にせず、自分に向かってくる光線と槍を防いで弾き、進むを繰り返す。

少し、少しと進んでいき、進化体との距離も縮まる。

いける！そう確信していた。

「なっ!？」

だがそう簡単にはいかせてくれなかった。

「正面から来る槍を弾き飛ばすと、もう一本の槍が目の前に迫っていた。弾き飛ばすにも間に合わない。額に当たり、頭を貫かれる未来が分かりたくもないのに分かってしまった。」

「そして槍が額に当たろうとした。」

「させません!」

「うわっ!」

その直前、槍が何かに当たり大きく軌道をずらした。

自分は驚きのあまり尻餅をついてしまう。

「ふうー、危機一髪でしたね、徹先輩」

「さすがだな杏!」

「ぐんちゃん、大丈夫!」

「大丈夫よ高嶋さん、少し傷を負っただけよ」

「うむ、運がこちらの味方したわけだな。とりあえず二人とも無事で良かった」

自分の目の前に現れたのは、勇者システムを起動した姿、戦装束を着た杏とタマ、若葉、友奈がそこにいた。

「……後を付けてきたのかよ」

「ん?後を付けて何か悪いか?」

「……いや、大助かりだよ」

自分は立ち上がり、みんなの方へと振り向く。

「みんな、あの進化体二体を倒すのに力を貸してくれ」

「元よりそのつもりです。徹先輩」

「安心しろ徹、タマに任せタマえってな」

「いいよ、とおさん!みんなで戦えば、どおってことないよ!ぐんちゃんはどうするの?」

「私もいくわ、あの進化体にはお返ししないと気がすまないわ」

「私も加勢するぞ、仲間を見捨てるわけにもいかないからな」

「全員満場一致か…よし!」

自分は進化体へと振り返り手甲から浄化の剣へと切り替え、構える。

「それじゃあ行くぞ!」

そして、自分の声を合図に再び戦いが始まった。

その時のツクヨミがニヤリと笑っていることに自分はまた気づいていなかった。



## 第二十五話

## 罨

「来い、『雪女郎』！」

金弓箭に切り替え、自分は杏の切り札『雪女郎』を発動させ矢を放った。

矢は勢いよく上へといき、眼球型の進化体へと向かった。

しかし、その矢は、竜型の進化体から放つ光線によって防がれてしまった。

「くっそー、あの眼球型の進化体、動きめちやくちや遅いから楽に当たると思ったが、あの竜型の進化体が邪魔だな」

「徹！立ち止まるな、来るぞ！！」

若葉の声と同時に光線と槍が降り注いだ。

自分は何回か避けて慣れたのか、光線は防がなくても避けられるようになった。

だが問題は槍だ、そこで自分はある賭け事にでた。

「くらえっー！」

向かってくる槍を手甲で弾き飛ばすのではなく、浄化の剣で迎え撃った。

浄化の剣で斬った槍はさきほどの破壊力のある手甲でも壊せないほどの固さとは違いすんなりと斬れた。

賭け事は成功した。眼球型の進化体から放たれる槍は、最初はそのまま一直線に来るが、その後はまるで意思を持っているかのように向かってきた。そこで自分はある可能性を考えた。それは、あの槍も元は人だったということだ。

「まだまだいくぞおー！！」

それが成功した今、自分は次々と来る槍を浄化の剣で斬りまくった。光線が来たとしても避け、槍を斬った。

「これで…ラストだっ！！」

そして最後の槍を斬った。もう眼球型の進化体にはもう槍で攻撃することはもう出来ない。

「なあ、これタマたち来る意味無かったんじゃないか？」

「えっと、一応徹先輩と千景さんを助けたんじゃないですか、タマっち先輩」

「でもそれ杏しかやってないような……」

「あはは……でも私たちが来たことは決して無意味じゃないよ！ねっ、ぐんちゃん！」

「ええ、高嶋さんたちが来なければ危なかったわ」

「そう言われたタマは、「それもそうか」と納得する。

「おい！戦闘中に何を呑気に話しているんだ！戦いに集中しろ！」

若葉の注意を聞くと、みんなすぐに戦闘に集中した。

「まったく……さて、あの空にいる二体の進化体、どうやって倒すか？」

「さあな、とりあえずあの二体の進化体を空から引きずり下ろしたいんだが、あの眼球型は無力化したし、問題はあの竜型だ」

竜型から放つ光線は眼球型の槍よりは厄介にはならないが、眼球型の支援をしなくてもいい今、どういう動きをするのかまだ分からない。

今はお互いにらみあっているが、どちらかが動けば、攻撃が始まる。

さて、どうするか……

「…あの、少し提案してよろしいですか？」

すると杏が提案があると挙手してきた。

「ん？ああ、いいぞ」

「えっとですね——」

杏の出す提案、それは今の現状で成功率が高い作戦だったため、全員その作戦に賛成した。

「みんな、自分の役割は分かったか？」

自分の問いに、全員うなずく。

「よし、それじゃ始めるか！」

自分の言葉を合図に、みんなはそれぞれの持ち場に走った。

『あの二体の進化体、特に竜型のほうは眼球型を中心として周りを動

いていると思うんです。だから最初に竜型のほうを無力化してから眼球型を倒す、それが得策だと思います』

『なるほど…それはべつにいいが、その方法は？』

『はい、まず最初に——』

「来い（来て）！『雪女郎』!!」

自分と杏は切り札『雪女郎』を発動させる。

「せーの！」

そして同時に二本の矢は放たれ、眼球型へと向かっていく。それを竜型は見逃すはずもなく自分たちを狙うと同時に矢を打ち落とすよう、光線を放つ。

「タマつち先輩！」

「タマに任せタマえー！」

向かってくる光線は、タマの切り札『輸入道』によって大きくなった旋刃盤の盾で防いだ。

そして自分はまだ光線による攻撃をしているのにも関わらず旋刃盤の陰から出て、攻撃が届くように飛び上がり、そこから竜型に向けて浄化の剣を投てきした。

投てきした浄化の剣は竜型の光線で打ち落とされると思ったが、さきほどの二本の矢が光線に打ち落とさるた瞬間、その場で爆発し霧を発生させた。そのため、浄化の剣は簡単に竜型に刺さった。

そして、久しぶりに使う『シフト』を使い竜型に刺さった剣まで瞬間移動した。

これが作戦の最初の手順、『シフト』を使い竜型に乗る。

『そして、竜型に乗ることが出来たら次は——』

竜型を地上に叩きつけて、無力化した眼球型を倒す。

「来い！『酒天童子』!!」

武器を手甲に切り替え、友奈の二つ目の切り札『酒天童子』を発動させる。

「落ちろ!!」

鬼の手のように大きくなった右手を振りかざし、竜型を地面に叩きつけるように全力で殴った。

ゼロ距離なためもろにくらった竜型は凄まじい轟音とともに地面へと叩きつけられた。

「ぐっ…うおおおおお!!」

初めて使った切り札なのか、それともリスクが大きすぎる精霊なのか分からないが、全身に痺れるような激痛が流れる。だがそんなのを気にしている場合ではない、張り上げた声を出し強制的に体を動かす。狙いは眼球型、浄化の剣に切り替え動かない眼球型に一撃を加える。

『そして最後に竜型を倒すのですが、それは私たちが時間を稼ぎます。徹先輩は眼球型を確実に倒してください』

「……おかしい」

眼球型に一撃をいれたとき違和感を感じた。それがなにかは分からない、だがそれは竜型の方を見たときにすぐに分かってしまった。

「っ…そういうことか!」

それは若葉たちの武器が普通に通り、そして倒している光景があった。

「みんな、無事か!」

自分は着地し、みんなの無事を確認する。

「ああ、こっちは全員無事だ。徹の方も無事でなによりだ。眼球型は倒したのか?」

「ああ、一応な」

そう言うと、後ろのほうから自分よりも遅れて眼球型が落ちてきた。

「…それはそうとみんな、なにか妙な感覚はしなかったか?」

「妙な感覚?ぐんちゃんなにか分かる?」

「えっと…高嶋さん、兄さんが竜型を叩きつけた時、竜型はどんな状態だった?」

「え?えっと…あっ!そういうえば瀕死に近かったような感じだった!」

「そう、そしてそれがおかしいの、あれは普通のバーテックスとは違う、ツクヨミが作り出した元は人だった者よ。そしてそれを倒すには――」

「郡徹の持つ浄化の剣で倒すしかない、そう言いたいのだろう」  
「「「「「つ!?!」」」」」

全員一斉に声のした方を振り向く、そこには高みの見物をしてたであろうツクヨミが半壊した建物の上に座っていた。

「自分から姿を出すとはな、探す手間が省けたよ、敵は全て倒した、後はお前だけだ、ツクヨミ」

「……ふむ、確かに全て倒したようだな」

「ああそうだ、後は元凶のお前を倒せば全てかいけ――つ!?!」

突然目がくらみ、自分は膝をついてしまった。

「兄さん!?!」

「とおさん、大丈夫!?!」

「貴様! 徹になにをした!?!」

「ふつ、俺は貴様らに敵を差し向けただけで後はなにもしていないぞ」

「でたらめをいうな!」

「いや…若葉……あいつの言っていることは本当だ」

「なっ!?!」

「…なに言ってるんだ徹、どういうことだよ!」

「奴は実際に俺たちには手を出していない……俺たちがかってに自滅しただけなんだ」

「なにを言っているんですか徹先輩!」

「俺たちは……奴の手のひらで……踊らされてい……た」

そこから先は声が出なかった。自分は力尽きるように倒れる。そして意識が暗転していくなか、最後に見えた光景は、黒い霧が自分の方へと集まっていく光景、若葉たちが自分になにかを言っている姿がそこにあった。

## 第二十六話

### 静寂なる暗闇を望む

「——起きて」

「——起きてください」

「若葉ちゃん、起きてください!!」

「……ひなた?」

ひなたの声が聞こえ若葉は目を覚ます。

「よかった、目を覚ましたんですね」

「なんでひなたがここに?……みんなは?」

若葉は体を起こし周囲を見渡す。そこには徹以外の全員が倒れていた。

若葉は徹がどこにいったのか気になるが、その前に目の前にある疑問を片付ける必要があった。

「ここは……一体どこだ?」

若葉たちがいたのはなにもない白い空間だった。

「私も気づいたらここにいて、目の前に若葉ちゃんたちが倒れていたんで起こしにいったんです。そういえば徹さんは?周囲を見渡しても徹さんの姿が見えないのですが」

「…すまない、徹と千景の故郷で進化体二体と戦っていたのは覚えてるがそこから先はなにも覚えていないんだ」

「そうですか……とりあえず、みなさんを起こしましょう」

「そうだな」

若葉とひなたは一旦話をやめ、まだ目を覚ましていない勇者たちを起こした。

「……全員、覚えていないんですね」

全員を起こしたあと、ひなたは状況説明し、全員にどこまで覚えているのかを聞くが結果は同じだった。

「誰も覚えてないって不味くないか?」

「そうですね、タマっち先輩いう通り、私たちが忘れてしまった空白を

どうかかして思い出さない限り、どうすることも出来ません」

「うーむ……可能性があるとしたら、徹以外全員死んでしまったが考えられるが」

「……じゃあここは死後の世界だっていうの？」

「ちよ、なに物騒なことをいつてるんだ二人とも！」

「そうだよ！まだ他の可能性だってあるかもしれないよ！」

「そうですね……もしその可能性があっているとしたら若葉ちゃんたちはともかく私は死ぬ直前の記憶は持っているはずなのですが……ないのでその可能性はなしですね」

「そうか……なら次の可能性を考えよう」

若葉たちが次の可能性を考えてようとしたときだった。

「その必要はありませんよ」

「「「っ!?!」」」

「誰だっ!?!」

若葉たちは声のした方を振り向く、するとそこには短い白髪で巫女装束を着た一人の女性が立っていた。突然現れた女性にひなたを除いた全員は武器を構え警戒した。

「安心してください私は敵ではありません、私はあなたたちをお待ちしておりました。若葉様にひなた様、友奈様、千景様、球子様、杏様、お会いできて光栄です」

そう言い女性はお辞儀をした。

「私たちをまっていた？」

「はい、申し遅れました、私は時を操る神であり郡徹のこの世界に送り出した張本人、姫神と申します」

「か、神様あ!?!」

「マジかよ、まさかこの目で神様が見れるなんて夢にも思わなかったぞ」

「タマっち先輩に同感です」

「なんで今日に限ってこんなに驚かなくちゃいけないのかしら……それに、姫神さ「姫神でいいですよ」——姫神はさつき兄さんをこの世界に送り出した張本人って言ってたけどそれはどういうこと？」

「そうですね、では勇者様たちが失った空白と一緒に話しますね、私が犯してしまった罪の全てを…」

「……………」

ただ真つ暗な空間に自分は立っていた。

なぜここにいるのかは分からない、だけど恐怖は感じなかった。それどころかこの空間がいまの自分にとっては快適な空間だと感じてしまっている。

「なんで俺…こんなところにいるんだ…?」

思い出そうとしても自分が最後に覚えているのは、巨大な黒い霧が自分の中に入り込むところだった。それ以降の記憶はすっぱりと無くなっている。

「っ!」

突然とてつもない激痛が頭の中をはしる。

あまりの痛さに両手で頭を抑える。しかし激痛は収まる気はない、徐々に激痛は強くなり、自分の頭の中に知らない記憶が映し出された。

『姫ちゃん…お願い……これは姫ちゃんにしかできないことなの』

『ぐすっ…分かりました。アマテラスさんの願い、確かに承りました』

『最後ぐらいは白犬って呼んでほしいな……』

『はい……白犬さん…』

『…やつとその名前で言ってくれたね…姫ちゃん…後は…よろ…しく』

『この記憶は確か…姫神が前に言っていた…』

前に姫神に教えてもらったことと一致している、瀕死状態のアマテラスという女、そして彼女の傍にいた姫神、これを察するにツクヨミに殺されたその後の記憶だな。でもなぜ今になってこの記憶が見えたんだ?

「っ!?!またか!」



そんなことを考えているうちにまた次の記憶が再生される。

『これでいいん…だよな？これで…みんなを救えるんだよね？うんうん、私がしつかりしないといけないんだ。アマテラスさんもツクヨミさんもいない、私一人でやらなくちゃいけないんだ。私に出来ることをやらなくちゃ』

次の記憶はいつも姫神がいる白い空間だった。目の前にいる姫神は自分の知っている姫神よりもどこか弱気な気がした。

「…姫神は一体何をしているんだ？」

姫神がなにかをやっていることは分かるがなにをやっているのかは分からない、自分は姫神の作業を眺め続ける。

そして、姫神がなにをやっているのかが分かったとき、自分は目を奪われてしまった。

「どういうことだ…なんで…なんであそこに俺が立っているんだ!!」

そこにいたのは魂が抜けているように立っている自分がいた。

『これである程度は完成…後は記憶を植え付ければ…よし、終了』

そう言う目目の前にいる自分が眠るように倒れ、目を閉じた。

『ちゃんとアマテラスさんの言う通り、世界を救うことができる人を作ることができた。後は彼がどんな風に救うのか…様子見しなくちゃ』

そこから先は最初の時と同じだった。眠っていた自分が目覚めそこに姫神が登場し説明する。

そして説明が終わり、自分は転生する、ここまでがあああの場面だった。まだ記憶は続いている、ここから先は未知の領域、転生した自分に別れを告げた姫神はある言葉を口にしていった。

『…悲しいものですね、彼は使命を終えれば消えてしまうのに、彼は使命を止めることはできない、どんなに抗っても結果は変わらない、使命を果たさないといけないという決意に縛られているから…作られた英雄は強制的に使命を果たし、そしてこの世界から誰にも気付かれずに存在は消滅する』

その言葉は自分には衝撃的だった。

嘘だと言っただけだった。

どんなに嘘だと自分の中で言い続けているのに、本心がこれが真実だと受け止めていた。

「なんでだよ…もう訳がわかんねえよ。俺が本当に人間なのか、使命が終われば自分自身の存在が世界から忘れ去られるとか、俺は…俺は！」

膝をつき両耳を手で塞ぎ目を閉じる。

もうなにも見たくないし聞きたくない、ただ静寂な暗闇が自分を支配すればそれでいい。

それが、永遠に続くのなら本望だ。

「……………」

香川県にある神樹様がへと続く門に、一人の男が向かっていた。

その男は、体が脱力したかのようにふらふらと歩いていた。男の目は光が灯つてなく、まるで魂が入っていない肉人形のようなだった。

「……………」

男は無言で歩き続ける、そして男が門の前に着いたとき、足を止めた。

男は光のない目で門に陣取る一人の少女を無言で睨み付ける。

「…久しぶりだね、徹くん。名前覚えてる、歌野だよ？」

「……………」

「反応はなしか…徹くん、貴方に何があったのかは私は知らない、でも…私は、貴方がこれからすることを止めなくちゃいけないの」

歌野は勇者システムを起動させ、戦装束を身に纏った。

そして己の武器の鞭を構え――

「だから早く目を覚まして、徹くん!!」

「■■■■■■■■!!」

歌野が張り上げた声を出し走り出す、それと同時に徹も声にならない叫びを上げながら走り出した。

## 第二十七話

### 作られた英雄と白犬

「■■■■■■!!」

「くっ、なんのおー!」

徹の攻撃をかわしながら防御が手薄になったところを鞭で攻撃する歌野。ダメージは小さいがこれをなん十回も繰り返しているため徹には大きなダメージを与えられたと思う。

「■■■■■■!!」

「ぎゃあっ!」

だがそれは歌野も同じだ。徹の背中から噴出している黒い霧によつて形成されている黒い翼による攻撃は歌野の体力を削っていた。「いてててて…その黒い翼、エキセントリックな動きをするね徹くん。それにしても徹くん、さつきから黒い翼での攻撃しかしてないけどどうして武器を出さないのかな?」

「■■■■■■!!」

徹は歌野の問いに答えず片方の黒い翼を崩し、黒い竜巻として歌野に放った。

歌野はそれを難なくかわし、同じように攻撃をする。

「よしっ、これで確信した。今の徹くんは黒い翼での攻撃しかできない、ならそんなデンジャラスじゃないね!」

「そう言い歌野は追撃をしようとした。」

しかし……

「えっ?」

鞭が当たる瞬間、徹が目の前で消えたのだ。歌野は徹がどこにいったのか探そうとするが、その時間はそう簡単には与えてくれなかった。

「あっ!」

突如後ろからえぐられるような打撃が来た。骨の軋む音が聞こえ、とてつもない痛みが体全体に走る。そしてなすすべもなく吹き飛ばされ一本の木に激突した。

「くっ……げほっげほっ！」

あまりの痛みと苦しみで立つことが出来ない、口から血が出る。

「■■■■■■!!」

「しまっー！」

体が動けないのを狙ったのか、徹は歌野に向けて黒い竜巻を放つ。

「……！」

避けられない、そう思った歌野は恐怖のあまり目を閉じる。

「……あれ？」

だが痛みは来なかった。

恐る恐る目を開く。

「ふう…間一髪だったな、歌野」

そこには、若葉と千景、友奈、球子、杏の五人が目の前に立っていた。

「みんな…なんでここに？」

「すまないが話は後だ。まずは徹をどうにかして止めなければ。立てるか？」

「え、ええ、なんとか」

「ならばよし。みんな行くぞ！」

若葉の合図と共に、徹との戦闘が始まった。

「……うるさいなあ」

両耳を手で塞いでいるのに音が聞こえてくる。

「!!」

「!!」

誰かの声だろうか、ノイズがかかかっていて聞き取れない。

「……ほっといってくれよ、俺はもう疲れたんだよ」

使命を終えれば、自分はこの世界から存在ごと消えてしまう、こんな理不尽受け入れられるかよ。

「死にたくねえんだよ俺は。俺がここに留まるには使命を放棄するかねえんだよ」

だが使命を放棄したらどうなる？

そんなの決まっている、ツクヨミによって世界が終わるだけだ。

「ふぎけんじやねえぞ！俺が犠牲になるかならないかで世界の運命が決まるなんて…信じたくもねえよ」

ツクヨミはこれを狙っていたのか？…いや、そんなはずはないか…「どうしたらいいんだ？俺はみんなを、この世界を救いたい、生きてこの世界を救いたいんだ！わがままな願いだけれど、俺に…教えてくれ…」

「いいよ、郡徹くん」

「…えっ？」

聞こえてきた声は優しく、そしてどこか聞き覚えのある女の声だった。

自分は両耳を塞いでいた手をどかしゆっくりと目を開いた。

目を開けると、先ほどまでいた黒い空間ではなく、平原に立っていた。

優しい風が音と共に当たる。草の揺れる音がうるさく感じない、空は青空で太陽が辺りを照らしてくれる。

自分の目の前にいる女性が見せているのだろうかとても落ち着く場所だ。

「初めましてかな？こんにちは、郡徹くん」

その女性は白色の髪でポニーテールにしており、自分たちとは少しデザインが違う白色の戦装束を着ていた。

「…なんで俺の名前を知っているんだ？俺はあんたのことは知らないんだが」

「あれ？姫ちゃんから教えてもらってないの？アで始まってスで終わる名前」

「…まさかあんた、アマテラスなのか？」

「せいかーい！」

こいつがアマテラス!?1000年前の浄化の剣を持つ守護者がこの人だと…信じられねえ。

「もおーなんでそんな信じられない顔をするの徹くん！」

「名前しか知らなかったんだ。細かいところは姫神から全く聞いてな

「いんだ」

「そっかー、それならいいや。それよりも徹くん、本題に入るけどいいかな?」

「本題?それって俺が犠牲にならずに世界を救う方法か?」

「そうそう!今回、なんで徹くんの目の前に現れたのかというのと、徹くんにあることを教えに来たからなんだよ!」

「あることを教えに?」

「そ、徹くんだけが持つ能力『希望の願い』についてね」

## 第二十八話

### 自分は郡徹として生きる

『希望の願い』 一体それはどういう能力なんだ？』

自分が助かる方法が『希望の願い』という見覚えない能力なんて色々不安があるため、アマテラスに説明を求めた。

「うーんそうだね、代償を捧げれば限度関係なく力を引き出せる能力っていったらいいかな」

「限度関係なく力を引き出せる？」

「うんっ！他にも力を与えたり出来るんだよ、こっちも限度関係なく！」

マジかよ…とんだ規格外の能力だなそれは。

「…なあアマテ「アマテラスじゃなくて白犬って言って！」…白犬はさつき、能力を発動するためには代償が必要と言っていたが、一体代償はなんなんだ？」

そう言った途端、白犬はえっ?!?と云わんばかりの顔をした。

「あーなんて言ったらいいかなー、しいていえば希望？って言えばいいかな、人々の願いから生まれる希望を使って力を引き出せるんだよ」

「人々の願いから生まれる希望か…：…なんか軽い代償だな」

「うーん、そうでもないんだよ徹くん。軽い願いじゃ希望は簡単には生まれないんだよ、思いが強い願いじゃないと能力は発動しないし、それにデメリットもあるんだよ、人々の願いから生まれる希望を使うってのはつまりその人の希望を失うことなんだよ。一度使えばその人の希望は戻らない、絶望する道しか無くなっちゃうんだよ」

「それなら俺の願いを使えばいい話じゃないのか？」

「うんうん、例え徹くんだけの希望を使っても足りないんだよ」

「…：…それだと俺…：…ここから助かる方法無くね？」

「大丈夫だよ徹くん！私はねこういうのを予測して姫ちゃんにちゃんと頼んでおいたんだよね！徹くんはさつき見たから知っていると思

うんだけどなあー」

「俺がさつき見た？」

自分は頭をかきながら思い出す。

白犬がこれを予測して姫神に頼んだ場面なんて……あったわ。

「まさか……『希望の願い』が使える条件がとつくに揃っていたのか？」

「正解！徹くんの中にはね、能力が発動できる希望があるんだよね！うんうん、姫ちゃんに世界をやり直すさいに希望を集めてもらったかいがあったよ」

「はあ……」

この人笑顔でなんかとんでもないこと言っているんだが……というかここまで予測できるなんて恐ろしいな。

「さてと……徹くん、そろそろ能力の発動、したほうがいいよ」

「え？それは一体どういう——」

『目を覚まして、とおさん!!』

「っ、友奈!？」

友奈の姿がないのに声が聞こえた。

「今あつちの方の徹くんはね、黒い霧を取り込みすぎて心の暴走を引き起こしているの、ここに居る徹くんは魂だけなんだよね」

「だったら早く戻らないと！白犬！」

「うん！ここから先は私もサポートするよ！」

白犬は近づくと手を胸に当ててきた。

「徹くん、これから私が質問するから強く思いながら答えて」

「分かった」

白犬は一息つき、口を開く。

「徹くんは今、どうしたいの？」

「簡単だ——」

「みんなを救うために戻る」

「なぜ？」

「決まっている——」

「それが、今俺の出来ることだからだ」

「その先に、どんな苦しみがあったとしても、徹くんは進み続けるの



？」

ああ、例えその先が地獄だとしても俺は――

「進み続けるさ」

「それは使命で決めたこと？」

違う、これは――

「使命なんて関係ない、これは自分の意思で決めたことだ！」

そう言った途端、自分の胸になにかを感じた。

暖かく、そして安心できるような感覚。それは全身に周り、力が沸き立つ。

「これが、『希望の願い』なのか？」

「うん、ちゃんと発動できたね、徹くん」

「白犬のお陰だ、ありがとな」

「うんうん、別にいいよ。私はただ徹くんの背中を押しただけなんだから。それに、我が子を助けるのは当然のことでしょ」

「ん？白犬、今聞き捨てならない言葉が聞こえ――」

「ほら徹くん、空を見てごらん！」

話をそらされた感覚がしたが、自分は気を取り直して空を見上げる。

空を見ると亀裂らしきものが出来ていて、そこから光が漏れている。そしてその亀裂はもうすぐ割れようとしていた。

「徹くん」

「ん？なんだ」

自分は白犬の方へ振り替える。

「ほんとは言いたいことが沢山あるけどこれだけはいわせて！…頑張ってね、徹くん！」

白犬は笑顔で言った。それと同時に空の亀裂は割れ、目を開けられないほど光が全てを飲み込んだ。

一体どれくらいたったかは分からないが、眩しい光はもう収まったのでどうでもいいことだった。

自分はゆっくりと目を開く。

ああ、自分は帰ってきたんだ。そしてみんなを傷つけずに済んだ。ぼろぼろのみんなにこんなことを言うのはどこか場違いの感じがするが、それでも自分はこの言葉を言わなければいけない。

「ただいま、みんな」

今自分ができるとびつきりな笑顔でそう言った。

## 第二十九話

### 長すぎる説教

『それで、貴様の暴走はもう大丈夫ということか?』

「ああそっだよ、色々と迷惑かけてしまったがもう暴走することはないと保証できるぜ」

『ふむ、貴様が言った言葉、信じさせて貰うぞ。貴様は我々にとっての最高戦力だからな』

「はいよ、それじゃあ俺はもう帰るぜ、遅くなるとみんなが心配しちゃうからな」

『そうか、ではこれからもよろしく頼むぞ』

自分は「はいはい」と後ろを振り返りながら言い、振り返った先にある出口へと足を進めた。なぜ自分は神樹と話しているのかと言うと、今回の暴走についてともう暴走しないと報告するためだ。

昨日は暴走が収まった後、一気に反動がきたのか意識を落としてしまい病院送りになってしまった。そして目を覚ませばみんなからのお説教をくらい、まだ物足りないのか今日もお説教があるらしい。まあそれだけみんなを心配させたってことだから仕方ない。

「あつ、兄さん、お帰りなさい」

「とおさんお帰り」

「おう、ただいま」

外で待っていた千景と友奈と合流し学校へと向かう。

「……なあ千景と友奈、ひとつ言いたいんだが……なんで俺の腕に抱きついてるんだ? すごく歩きにくいんだが」

右腕が友奈、左腕が千景ともう逃がさないと言わんばかりにがっつりと抱きついている。そのせいで歩きにくいのと同時にまあ……なんだ……胸が当たってるんだよなあ。

「兄さんがまたどっか行かないようにするための対策なんだから我慢して」

「そっだよとおさん! みんなを心配させた罰としてね!」

そう言われちゃうともう何も言えないな。これを若葉たちが見たらもう説教じゃすまないな。

「はあ…もうどうにでもなれ」

自分は何を言ってもダメそうなのであきらめることにした。

「それで、何か言うことはあるか、徹？」

「本当に申し訳ございませんでした！」

学校に着き、若葉たちと合流した際、若葉のこの一言から感じる圧に自分は察し、土下座をする。

「はあー、人を散々心配させておいて呑気なものだな、徹」

「はい…：…すみませんでした」

自分はなにも抵抗できないのでただ「はい」と「すみませんでした」としか言えなかった。

「いいか徹、お前は色々と背負いすぎだ。今回起きた暴走は私たちにも原因があったただがお前にも原因があるんだ。だいたいお前はいつもー」

そこからは溜まっていた鬱憤を晴らすかのように説教された。途中からなんか愚痴っていたがそれは聞き流しておいた。

だが気になるところはあった。どうやら若葉たちは姫神にあつたらしい。姫神は若葉たちを暴走した自分から避難させるためにあの空間に移動させ、そこから色々なことを話したらしい。どうやら自分がこれまでやってきたことも全てばらしたらしく、そこを聞かれたときは正直に答えた。

数字時間後ー

「ふう…おや？もうこんな時間か」

教室の窓からオレンジ色の光が入っていることから夕方だと分かる。

「今日はここまでにして明日、本題にいきましょうか、これにて解散」

そう言った若葉は上機嫌な表情をしながら教室から出ていった。

「…：…ずっと正座だったから…：…もう…足が…」

「二「すうーすうー」」

「とりあえず…：…次からはひなたを…連れてこないと…」

足が痺れて動けない自分とあまりの長さに寝てしまった友奈たち

は教室に放置され、自分は足が痺れているなか、次はひなたを絶対連  
れていくことを心の中で決意した。

## 第三十話 空島

「これからよろしくね、とおさんとぐんちゃん！」

「ああ、これからよろしくな友奈」

「……よろしく」

友奈は笑顔で言い握手した。

「……………なつかしい夢だな」

目が覚め、ポツリと言葉をこぼした。

あの夢は確か避難所で千景と歩いているときに迷子になってる女の子がいたから話しかけたらまさかの子供の頃の友奈と会ったんだっけ。あのあとちゃんと家族の元まで届けてあげて、そこから友奈に「友達になろう！」と言われて仲良くなったんだよな。

「ほんと、あの時は会えるとは思ってもいなかったよ」

とりあえず布団からでて着替えたあと朝食を作りに行った。

「それでは、これより第一回作戦会議を始めます」

場所は学校、昨日若葉の説教？によって本題に移れなかったため今日、司会のひなたが進行することになった。ここにいるのは自分を合わせた勇者たちと巫女のひなたがいる。

「今回の作戦会議は昨日突然現れた空島についてです」

空島か、昨日帰りに空にうっすらと見えたときは驚きだった。まあすぐに見えなくなっただから何かのみまちがいだと思っただけ。そして今日になってはつきりと見えるようになった。

「大社によるとあれは結界の外に出来たもので今は警戒する必要はないと言われていますが、これは仮定なので実際に勇者たちが見に行かなければいけません」

確かにひなたの言った通り、あの空島に実際に行かずに決めつける

のはおかしいからな、ちゃんと自分たち勇者が見に行かなければならない。だがあの空島に行くのはかなりの危険性があると自分は思う。きつと奴が、ツクヨミが関係しているに違いない。

「何か質問はありますか？」

そんなことを考えていると質問の時間に移っていた。

「はい」

「球子さん、どうぞ」

タマが席をたち口を開く。

「空島に行くのは分かったんだが、そこに行く移動手段はあるのか？」

「現時点では球子さんの精霊、輸入道で向かおうと考えています」

確かに今現時点であそこまで行くにはタマの切り札を使うしかない、だが問題がある。

「はい」

「杏さん、どうぞ」

タマは座り次は杏が立ち上がる。

「タマっち先輩の切り札で行くのは分かります、でも見た限りあの空島は相当高くなります、その分代償も軽くはないと思います」

そう、代償だ。遠くから見てもあの空島は高い所にあると分かっってしまうぐらい高い、だから空島に行こうとすれば相当な負荷がくる、でもそこは自分が代わりに受ければいいんだがみんなから反対されそうなんだよな、はあ、一体どうすれば『徹くん、ちよつといいかな』……は？

突然脳内に聞こえたため少し驚いたが、みんなにばれていないため、平然とした顔をし、自分の脳内から話しかける人に交信した。

『その声、白犬か？』

『そうだよ、一昨日ぶりだね徹くん』

その声の主は自分を助けてくれたアマテラスだった。

『こんなことも出来たのか』

『言ったじゃん、これから徹くんのサポートするって、それよりも徹くん、ここにいてみんなに言っしてほしいことがあるんだけどいいかな？とても重要なことなんだけど』

『重要なこと？分かった。みんなに伝えるから教えてくれ』

『うん、重要なことつてのは徹くんたちが向かおうとしている空島のことなんだけどー』

「分かりました。まだ時間もありますので大社のほうに他の移動手段がないか聞いておきます」

「ありがとうございます、ひなたさん」

杏はひなたに礼をし、席に座った。

「他に質問はありますか？」

「……………誰も挙手しないからそろそろまとめに移ったほうがいいかな。」

私は、正直に言うとして若葉ちゃんたちをあの空島には行かせたくはなかった。昨日うっすらと見えた空島からとてつもない力を遠くからでも感じ、そして今日になって一層強く感じていた。行かせたくはない、行けば絶対に無事ではすまないと思う。例え無事でも、徹先輩だけがみんなの前から本当に消えるかもしれない、そんなことはさせない私が何とかしないと、でも一体どうすれば…………

「ひなた、ちよつといいか」

「どうしました、徹さん？」

徹は席をたち、なにか最悪なことを知ってしまったような表情をし、そして口を開く。

「みんな聞いてくれ。明日、空島に向かうぞ」

……………えっ？

徹の発言にここにいる全員が呆然とした。

「なっ、どういうことだ徹!？」

先に我に返った若葉が徹に聞いた。

「あの空島が完成する前に早く阻止しないと、世界の終末が起こるぞ」

徹は冷静な口調で言った。



### 第三十一話

### 約束

高橋友奈

明るく元気な子で、みんなからのムードメーカーとされていた。彼女がいたからこそ千景は前に進むことが出来た。自分は彼女のようにみんなを笑顔にすることは出来ない、彼女のような正義の味方には絶対に届かなかった。

でも、そんな彼女の結末はどうしようもなかった。たった一人で戦い、苦しくても守るために戦い続けた。そして死んだ。でも今度はそうはさせない、絶対に死なせない、一人ではなくみんなで戦おう、そしてみんなで笑おう。

「徹、詳しく聞かせてくれ」

若葉の問に自分は答える。

「分かった。まずあの空島だがあれはただの空島じゃない、あれは儀式をするための会場みたいなものだ」

「儀式、会場？」

「ああ、その儀式は条件をみたした者しか発動しない、そして発動すれば世界を自分の好きなように書き換えることができるらしい、それができる場所がああ空島だ」

「明日空島に行くと言っていたが時間の猶予はあまりないということか？」

「……ああ」

「証拠は、と言いたいところだがあの空島がある時点でなにが正しいのか分からないから今は徹の言葉を信じよう」

若葉は一呼吸し、宣言した。

「では、明日の早朝から空島に突入する、異論はあるか？」

教室に静寂が訪れる、全員難しい顔をし黙りこむ、それを若葉は異論はないと受け取った。

「決定だな、明日の早朝までに全員覚悟を決めてきてくれ、ひなた、終わりにしてくれ」

「…分かりました。これで作戦会議を終わります」

こうして空島に行くのは明日の早朝と決まった。

そして時刻は夜に、自分は友奈と千景を連れて両親が入院している病院に来ていた。本来なら面会はだめだが、特別に許しが出ていた。しかし自分は遠慮し、千景だけ向かわせた。理由は両親に合わせる顔がないことだった。それが口に出さずに、今会ったらこの世界に悔いを残せないだろう？と適当な理由をつけて説得した。そして今は千景が帰ってくるまでの間、友奈と一緒に椅子に座って待っていた。

「ねえとおさん、ほんとにぐんちゃんと一緒に行かなくて良かったの？」

「いいんだよ、それにさっきも言ったが俺はこの世界でやり残したことを残さないとあつけなく消えるかもしれないからその保険だよ」

「そっか…：…ねえとおさん」

「ん、なんだ友奈？」

友奈のほうに振り向くと、いつもの明るい表情ではなく暗い表情をしており、声からも元気がないと感じた。

「空島のことなんだけど、本当のことを教えて、知っているんだよね、とおさん？」

…：…まさか友奈が最初に聞いてくるとは思わなかったな。確かに自分はある時みんなに儀式と言った。いや儀式は合ってはいるんだ、ただおおぎつぱに言ったから儀式の詳しいことをまだみんなに伝えていない、いやわざと伝えてないんだがさてどうするか…：…とりあえず嘘を言っとくか。

「何言ってるんだよ友奈、俺は知っていることを全部話したからもうなにも空島のこととは」とおさん、お願い「…：…分かったよ話すよ全部」  
もう誤魔化せないと分かった自分は全てを正直に話すことにした。

「あの空島は千年前に地下深くに封印されてたものでありヤマトに

とつての最強の武器でもあったんだ」

友奈はなにも言わずただ静かに聞いていた。

自分はそのまま話を続ける。

「あの空島を王はこう名付けた、『強欲の塊』てな、使えば神ですら止めることが出来ない使用者の欲望を叶えられる。そして叶える欲望の大きさはは上限がないからなんでも叶えられる」

「……………」

「…でもそれを使うには条件があつたんだ。一つは使用者が特別な力を持つていること、まあこれは俺の浄化する力を参考にしてくれ、二つ目は鍵となる剣を台座に刺さなくちゃいけない」

「…………その鍵となる剣って？」

「もちろん俺とツクヨミが持つ浄化の剣と勝利の剣のことだよ」

「じゃあツクヨミはそれを使ってー」

「つといたいのがそう簡単にはいかないんだよなあ、鍵となる剣の条件とかめんどくさいのもあるしそれに、叶えた後のこともあるし」

「それってどういうこと？」

「それはなーっと、そろそろここまでかな」

遠くのほうから千景が病室から出ているのを見えたため途中だが話を終わらせた。

「…………じゃあとおさん、最後にこれだけは聞かせて」

「ん？ああ、いいぜ」

「とおさんはどんなことがあつても絶対に私たちの元に帰ってきてくれる？」

「…………ああつと言いたいが正直に言うとなんか分からないな、どんなにみんなの元に戻りたいと思つても必ずではない、常に可能性は一方に傾くか均等に等しくなるかのどちらかだ…………でもな」

自分は立ち上がり友奈の頭をそつと手で撫でる。

「俺は色々やり残したことがまだまだ一杯あるんだ。例え消えたとしても戻ってくるさ、まあ時間はかかると思うけど、だからそんな暗くなるな友奈、お前にそれは似合わねえ、いつも見せてくれる明るい

笑顔が一番似合ってるぜ」

「ツ！……それはズルいよ、とおさん……よしっ！」

「うおっ!？」

突然友奈が立ち上げってきたため驚いてしまった。

「まだ聞いてないことはあるけどとおさんのさっきの言葉が聞けてだ  
いぶスツキリしたよ！」

「お、おう」

「この約束絶対に守ってねとおさん、絶対だよ！」

そう言い友奈は千景のほうへと走っていった。

……うーんまあ約束は約束だ、きっちり守るか。

それにしても、やっぱり友奈には笑顔が一番似合ってるな。

そんなことを思いながら自分も千景のほうへと歩いた。

### 第三十二話

#### みんなに知ってほしい

私はとおさんとぐんちゃんと一緒に遊んでいた記憶をまだ覚えている。あの避難所で迷子になっていた私に優しく道を教えてくれた時が初めての出会いだった。そして友達になったあと毎日疲れるまで遊んだ。色んなことをお話したり、鬼ごっこで走り回ったりもした。ほんとに毎日が楽しかった。こんな日々がずっと続けばよかったと思ったりもしていた。でも、私たちが勇者に選ばれたとき全てが変わった。私はとおさんが絶対に帰ってくるって信じてるから、帰ってきたらみんなと一緒に思い出を作ろ、ご飯を食べたり、遊んだりして忘れることのない最高の思い出作ろうよ、とおさん。

あれから病院を後にした自分たちは話ながらぶらぶらと夜道を歩き、そうしているうちに瀬戸大橋記念公園に着いていた。

「結局ここに来ちゃったな」

「えへへ、でもここから見る夜景がきれいだから別に来て無駄じゃないね」

「そうかもな」

そこから場所を移すために歩いた。

友奈が先頭で後の自分たちは後ろだったため自分は友奈に聞こえないような声量で千景に聞いた。

「ところで千景、結局どうだったんだ父さんと母さんは？」

「安心して兄さん、体調も良くなってるみたいで元気だった」

「ああ、まあそれも聞きたかったんだがなんか他になかったか？」

「…そんなに知りたいなら兄さんも行けば良かったのに」

「それは……すまん」

千景の言葉に自分は謝ることしか出来なかった。

「…冗談よ、別に隠すことでもないし、教えてあげるわ、でも次があったときは兄さんも一緒に行ってもらおうから」

「分かった。次は俺も一緒に行くから教えてくれ」

「約束よ、兄さん」

そこから千景の話聞いて驚くことがあった。

それは両親ともまるで別人になっっているかのように変わっていたらしい。どうやら病室に入ってきた千景を見た両親が突然泣き出し何度も謝ってきたらしい。これには千景も困惑したらしい。それもそうだが、自分もそこにいたら千景と同じく困惑するだろう。自分たちが知っている両親とはあまりにも違うからな。多分浄化の剣で斬ったからその時に心が浄化されたと考えられる。今思うと相当強いなこの剣。

「そこからはまあ色んなことを話して終わったわ」

「教えてくれてありがとな、千景」

「別にいいわ……そういえば兄さん、最後に兄さんに伝えてって伝言を頼まれてるの」

「んっ、なんだ？」

『『家族を守ってくれてありがとう』だって』

「っ!?!……そうか」

その言葉を両親からの口から聞いたら確実に自分は泣いているだろう、そして今だからこそ感じられる。自分は、家族を助けることが出来たそう感じた。

「……兄さん？」

「んっ? ああすまん、少し考え事しちゃってな」

「どんなこと考えてたの？」

「明日の戦い、絶対に負けてられないなって」

「…ええ、そうね。絶対に勝ちましょう兄さん」

お互いに笑顔でそう言った。

「おーい、とおさんにぐんちゃんー! こっちこっちー!」

遠くのほうから友奈が手を振っていた。

どうやら何かを見つけたのだろう、小走りで友奈のほうへと向かった。

「奇遇だな、こんな夜遅くに会おうとは」

「おーと徹たちもここに来たのか」

「ハロハロー徹君、久しぶりー」

浜辺に着くと、若葉たちがそこにいた。

これはもう偶然じゃなくて奇跡レベルだな、なんの打ち合わせもなしにこの浜辺に普通全員集まるか？若葉とタマと歌野はいつも通りだが、残りのひなたと杏と水都を見てみる、苦笑いしてるぞ。

「まさかここで会うとか誰も思わねーよ」

あまりの出来事に頭に手を当てる。

「まあまあ、別に減るものではないですしいいじゃないですか」

「そうは言ってもなあ」

ひなたの言葉に自分は何か言おうとしたが何を言っても無駄だと思っただけ口を閉じた。

「そうだ！ねえみんな！全員揃ってることだし、みんなで自己紹介しよー！」

「えっ？」

突然の友奈の発言に自分は少し困惑した。それは友奈以外の全員もそう思ったろう。

「あ、あの一なんでここで自己紹介するんですか？」

水都が友奈に質問をする。

「だって最初の頃のみんなは色々と自分のことを誤魔化してたでしょ、でも今はみんなの仲が良いから、本当の自分をみんなに知ってもらおうって！」

「なるほど、確かにそうですね」

友奈の発言に杏が納得する。

確かに最初の頃、自分はみんなに色々と隠していたからな、ここで全てをさらけ出すのも気持ちいが晴れるものだ。

「ならさっそくやるとするか、最初は私からいこう」

こうして全員の自己紹介が始まった。

今になって知ることが沢山あって驚いたりもしたが、それよりも知らないことを知れてとても良かったと自分は思った。

「さて、最後に徹、頼んだぞ」

そうしているうちに自分の番になっていた。

……よし、いくとしますか。

「俺は転生者であり勇者、郡徹。高知県出身。誕生日は二月三日。血液型はA型だ。趣味は……まあ本を読んだり訓練することかな。俺が勇者になるその前、小さい頃俺は千景を助けるために色々と行動してたよ、まあそのせいでダメな方向にいつちゃったけどそれでもなんとか千景を連れて逃げることに成功した。で、次はみんなを助けるために転生したときにもらった力で次々とみんなを救ったわけだ。まあアクシデントは沢山あったけどな」

まさかここまで話せるとは自分でも思ってもいなかったがそれでも自分は続けた。

そして自分の発言をただみんなは静かに聞いていた。

「でもな、実際そう簡単には行かないものだ。俺はみんなを助けると同時に失ったものもあった。その中で一番大きかったのが左腕を失ったことかな、俺は諏訪のみんなを救うために神樹に頼み左腕を捧げた。まあ神樹も良心はあったんだろ、代わりに義手を付けてもらったよ。まじで人の腕そっくりだから忘れそうになったがな。それで次は片目の視力を奪われたことだな、まあこれは力でカバーしてるから問題ないけどな。結構いろいろなことがあったけど俺は諦めないと誓った。絶対に明日の戦いは勝つてやる、勝たなくちゃいけないだ……こんなもんかな、ありがとな俺の話聞いてくれて」

結構スッキリするもんだな、というかよくこんなに溜めてたな自分。

「いや、こちらからもお礼を言いたい、ありがとう徹、この話を聞けて良かったよ」

「そうか」

若葉の目が少し充血してるのは多分涙を拭くために目を擦りすぎたのだろうと思うがあえて自分は触れないでおいた。他のみんなはまだ涙が止まらない感じだがな。これは落ち着くまで少し待った方がいいな。



## 数分後

「さて、そろそろ帰るとするか」

色々とおつたが、みんなはなんとか落ち着き、明日の戦いに支障が出ないよう帰ることになった。

「そうだ、最後にみなさんこれをどうぞ」

そんなとき、ひなたは持っていた袋から何かを取り出し、みんなに渡していった。

「これは…お守りか、しかも手作りか？」

「はい、私が作りました。みんなが無事に帰ってくることを思っ作りしました」

「私は別にこの防衛なんだけどなあー、まあ意味は同じだからいいか」

そう言い微笑む歌野。

「さてと、ひなた特製のお守りももらったことだし明日の戦い、絶対に勝たなくちやな」

自分の言葉に全員頷く。

待ってるよツクヨミ、てめえがやろうとしてることを絶対に阻止してやる。そしてこの手でてめえの悪夢を終わらせてやるよ。

### 第三十三話

### 正義と正義の戦い

「……きて」

声が聞こえる。

「……くん、起きてー！」

誰だか分からないがどこか聞き覚えのある声だ。

「徹君！」

その声には自分は目を覚ました。

「……なんだ、白犬か」

目を覚ますと仰向けに倒れている自分を上から覗いているアマテラスもとい白犬の姿がそこにあつた。

「良かったあく、もうこのまま一生起きないかと思つたよ」

そう言い、アマテラスは安堵の息をつく。

「あつそ、それよりもここはどこなんだ？まあ白犬の姿が見えるってことはまた俺が暴走を起こして魂だけが白犬の世界に来たつてことかな」

もしそうだったとしたらもうどうしようもないな、絶対死よりも恐ろしい目に遭うな。

「安心して徹君、今回は徹君は暴走してないよ、ここは現実、私の姿が見えるのはこの場所が特殊なだけだから。というか私こんななものない場所なんて作らないからね！」

「それもそうか」

体を起こし辺りを見渡すと薄暗い目視したのはいくつもの柱でそれが並んでずっと奥に続いていた。

確かにこんな柱しかない場所なんて合わないもんな。

「だったらここはどこなんだよって話になるが……俺の予想が正しいとなる」と

自分は後ろに振り返り、扉から来ている光を目印として歩いた。そして、扉を抜けた先に見えた光景を見て自分の予想は確信に変わった。それと同時に忘れていた記憶、ここに来る前の出来事を思い出し

た。

「なるほどな、それじゃあ俺が一番に着いたってことだな。こんな大きな神殿ある場所なんてここしかないもんな、ここ空島しかな」

ここに来る前の出来事――

昨日の出来事から今日の早朝、自分たちは瀬戸大橋記念公園の結界前に立っていた。

「さて、みんな準備は出来たか？」

若葉の言葉に自分たちは頷く。

「絶対にみんな生きて帰りましょうね」

「安心しろ杏、こういう時こそタマに任せタマえってな、タマがみんなの命を守ってやる」

「ふっ、それはとても頼もしいな」

「ねーねーみんな！行く前に円陣組もうよ！」

「そうだな、これが最後の戦いだから気合いを入れなければならないからな、やるとしよう」

友奈の提案に全員賛成し、円陣を組んだ。

「そういえば合図の言葉は何にするんだ友奈？」

「それはもう『かんばろう！おー!!』でしょ！」

いかにも友奈らしい合図に自分は少し笑ってしまう。

「それじゃあいくよー！がんばろう!!」

「！！！！おー！！！！！！」

気合いも入れ、いざ結界の外に出ようと歩き始めた。

そして、自分が結界を踏んだその時だった。

「なっ!?!」

突然巨大な手が結界から飛び出してきた。自分はそれに反応しようとするも遅れてしまい呆気なく捕まれてしまった。そしてそのまま結界の外に引きずり出され、そこで自分は意識を落とした。

そして現在――

「たく、まさかこんなことになるなんて分かるわけねーよ」

「はあ、これじゃあせつかくたてた計画が無駄になっちゃったな。」

「それにしても高すぎだろ、落ちたら絶対死ぬぞこれ。」

「徹君後ろー!」

「なにっ!?!」

突然のアマテラスの言葉に瞬時に反応し、武器を構えながら振り向くも後ろには誰もいずその代わりに先程来た方向の暗闇が無くなり道が出来ていた。

「……ちっ、こつちにこいつてか」

「この道に沿っていけば儀式をする場所に着くかもしれない、多分」

「多分?」

「ごめんね、初めて来たときは色々事情があつてどこに行けばいいかわれちゃったんだよ」

「事情で…まあいいや、今はこの道を進むしかない、行くぞ」

「そう言い自分は新たに出来た道をアマテラスと共に進んでいった。」

「そういうえば白犬、一つ聞いていいか?」

進む中、一つ気になることがあつたため白犬に聞いた。

「ん、どうしたの?」

「いやちよつとな、今若葉たちがどうなってるか気になつてな、空島から確認しようとしても高すぎて見えないし」

「本当ならみんなが来るまで待つてようかと思つていたが、相当な時間がかかると思うため先に行くことにした。」

「えつとね、そのことなんだけど私も分からないの、あの時徹君が意識を落とした時私も意識を落としちゃつたの、本来は徹君が落ちても私は平気なんだけど」

「下の様子は分からずか」

「多分原因はあの巨大な手だな、あれがなんなのか分からないが十分危険だと分かるな。」

「とっ、どうやら着いたみたいだな」

「進んでいく内を開けた場所に出た。」

そこはとても広い円型で上から来る光によってくつきりと見える空間になっていた。

そして、その奥には台座らしきものが見えるが、その道を阻むものが一人真ん中に立っていた。その人物は自分、そしてアマテラスがよく知る人だった。

「よお、久しぶりだなツクヨミ」

「……やつと来たか、郡徹」

その男、ツクヨミはゆっくりと顔を上げ、光なき目で自分とアマテラスを見た。

「やはり、俺の予想は正しかったか、久しぶりの再会だなアマテラス」  
「ええ、久しぶりだねツクヨミ、単刀直入に聞くけど、あなたが徹君をここまで連れてこさせたの？」

「ああ、その通りだ。この戦いに邪魔が入らないよう郡徹だけをここに連れていき後の者は下で戦ってもらっている」

「そう……ねえ、あなたが今しようとしていることはどうしてもやらなくちやいけないことなの？」

「ああ、これは俺がやらなくてはいけないことであり使命でもあるからな、話し合いで解決は不可能だと思え」

「ッ！」

アマテラスは顔をうつむき体を震わせた。

今の彼女から感じる感情は自分のせいで彼を絶望に落としてしまった悲しみ、それとも怒りか、それは本人しか分からない。

「下がつとけ白犬、最初つからツクヨミに話し合いなんて通じるわけないだろ」

そう言い自分はアマテラスの前に出る。

決まっていたことなんだ、はなつから話し合いなんてあるわけないことを。

「さて、構えろツクヨミ」

自分は浄化の剣を持ち構える。

「ふつ、そうだな、この戦いで終いにしようか」

ツクヨミも勝利の剣を持ち同じく構える。

「……………」

空間に静寂が訪れる。

アマテラスは言われた通り安全な場所まで下がりこれから起こる戦いを静かに見ていた。

そして――

「うおおおおお!!」

開幕の走りだしは同時だった。二人が走ることにより距離が縮まるのも早い、お互いの攻撃範囲内に入った瞬間、ほぼ同時に振るい刃がクロスに交わり鈍い金属音を空間に響かせた。

### 第三十四話

#### たった一人を救うために

徹が空島に連れてかれた後の地上では最悪な事態が起こっていた。  
「嘘だろ……いくらなんでも多すぎるだろ」

その光景を見たタマは震え声で言った。タマ以外のみんなも声に出していないがタマと同じ事を思っているだろう。辺りを埋め尽くすほどのバーテックス、そして進化体がこちらへと向かってくる光景を見て冷静でいられるはずがない、たくさんの絶望が押し寄せてくる光景にただ呆然と見ていた。

「奴らも全戦力を投入してきたか…なら好都合、全て倒すだけだ」

しかし、若葉はその光景を見ても恐れず逆に好都合だと発した。

「…ええ、そうね。私たちのやることは変わらないわ」

「そうだね、ここで戦わないと私たちの大切な場所が壊されるからね、それにおさんにこれ以上苦しませないためにも！」

「…そうですね、これは私たちしかできないことですからしつかりとやり遂げないとですね」

「そうだな。さっきはあんな弱気な発言をしてしまったがそんなのタマには似合わないな！みんなを守るのはこのタマに任せタマえ!!」

若葉の発言に続いてそれぞれ発言する。

さきほどもで絶望していた少女らが嘘のように立ち向かっていることに疑問を感じるだろう。この絶望がもつと前に来ていたのなら呆気なく負けていた。だが、今は違う、今までの苦難を仲間と共に乗り越え成長してきたこそ立ち向かえることが出来た。

「よし、行くぞー！」

若葉の合図と共に歩を進めようとした時だった。

「っ、なんだ!?!」

突然どこからか爆発音が聞こえた。

「みなさん、あれを見てくださいー！」

杏が指した方向、上空を見ると空島から煙が上がっているのが微かに見えた。

「大方、あちらも始まったようだな、空島は徹に任せ地上は我々で対応

するぞー！」

若葉の言葉に皆は頷き、こちらに来る奴らとの戦闘に集中した。

一方、空島では……

「はあ、はあ……」

「徹君、大丈夫!？」

「ああ、まだ平気だ」

膝をついている自分に声をかけるアマテラスに平気と返す。少し負傷はしているがまだまだ行ける。

「それよりも白犬、あれはなんなんだ？」

「ごめんね、私もあれは初めて見たの」

まじかよ、ちくしょう、これが分からねえとめちやくちや苦戦するぞ。

「これで終わりか、郡徹」

「ちっ！まだ行けるっての！」

煙の奥から出てくるツクヨミに自分は立ち上がり構える。今のツクヨミは結構厄介だ。原因は奴を困うように浮いている十二本の剣だ。まさかたった一本の剣であそこまでの威力があるとは思ってもしなかった。あの時ツクヨミと鏖迫り合いをしたとき突然嫌な予感がしたため奴の剣を受け流し後ろに下がった瞬間一本の剣が向かってきたためそれを弾き刺さった瞬間にあの爆発的な威力とききた。

「徹君、私も戦うよ」

そう言いアマテラスは小さな光の球へと変化し自分の体に入り込んだ。それにより力がさらに強く出せる。

「よし、それじゃあ再開だツクヨミー！」

足に力を込めツクヨミの方へと一直線に飛び出す。

「ただ一直線に来るか、無謀だな」

ツクヨミは十二本の剣の剣先を一直線に来る自分に向け射出した。

「借りるぞー!!」



自分は若葉たち、そして歌野が持つ武器を召喚し射出する。

あれの完全な対処は不可能だが多少の対処は可能だ。射出した武器がぶつかった瞬間爆発が起こり残りの六本は回避する。

「くらええ!!」

「くっ、貴様!」

またしても罅迫り合いが起きるが今度はこっちが有利だ。

「なめるな!」

このまま押し出そうとするがツクヨミの蹴りが無防備な腹に当たり後ろに飛ばされてしまう。飛ばされてしまう際また若葉たちの武器を召喚し射出するがツクヨミの剣の大振りで弾かれてしまった。

「まだまだあ!!」

だがこれで終わりじゃない、すぐさま体制を立て直し同じように一直線に飛び出し追撃をする。

どうやらツクヨミのあれは射出した後クールタイムがあるらしくすぐに射出することは出来ない。だが自分はクールタイムなく射出、召喚ができる。だからそこを狙う。

「くっ!!?なめるなああ!!」

焦りが見え始めたツクヨミの攻撃をかわしさらに追撃する。時には刀、時には弓など様々な武器に変え攻撃する。与えるダメージは小さいけどそれが多ければ多いほど大きなダメージとなる。

「これで、どうだ!!」

そして最後に浄化の剣を振るう。

「ぐっ!」

剣の一振りはツクヨミの横腹をえぐりそこから血が大量に出血した。それによりツクヨミは出血した部分を手で抑え膝をついた。

「終わりだ、ツクヨミ」

そう言い自分は剣先をツクヨミの頭に向ける。

「これでお前の下らない野望は終わりだ」

「まだまだ…まだ終わりではないぞ!!諦めてたまるか、俺があいつを助けたいがためにどれだけ費やしたのか!どれだけ絶望した!どれだけ多くの人を、感情を失ったのか!貴様に分かるはずもないだろう

!!

「ああ、分からねえよ、お前がどれだけの時間を費やし、そして失ったのかも俺には分からない、だがなこれだけは言える、お前は道を踏み間違えたんだよ、お前がアマテラスを生き返らそうとした時からな」  
「黙れ：黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れえ!!」

ツクヨミは否定するように叫び、睨む。

「俺はやり遂げて見せる！それが例え、自身を犠牲にしようとしてもだ!!」

「っ!?!」

突然ツクヨミから先程までとは違うとてつもない力が感じた。

『徹君！彼を早く止めて!!』

アマテラスも嫌な予感がしたのか、急ぐように急かしてきた。それには自分も同じなため躊躇せず剣を振るう。

しかしあと一步のところまでツクヨミの召喚した剣が降ってきたため後ろに避けた。

「ちっ！嫌な予感の正体はこれか」

「ああああアアアア!!」

ツクヨミから感じた嫌な予感の正体、それは全身の傷口から溢れ出てくる黒い煙のようなものだ。

「コロ…ス…ジャマスル…モノハ…スベテ!!」

「なっ!?!」

『やめてえええ!!』

アマテラスが叫ぶ中、自分は驚愕した。なんせ持っている勝利の剣をツクヨミはあろうことか自身に刺したからだ。唐突な自殺行為に呆然としてしまうが次の出来事により強制的に我に帰った。

「アアアアアアア!!」

ツクヨミが突き刺した剣は体に取り込まれ大きく空いた傷口から大量の黒い煙のようなものが溢れ出て、出てきた黒い煙は彼を中心に包み込むように竜巻を作り出した。

「くそっ、何が起こっているんだ!」

『うそでしょ…まさか…強制的に?』

「白犬！知ってるのか！」

アマテラスの言葉に自分は追求する。

だが、それと同時にツクヨミを包んだ竜巻は収まり、姿を表した。  
「…まじかよ」

ツクヨミの姿を見て驚く自分。無理もないだろう、今のツクヨミの姿は変わりすぎていたのだから。奴の今の姿は異形としか言えなかった。背中から出る十二本の触手に剣を持たせており、右腕が鞘と一体化して、両足は人ではない足をしていた。

『……暴走』

「暴走？！どういうことだ!?!」

『本来あれには手順があるんだけど、彼はその過程を強制的に省いて力を得たの、でもその代償として理性を失っただ己の欲望のままに暴れる』

「それってつまり……」

『さっきまでの優勢が嘘のように劣勢になったってことだね』

その言葉に自分はため息をつき、その後覚悟を決めて剣を構えた。

## 第三十五話

### 反撃開始

一体どれぐらい経ったのだろうか、自分の体は傷だらけで血だまりができるぐらいに出血している。

「くっ……そがあ……」

立ち上がろうとしても出血のしすぎで立つことすら難しい、それに呼吸も上手くできず声が掠れてしまっている。

あの時、防御に全力を注いでなかったらこれぐらいじゃすまなかった。最悪死んでいたのかもしれない。

『大丈夫、徹君?』

「ああ……なん……とかな……そっちは……」

『平気平気、まだまだ行けるよ』

余裕そうに言ってるが実際かなりの負荷がかかっているため無理をしていることがだいたい分かる。

「ふうー……」

息を整え集中する。奴がどこにいるのか分からない、だから奴の音、息、気配を頼りにして探します。

数秒後。奴の居場所が分かった。奴が今いるのは――

「上かつ!」

視線を上に向けると同時に剣を振るう、視線の先には暴走しているツクヨミの姿があり、奴の剣は自分の首を狙っていたが、ちょうど自分が振るった剣に当たり金属と金属がぶつかる音が響く。

「■■■■■■■■■■!!!」

「なめんなああああ!!」

ツクヨミの威圧に負けじと自分も叫んだ。

地上では――

「はあっ!」

若葉の一閃で次々とバーテックスは斬られていく。倒した数はとつくのとうに3桁はいつているが一向に攻めてくる量は減る気配がない。

「くっ、これ以上は体力が持つかわからないな」

弱音を吐く若葉だが実際訓練で鍛えた体力があつたとしても激しい動きが数時間も続けば次第に体力も底を付く、それは若葉だけではなくみんなも同じだ。

「若葉ちゃん危ない！」

「っ!？」

友奈の警告で目の前に迫ってくるバーテックスに気づき避けようとするも反応が少し遅れ体当たりをもらにくらってしまった。

「ぐはっ！」

「若葉ちゃん！」

若葉の元に駆け寄る友奈。

「大丈夫、若葉ちゃん？」

「問題ない、少し不意をつかれただけだ」

そう言い若葉は立ち上がる。

「若葉ちゃん、足が」

「問題ない、まだ動ける」

友奈は若葉の足がふらついていることに気付き言ったが若葉は気にするなと言った。

「若葉さん、友奈さん！」

そんなとき杏と球子、千景と合流した。

「どうしたのあんちゃん？」

「このままだとまずくなると思ったので戦線を下げました。同時に若葉さんの安否の確認を」

「心配かけてすまない、でも大丈夫だまだ行ける。それよりも杏、今の戦況をどう思うか？」

「正直に言いますとここを突破されるのは時間の問題だと思います。私たちの体力が削られていく一方敵側の数は変わらず。なにか案を考えないと厳しい一方です」

杏は難しい顔をしてそう言った。その発言にはみんな同感していた。

「くっ……一体どうしたら……」

そう言った時だった。

「いえ、その心配はありませんよ」

「「「っ!」」」

若葉たちは声がしたほうに振りく、そこにいたのは暴走した徹を救出する際に手助けしてくれた姫神の姿がそこにあった。

「なぜあなたがここに? あなたは確か大事な用事があるところ」

「お話は後で話します。とりあえずみなさんこれを」

若葉の発言を遮り、姫神は発しながら手を差し出す。差し出した瞬間、若葉の目の前にスマホが突然現れた。スマホを手に取り画面を見ると『解放』とかかれたボタンが写っていた。それを見た若葉はみんなの方へと視線を変える。みんなも若葉と同じでスマホの画面を確認した後、若葉を見てコクリツ、と覚悟を決めたようにみんなは頷いた。

みんなの了承を確認した若葉は姫神の方へと振り返り質問をする。

「これで、みんなを救えるのか?」

その問いに姫神は――

「はい」

と、答えた。

「そうか……それなら……行かせてもらおうぞ!」

そう言い若葉はボタンを押した。みんなも若葉に続いて押す。ボタンを押すとスマホの画面から光が溢れだし、その光は若葉を包み込んだ。

疲れきっていた体が徐々に回復すると共に力が沸いてくる感覚がした。そして、体が完全に回復したときには包んでいた光は消え視界が晴れた。

「これは?」

若葉は背中に何かが付いているのを感じ、見える程度に見ると若葉の背中に天狗のような黒い大きな翼が付いていた。他のみんなも姿

が変わっており、友奈は赤い角と巨大な手甲を千景は大鎌の刀身が深紅に染まり、球子は旋刃盤に炎が宿り杏は逆に金弓箭に氷が宿った。「みなさんの力を最大限に出せるよう私の力をみなさんに分け与えたいんです。私の力なので体に影響はありませんし、穢れも出ませんのでご安心ください」

姫神は若葉たちに説明する。

「すごい！さっきまでヘトヘトだったのに一瞬で疲れがなくなったよ！」

「うおー！！タマはまだまだ行けるぞー！！」

「この力があれば勝機があります！」

「ええ、形勢逆転ってどこかしら」

友奈、球子、杏、千景は与えてくれた力を手に取り戦う意思を見せた。

「ありがとうございます、姫神さんのお陰で私たちはまだ戦えます」

「いいえ、礼を言うのは私ではなく徹さんにいってあげてください」

「？…それは一体？」

「それも後で話しますので、今は戦闘に集中を」

姫神が言ったことに疑問を持つ若葉だが、今は戦闘に集中するべきと姫神に言われたので後で話を聞こうと心の中に留め、友奈たちの元へと向かった。

「……徹さん、彼女たちのことは私が全力で支えます。ですのでどうかご無事で……」

空島へ視線を向け姫神は徹の無事を祈るように言った。

そして最初に戻る。

「■■■■■■！！」

「ちっ、多少は奴の動きは慣れてきたが休む暇がねえ」

暴走したツクヨミの攻撃は力も強く早いがその分単純だと分かった今防御は完璧だ。だがそれは続かない、ツクヨミの攻撃は隙がなく息を吸うにもその機会を奴は与えてくれない。

『徹くん、このままだと時間が!』

「分かつてる!」

アマテラスの言ってることは正しい、このまま続けばこちらが持たない、暴走したツクヨミを早く倒さなければ。それを出来る方法はたったひとつ、そのためにも時間を作らないと。

「一か八かだ! 白犬、あれをやるから少し時間を稼いでくれ!」

『えっ!? あれって、そんなことしたら徹くんは——』

「早く!!」

『…分かった。無茶はしないでね』

「…ああ、分かつてる」

そう言うと自分の体から光の玉が出てきた。そして、光の玉は一瞬だけ発光するとアマテラスの姿になった。

「■■■■■■■■■■!!」

「させない!」

徹の方へと突っ込んでくるツクヨミをアマテラスは自身の力で作った光の壁で対抗する。

アマテラスがツクヨミの相手をしている今がチャンス、そう思い自分はずっとひとつの方法であるあれを実行した。

それは昨晚の事である——

明日に備えて早く寝ようと自室のベッドに腰を下ろしたとき、少し気になることがあったためアマテラスに聞いてみた。

『鍵となる剣について詳しく聞きたい?』

「ああ、確か段階があるって言っていたが、どれくらいあるんだ?」

『うーん、今の徹君とツクヨミの剣はどっちも三段階中二段階ってところかな』

「ツクヨミも俺と同じ二段階? 奴は俺よりも剣のことは知っているだけろ?」

『えっと……言いにくいけど、私とツクヨミはそれを知っているだけ』



で、方法は二段階しか分からないんだよ』

「まじかよ、二人とも知らないって…」

まさかの二人とも知らないという事実呆れる自分。

……ん？ということは…

「ツクヨミは見つけたのか、剣を三段階目にする方法を」

『うーん、それはないと思うよ。多分だけであれをするんだと思うよ』

「あれ？どういうことだ？」

『えつとね、私が前にやったことなんだけど、それをやるとね剣を三段階目にする事が出来るんだよ』

「おい、さつきと言ってる事が矛盾してねえか？」

『確かに矛盾してると思うけどね…この方法は正規のやり方じゃないんだよ』

「ということは白犬とツクヨミは正規のやり方は知らないけど裏技できなやり方は知ってるってことか？」

『そうだね』

なるほど…ならもしものためにあれのやり方は教えてもらおう。

「じゃあその裏技を教えてくださいませんか、もしもの保険のために」

『別にいいけど、でもこれはもうどうしようもないときに使うんだよ、裏技は負荷がすごいから一瞬でも気を抜いたら即暴走しちゃうから』

「分かった、善処する」

『ならよし！じゃあ教えるね、裏技のやり方はね——』

「剣を自分自身の体に取り込むことだ!!」

自分は浄化の剣を自身に向け、心臓の部分に狙いを定め、そして浄化の剣を心臓へと突き刺した。

「ぐっ!!」

やべえ…一瞬でも気を抜いたらまじで意識を失う。その場合自分はツクヨミと同じ暴走状態になってしまう。でも、ツクヨミにはなくて自分にはある能力がある。

「全ての希望をもって命ずる、俺に絶対的な勝利の栄光を!!」

『希望の願い』でブーストをして意識を保たせ安定させる。

体全体から光は溢れだし剣は完全に体に取り込み体の奥底から溢れんばかり力が湧き出て全身を巡る。

「もつとだ……もつと……もつと力をおおお!!!」

そう叫びながら全ての力を解放し、自分を中心とした一本の光の柱を作り出した。

「■■■■■■!?!」

「くう……徹君!!」

光の柱を見たツクヨミは後ろへと下がり警戒する。アマテラスは光の柱からくる風圧に耐えながら徹の名を呼んだ。

光の柱は勢いを失い消え、眩しさは無くなった。アマテラスの視界が晴れると先程光の柱が出たところから人影が見える。アマテラスは少し身構えるが、姿を見た瞬間身構えるのをやめた。

「……後は頼んだよ、徹君!!」

そしてアマテラスはそう言い操作していた武器を返した。

「ああ、後は俺に任せろ」

自分はそう言い前が出る。

今の姿は黒のラインが入っている白色の戦装束を着ており、髪色は黒から白へと変わり、目の色は光を灯す黄色になっていた。

「■■■■■■……■■■■■■!!!」

ツクヨミは威嚇するかのように咆哮する。

「来いよツクヨミ、決着をつけようぜ」

若葉たちの武器を空中に出現させながら自分は言った。

## 第三十六話

## 決着

「■■■■■■■■!!」

最初に動いたのはツクヨミだった。奴の十二本の触手は真っ直ぐに自分の方へと飛んできた。

先程まではこの攻撃はどうしようもなくただ避けるのみだったがもうその必要は無くなった。

「行け」

その合図と共に空中に止まっていた若葉たちの武器は向かってくる触手に向けて射出された。射出された若葉たちの武器は先程とは段違いに強い、その上速さも上がっている。

「■■■■■■■■!?!」

そのため触手が自分に届く前にツクヨミの体を貫いた。これにはツクヨミは驚いた様子だがすぐに貫いた部分から黒い霧が出て傷口を塞ぎ再生した。

「再生か…厄介だがずっとは続かねえだろ？」

自分は今度はツクヨミの真上に出現させ射出する。それをツクヨミは反応出来ず喰らうもすぐにまた黒い霧によって再生しようとする。

「させねえよ!」

自分は一瞬でツクヨミに詰め友奈の手甲を召還する。

「借りるぜ『酒呑童子』!!」

そう言った瞬間、手甲は巨大化し頭から二本の鬼の角が生えた。そして勢いよくアップラーをしツクヨミを空中に上げる。

「まだまだあ!!」

『酒呑童子』を解除し、今度は杏の金弓箭を召還する。

『雪女郎』『輪入道』!!」

金弓箭に雪を纏わせ数発喰らわせ、すぐに解除したのち球子の旋刃盤を召還し炎を纏わせ投げる。

『七人御先』!!」

更に追撃を加えるため次は千景の大葉刈を召還し精霊の力で自分

を七人に分身させそれぞれ斬りかかせたのち最後に壁へとぶん投げ大きな音と共に土煙を出した。

「すごい……これが、剣を最大に引き出した力なの……」

それを見ていたアマテラスは驚きの声を出す。

さつきまでこちらが不利だったのにも関わらず剣の力を最大に出した瞬間一気にこちらが有利になった。その光景にアマテラスは手を出さずにただじっと見続けた。

「さてと、これだけ攻撃したんだ、ここらへんで成果が出てくることを願うよ」

『七人御先』を解除し、大葉刈から若葉の生太刀に切り替え、構えながら自分は言う。すると土煙の中からツクヨミが黒い霧を纏わせながら出てきた。自分は失敗かと思ったがよく見るとふらついており触手の本数が減っていることが分かる。

「■■■ク■■、■■■ガ■■■ア■■■」

そして僅かではあるが言葉を発している、なら次の攻撃で決着がつかなくと自分は確信した。

「行くぞツクヨミ、この攻撃で終わらせてやるよ。来い『大天狗』」

『大天狗』の力により背中から黒く大きな翼が生える。

「■■■ギ■■■ア■■■あ■■■アアアああア!!!」

ツクヨミも全ての力を出したのか、触手をなん倍も増やし自分に向けた。

「■■■キ■■■え■■■口■■■オ■■■お■■■おおお!!」

「なめんなあ!!」

そして自分が走り出したと同時にツクヨミも触手を放った。視界を埋め尽くすほどの触手を翼から出る最大の風圧で消し飛ばすもすぐにまた触手が埋め尽くす。また消し飛ばそうとするも触手が迫ってきたため翼を使って空中に飛び回り迫ってくる触手を避ける。だが避け続けていても埒が明かないためツクヨミの方へと突っ込むタイミングを避けながら見る。

「……………だー!」

触手が一斉に来た瞬間、ツクヨミの方へと一気に加速する。触手と

触手の間をくぐり抜け徐々にツクヨミとの距離を縮める。

「■■■■シ■■■■ネ■■■■エ■■■■え■■■■え■■■■!!!」

「やらせるかあああ!!」

ツクヨミは迎え撃とうと片手に黒い霧を集め放つところを自分は生太刀を投げて阻止する。

「終わりだああああ!!!」

生太刀を投げたことにより『大天狗』の力が解除されるがツクヨミとの距離はあと一步、攻撃するば終わる。自分は生太刀を手元に再召還し力を振り絞るような声を挙げながら刀を振り下ろした。

「……違う」

「なっ!?!」

終わったと確信し刃がツクヨミの体の当たる直前、生太刀が弾き飛ばされてしまった。奴め、片方の手をわざと見せびらかしてもう片方の手で黒い霧を集め生太刀を弾き飛ばしやがった。

「俺の、勝ちだ!」

ツクヨミは黒い霧で剣を作り、突き刺そうと剣先を突きだしてくる。奴はここで勝利を確信したと思うが、残念だがツクヨミお前は一つ見落としている。そのたった一つの見落としが敗因だ。

「っ!!」

アマテラスは目を見開いた。二人の体が合わさったとき決着がついたと確信した。静寂が訪れた空間の中勝利したのは――

「……………ふーなぜた…なぜ…お前がそれを…」

口から血を出しながらツクヨミは聞いてくる。

「…ああこれのことか、過去の白犬からの贈り物だ」

その問いに自分は素っ気なく返す。

自分はツクヨミの剣は当たっておらず、ツクヨミはある武器が心臓を突き刺していた。そのある武器とは――

「嘘、あれって、黒くなる前の浄化の剣!?!」

アマテラスが答えを言う。そう、ある武器とは黒くなる前の白色の浄化の剣のことだった。

「なるほど……剣の三段階目は…剣の力を制御する…ことだったのか

…」

「ああそうだ。そしてお前の命の源である負の感情、穢れを全て浄化した。もうすぐお前は消える」

自分は突き刺していた浄化の剣を引き抜く、引き抜いたことによりツクヨミは仰向けに倒れようとする。自分は仰向けに倒れようとするツクヨミを支え、ゆつくりと下ろした。

「ツクヨミ…」

アマテラスがツクヨミに近づき、膝座りをしてツクヨミの手を両手で包んだ。

「ごめんね、私のせいで…貴方を苦しませてしまつて」

「…いや…お前のせいじゃない…全部俺のせいだ…お前が苦しんでいることに気づかなかつた自分が悪かつたんだ。許してくれ」

「うん、いいよ。貴方は良くやつたよ、だから…もう休んでいいんだよ」

涙を流し、優しく語りかけるように言うアマテラス。

「そうか…どうやらそろそろ時間らしいな」

ツクヨミがそう言うのとツクヨミの足が徐々に砂のようにさらさらと消え始めた。

「徹、最後にお前に伝えたいことがあるが、いいか？」

「ああ、別に問題ない」

「そうか…俺が伝いたいこと、それは『自分が切り開いた道は自分で終わらせろ』いいな？」

「ああ、任せろ。ちゃんと終わらせてくるから。だから先に行つてくれ」

「それを聞いて安心したよ。お言葉に甘えて先に行つてるぞ、また会おう、徹」

「ああ、アマテラスと一緒に待つてくれ」

「そうさせてもらうよ。終わらせてこい、徹」

「じゃあね徹君、応援してるから！」

「はいよ」

微笑みながら言う自分にツクヨミとアマテラスは安心しきつた顔

をし最後に笑みを浮かべて二人は消えた。

「さてと、俺も終わらすか」

もうここには自分しかいない、自分は剣を刺す台座へと歩く。静かなため足音の一步一步が大きく聞こえる。それと同時に段々と体に力が入らなくなってきている。

「もう俺も持たなくなってきたな…だけど、まだ最後に一つやることやんなくちやな」

そんなことを言っていると台座の目の前まできた。途中から足を引きずっていたが、なんとか着いたことに少しほっとする。

「ふうー……」

息を整え、手に持っている浄化の剣を両手で掴んで台座に刺す構えを取る。

「ふんー」

覚悟を決め剣を台座に突き刺した。突き刺した瞬間そこから爆発したかのように力が噴き出した。力はあまりにも強く体に激痛が走り続ける。それでも自分は剣を離さずに耐え続ける。

「く、そがああ!!」

あまりのキツさに愚痴を溢す。早く願いを言わないと。そう思い口を開こうとしたとき。

「っ?!目がー」

突然目が火傷するような熱が現れた。そしてその熱と共に視界が変わり始めた。

見えた光景は樹海だった。だが自分が知っている樹海とはどこか雰囲気が違うような感覚がする。見渡していると一人の少年を見つけた。その少年は背を向けているため顔は見えないが着ている服が戦装束だということは分かる。

「…たく、いい趣味してるぞこんなの初見殺しじゃねえか」

アマテラスに事前に聞いておいてよかった。まさか今見ている光景が自分の願いを言った後の未来の世界とか分かるかよ。アマテラスから聞いた話によれば見えている光景はもつと先の未来、何百年も先

の世界を見せると聞いた。一見先の未来が見えるのはいいことだがこれは罠だ。昔アマテラスが戦争を止めるために使ったらしく、その際に見えた光景が幸せに暮らしている人々の光景だったらしく何も疑問を持たず願いを言ったらしい。だがその結果、真逆のことが起こったらしい、戦争は終わったが被害が大きく、自身が見た未来の光景とはまったく違い、幸せな人なんて一人もいなかった。

つまりだ。何でも願いは叶うがその願いがどのような結果を残すのか、結果の未来は見えるがその間はどうなるのか分からない状態。「だからこそ、願い事は慎重にいかなければいけないって言われたけどな…安心したよ。この未来は正解だ。例えここで神を倒せと願ってもリスクが大きすぎる。だからこそ——」

そう言いかけた時、視界が元に戻った。溢れていた光は収まり、剣は後少し押せば台座にはまる直前になっていた。息を吸い、気持ちを落ち着かせる。

「人類に時間を与えてくれ。神を倒せる人物が現れるまで、一時の平和を俺たちに与えてくれ！」

言ったと同時に両手に力を入れ、剣を台座に完璧に刺した。すると剣が白く光出したと思えば突然体の内側から飛び出るように若葉たちの武器が出てきた。そして今度は剣が強くと若葉たちの武器は勢い良く天井を壊し、空中に止まったと思えば各武器がそれぞれの方向へと別れ始めた。

「……………これで…終わりだな」

武器がそれぞれの方向に飛んで行ったのを見届けた後、くつろぐのうに仰向けに寝る。

「後は頼んだぞ…姫神」

そう言い自分はゆっくりと目を閉じた。



## エピローグ

それは戦闘の時に起きたことだった。私たちがバーテックスと対峙してる時突然空島から一本の光の柱がたっていた。その光はすぐ収まったが少したつと空島から何かが出てきたのが見える。それは各方向に別れ飛んでいった。微かに見えたがあれは私の武器でたある大葉刈だった。飛んでいったのは全部で五つ、兄さんは一体何をしよう？

「っ、なに!？」

考え事をしてしていると突然強い地震がきた。揺れは強く、立つことが出来ないほどの揺れ驚くも事態はそれを見逃さなかった。

「またあの光、今度は五本も!？」

地震の原因はあの光の柱だ。地面から湧き出るように出ていき、各方向に五本囲むように立っていた。

「?バーテックスが、あの光を見て逃げてる?」

そしてバーテックスは光の柱を見た途端怯えるように全てのバーテックスが撤退していった。

その光景に呆然としていると光の柱が急激に強く発光しだした。

「っ!」

あまりの眩しさに私は目を瞑る。一体何が起こってるのか分からない、ただ今の私に出来るのは目を瞑ることだけ、そんなことを思いながら、光が晴れるのを待ち続けた。

「ん……………終わったの?」

体感で一分ぐらいだろうか、光が収まり目を開けていいほどになつたため目を開ける。

「……………うそ」

最初に視界に写ったのは青い空だった。この空は本物だ。私たちが日常で良く見る空だ。

「ぐんちゃーん!!」

名前を呼ばれ振り返る。遠くの方から友奈が手を振りながらこつちへと走っていた。

「高嶋さん！」

「ねえねえぐんちゃん！これってもしかして！」

「ええ、兄さんがやったのよ」

そう言うのと友奈はやったー!!と喜び抱きついてくる。少し驚くが喜びを隠せないのは仕方のないこと、私たちは勝ったんだから。誰一人も欠けることなく戦いに勝利した。それだけで喜びは溢れてくる。

「そういえば、みんなはどこに？」

「今若葉ちゃんたちは姫神さんと話してるよ、こつちこつち」

手招きをしながら若葉たちのいる方向へと歩いていく、私はその誘いに断るはずもなく付いていこうと一歩踏み出したとき。

「?.....今空島が光ったような..」

一瞬空島が光ったように感じ、首を傾げるがそれ以降は無かったため気のせいと思い再び歩き出した。

その日、人々は勝利を喜んだ。私たち勇者が主役として宴をし、テレビ局にインタビューなんてされた。戦いの後で疲れていたが、宴が始まった後にはみんな騒いでいた。だが、良い知らせを持ってきた私たちにそれ相応の対価が返ってきた。

郡徹、樹海の戦闘にて行方不明――

突然のことだった。大赦関係の人が急いでこちらに来て一番の知らせがこれだった。先程まで騒いでいた宴も一瞬で静まり、誰もがこの知らせに呆然とした。

誰もが希望を失いかけた時、その人は一通の手紙を私に差し出した。私は恐る恐る手に取り手紙を開き、声に出して読んだ。

『これを読んでるってことは俺はもうここにはいない。まあ分かってきっていたことだ。いつの日か忘れたが、一瞬だけ自分の体が透けて見えていたんだ。俺にはもう時間がなかった。勝手にいなくなっすまん。でも、本当にいなくなっただけじゃねえぞ。帰ってくるって約束したからには絶対に帰ってきてやる。だからお前たちは俺が

帰ってくることを楽しみに待ってる、いいな？

郡徹より』

「…楽しみに待ってる」だって、どうする？」

そう言い、視線をみんなの方へと向ける。兄さんのことを良く知っている若葉たち、そして諏訪の二人も、徹らしいと思いき笑い浮かべていた。周りの人たちは絶対に帰ってくることを確信し、また活気がわいてきて騒ぎだす。

私たちは声に出さず深く頷いた。絶対に帰ってくると約束したからには私たちも帰りを待とう。いつ帰ってくるのか分からないけどそれでも私たちは待っているから、だから兄さんも…ちゃんと帰ってきてね。

——「約束」だよ、兄さん……

その思いを胸に留め、この騒がしい宴を過ごした。

——あれから数ヶ月

あれから数ヶ月の月日が経った。戦いは終わり私たちはそれぞれの日々を過ごしていた。

「いただきます」

手を合わせ、いただきますをし朝食をとる。最近になってこの生活には慣れてきた。毎日早めに起き支度をした後朝食を作り、食べる。そんな毎日を送っている。

「うちそうさま」

また手を合わせ、ごちそうさまを言った後片付けに入る。それが終わると服装を整え、鞆を持って玄関の取っ手に手をつける。

「行つてきます」

振り返り誰もいない空間に言つて扉を開け部屋を後にした。

歩いてるなかこの数ヶ月間にながあつたか振り返る。

若葉さんは戦いが終わってもこの先の未来でまた勇者が戦うこと

になると考えて、ひなたさんと伊予島さんと共に日々研究に励んでい  
るらしい。

球子さんは趣味のアウトドアをやっていて、たまに全員誘って強制  
的に行かされたことがあったが、まあ良い思い出にはなったのかもし  
れない。

伊予島さんは若葉さん同様研究をしている。少し前になにか良い  
恋愛ゲームはないかと聞かれおすすめのソフトを教えた。確かに息  
抜きも必要だけど、あれからどうなったのかは私は知らない。

高嶋さんは変わらず元気に過ごしていた。よく私の部屋に遊びに  
きてくれてゲームやら雑談などをしている。

他にも色々あった。歌野さんは町の子供たちを集めて農業を体  
験させ興味を出させようとしたり、水都さんとひなたさんは巫女との  
修行を続けている。そういうえば最近になって兄さんが浄化で助けた  
人々が無事に退院したらしい、北海道、沖縄で戦っていた勇者も退院  
し、今はこの町の生活に慣れていこうと努力しているらしい。

そう振り返っているともう目的地の目の前になっていた。

「相変わらず騒がしいわね」

ドアごしでも聞こえる騒がしさにため息をついてしまいがもう慣  
れてしまったのでどうでもいい、ここにいっても始まらないので中に入  
ることにした。

「おっ、やっとききたな！」

「お久しぶりです千景さん」

「ええ、二人とも久しぶり」

最初に出迎えてくれたのは球子と杏だった。

「おはようぐんちゃん！」

「おはよう、高嶋さん」

そして次に友奈が変わらず元気に挨拶してきた。

こうして全員が集まると若葉がみんなの前に出て口を開いた。

「よし、みんな集まったな。休みの日に来てくれて感謝する。それで  
は続きを始めよう」

そう言うときひなたさんが作文用紙をみんなに配る。

この集まりは一ヶ月に一回行われ、教室に集まって未来にないを伝えるか考えそれをやる会になっている。そして今回、前回は『未来の勇者に何を伝えるか』だったが今回は『自由』というなんでもありのテーマだった。

「……………」

正直なにを書いたらいいか分からない。自由といっても未来に伝えるものだから余計分らない。みんなはもう書き始めてるし……どうしたら。

「どうしたのぐんちゃん？」

そんなとき、隣の席の友奈が聞いてきた。

「なにを書いたらいいか分からないの、高嶋さんはなにを書いているの？」

「えっと……私は自分が今思ったことを書いてるかな」

「思ってること？」

「うん、未来にないを伝えるかなんて考えると大変だから私は思ったことを正直に書いてるの」

「思ったことを正直に……ありがとう高嶋さん、参考になったわ」

「うん、どういたしまして」

友奈に教えてもらった通り、さっそく自分が思ったことを正直に書くことにした。ただ私が未来に何を思っているのかをそのまま正直に作文用紙に書いた。

それから時刻は昼になり、いつものうどん屋で昼食をとったあと、瀬戸大橋までみんなまで歩くことになった。

瀬戸大橋に着くと入り口には小さな寺が真ん中に陣取るように置いてあった。

「それにしてもここに兄さんの寺を作るなんてやりすぎよ」

「これでも最小限に抑えたほうらしい、人々は徹を英雄と思っているな、本来はもっと大きな寺を建てようとしたらしいぞ」

若葉の言葉にみんなは苦笑いをする。

「徹さん、いつ帰ってくるんでしようね？」

「大丈夫だつて！徹は必ず帰ってくるって！」

「たまちゃんの言う通り！とおさんは約束は守る人だからね！」

ひなたの言葉に球子と友奈は元気に答えた。

「……さて、そろそろ行くか、また一ヶ月後教室に集合しよう」

若葉の言葉にみんなは頷き、瀬戸大橋を後にしようと歩き始めた。

その時だった。

「たくつ、やつと帰ってこれた」

「えっ？……」

その声には聞き覚えがあった。いつも私たちのことを気にかけて自分のことは気にせず逆に私たちが心配してしまう始末。今となつてはとても懐かしく、帰ってくることをずっと待っていた人でもある。

「兄……さん……」

振り向くとそこにいたのは兄である郡徹の姿がそこにあった。

いつもの私服を着ていて、髪の色は白く染まっていた。

「ん？……久しぶりだな、みんな」

そう言い徹は私たちの方へと近づく。そして私たちが呆然としてるなか徹は目の前に立ち、口を開いた。

「約束通り、ただいまだ、みんな」

徹は笑顔で言った。それに私は微笑み、答えた。

「お帰りなさい、兄さん」

—— 郡徹は転生者である 完 ——